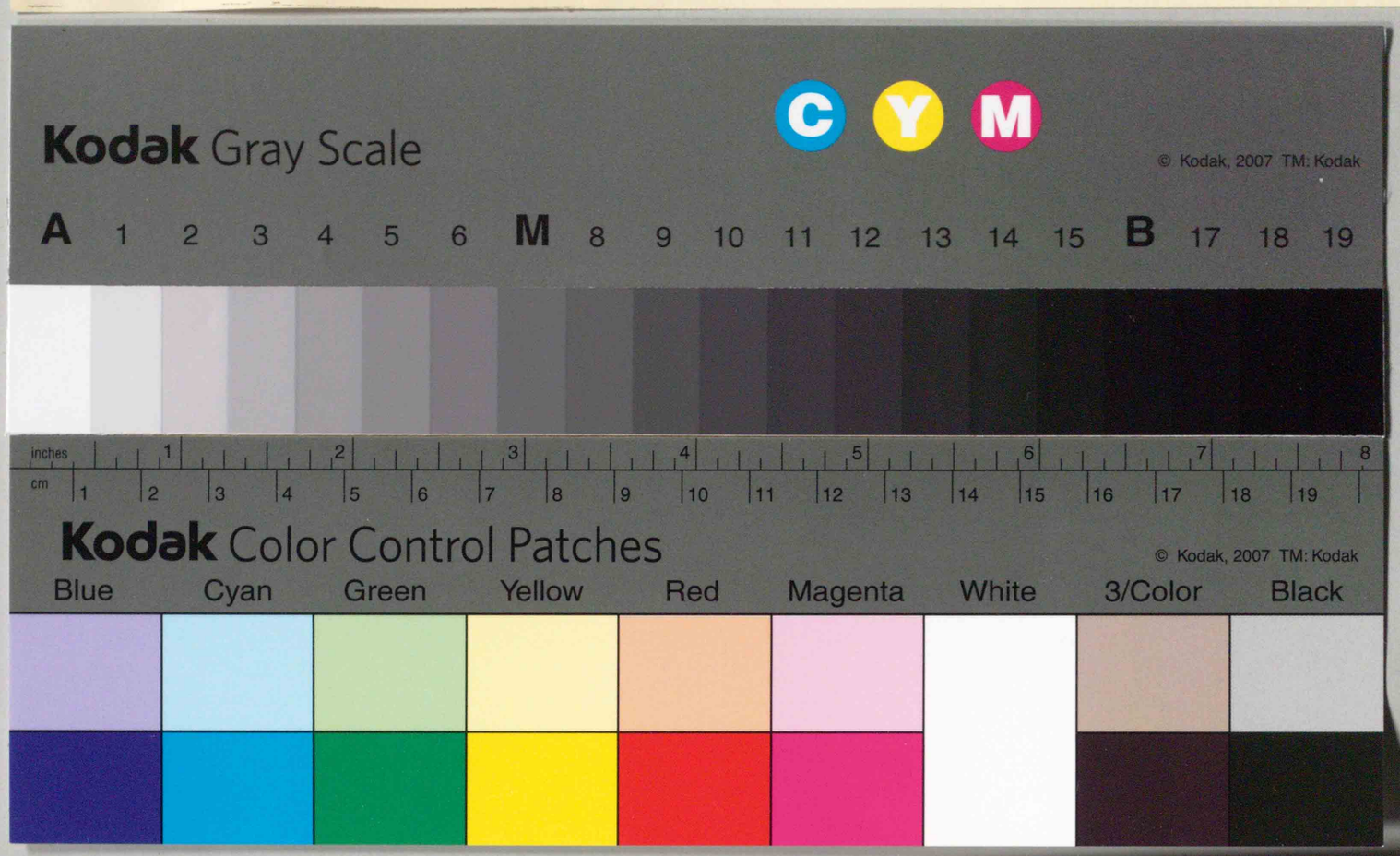
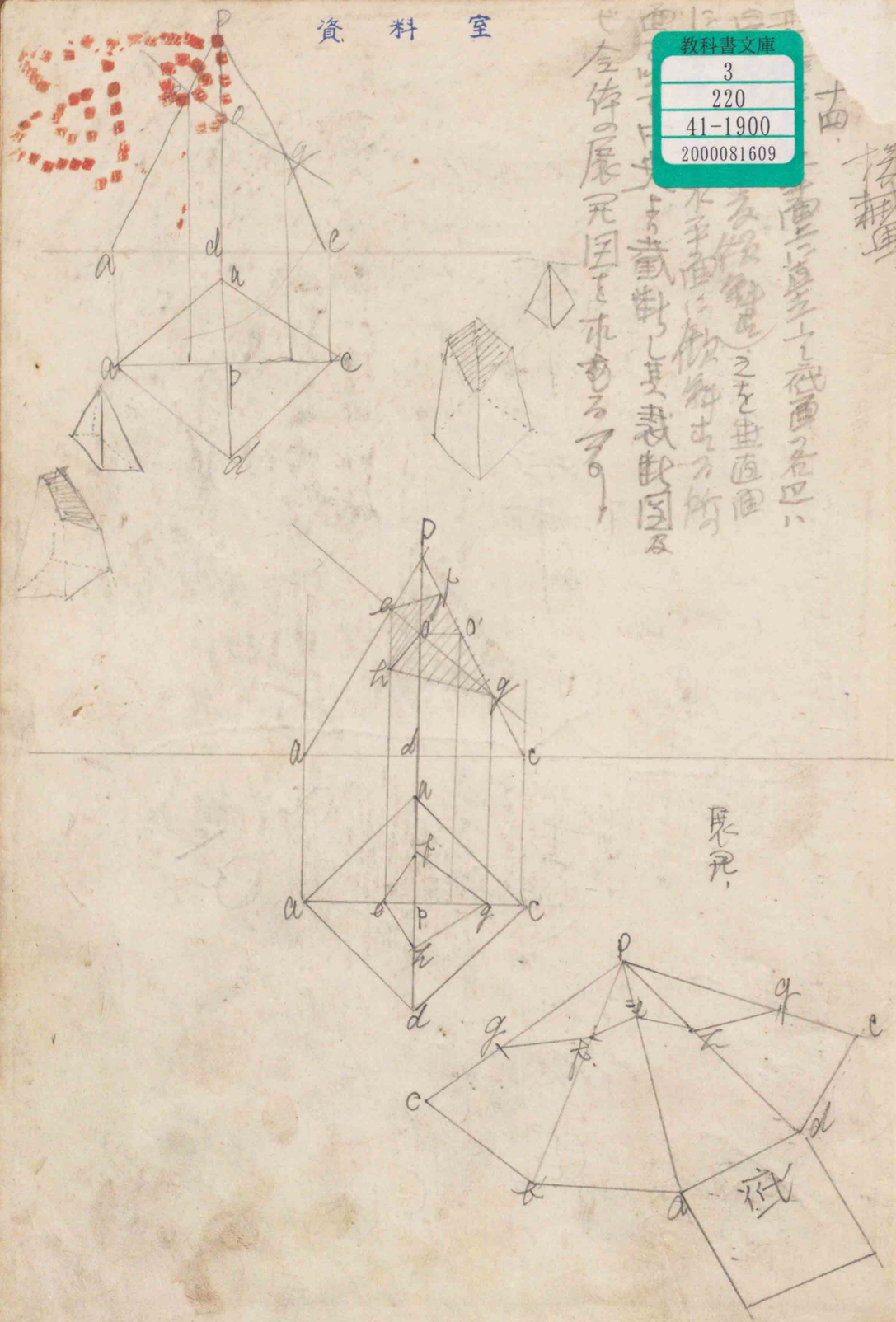
30115
教科書文庫
3
220
41-1900
20000
81609
M33
1900

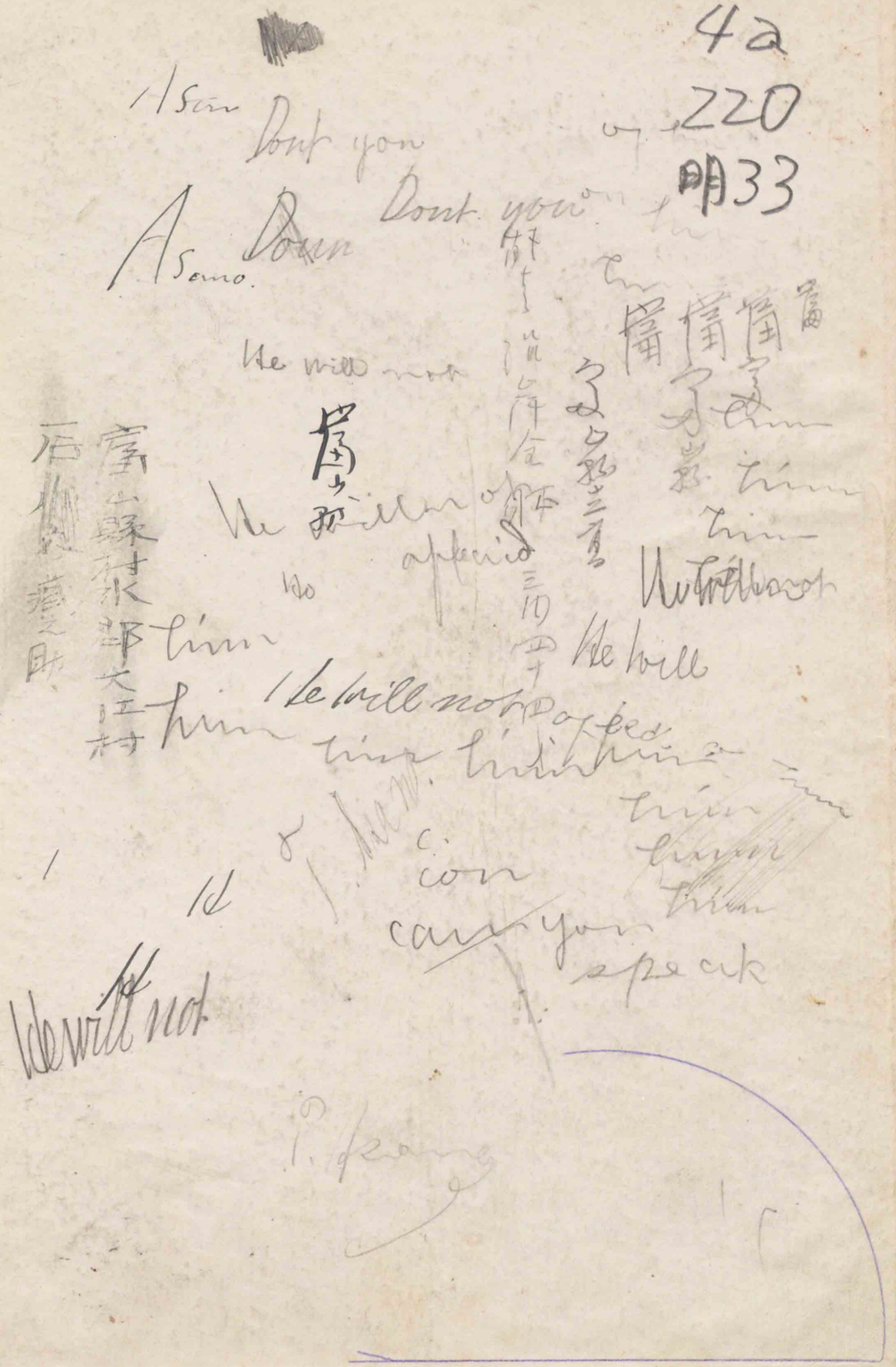


資料室

教科書文庫
3
220
41-1900
2000081609



42
220
明33



明治三十三年三月二日 文部省檢定濟 中學校歷史科教用書

市村瓚次郎編

刪正 東洋史要

東京 吉川半七藏版

広島大学図書
2000081609

東洋史要

G
GA
G
G&M

刪正 東洋史要例言

一余曩に東洋史要二卷を編して中學教科の用に充てむとしたりしが紙頁頗多く事實亦繁に過ぎたり因て更に其繁を刪り誤を正して本書一卷となす

一本書は東洋史要二卷を刪正せるものなるが故に更に事實の詳を知らむと欲するものは本書の原本たる東洋史要を閲覧すべきのみならず又拙著支那史及ひ支那史要を參考するを要す

一本書の附圖は他日別に出板せむと欲すれど當分暫く支那史要附圖を代用し本書の參照となすを要す

一書中重要なる時期の下に西洋紀元を割注とし殊に重要

広島大学
教
81609
図書

なる時期には日本紀元を記し西洋紀元を割注とす原本東洋史要の各章の末に附したる大事年表と對照せは支那の年號をも知るを得可し

明治三十二年十一月

編者識す

刪正東洋史要目錄

第一章　太古の傳說……一丁
第二章　夏殷の興亡　周室の興起……三丁
第三章　周室の盛衰……六丁
第四章　覇者の興起……十丁
第五章　晉楚の爭衡　吳越の興起……十三丁
第六章　秦の强盛　人文の發達……十六丁
第七章　合從連衡　秦の統一……十八丁
第八章　秦の政治　匈奴南越の興起……二十二丁
第九章　秦末の爭亂……二十五丁
第十章　漢初の政治　匈奴南越の强盛……二十八丁
第十一章　漢の封建及び文化……三十一丁
第十二章　匈奴及び西域諸國

第十三章　東北及び南方諸國……三十四丁
第十四章　漢の外國經略……三十七丁
第十五章　漢の內治　匈奴西域の服從……四十丁
第十六章　漢の內亂　後漢の中興……四十二丁
匈奴及び西域諸國
第十七章　東北及び西南諸族……四十五丁
第十八章　後漢の衰亂……四十八丁
第十九章　三國の分立……五十二丁
第二十章　晉初內外の形勢……五十五丁
西晉の大亂　東晉の興起
第二十一章　趙燕の強大……五十八丁
第二十二章　前秦の隆盛　西域及び東北諸國　六十二丁
前秦の分裂　東晉の衰亡

第二十三章　後魏の強大……六十五丁
魏と柔然西域諸國　宋と南東諸國
第二十四章　宋魏の爭衡……六十八丁
後魏の隆盛　齊梁の興亡　後魏の文化
後魏の分裂……七十一丁
第二十五章　南朝の文化　梁の衰亂
齊周陳の興起……七十三丁
第二十六章　突厥及ひ周齊陳隋
南北の異同……七十六丁
第二十七章　隋と近隣諸國……七十九丁
第二十八章　隋末の擾亂　唐の興起
唐初の制度……八十一丁
第二十九章　唐と突厥鐵勒及び西域諸國……八十四丁

第三十章　唐と高麗百濟新羅日本及び東北諸國……八十八丁
第三十一章　唐室の衰運　回紇吐蕃の强盛……九十丁
第三十二章　唐代の文化及び藩鎭宦官の禍……九十五丁
第三十三章　回紇吐蕃の衰弱　南詔の侵略　唐室の亂亡　五代の分裂……九十九丁
第三十四章　高麗の興起　契丹の强大……百三丁
第三十五章　交趾の……百三丁
第三十五章　周の經略　宋の統一　交趾の騷亂……百六丁
第三十六章　契丹の强盛　西夏の興起　交趾の形勢……百〇九丁
第三十七章　宋の法度更革及び外國經略……百十二丁

第三十八章　宋初の文化及び黨派の軋轢……百十四丁
第三十九章　金の興起　宋金の連合　遼の滅亡　西遼の建國……百十七丁
第四十章　宋金の和戰……百二十丁
第四十一章　蒙古の興起　宋金の攻守　金の滅亡……百二十三丁
第四十二章　蒙古の隆盛　宋の滅亡……百二十七丁
第四十三章　元初の外征及び內治……百三十一丁
第四十四章　元の衰亂　明の興起　明初の諸政……百三十五丁
第四十五章　欽察、伊蘭、察合台の形勢　帖木兒の興起……百三十九丁
第四十六章　倭寇　朝鮮の興起　韃靼安南の

形勢……百四十三丁
第四十七章　明の外患と宦官藩王の禍……百四十六丁
第四十八章　韃靼の侵略　倭寇　朝鮮の役
清の興起……百四十九丁
第四十九章　明代の文化及び其黨爭内亂……百五十三丁
第五十章　清の攻略　明の滅亡
清の統一……百五十六丁
第五十一章　莫臥兒帝國の形勢　西人の東漸
露清の衝突……百五十九丁
第五十二章　清と蒙古西域及び西南諸國……百六十四丁
第五十三章　清初の文化及び其衰運……百六十七丁
第五十四章　英國の印度經略　英清の戰爭
清國の内亂外寇……百七十一丁

第五十五章　中央亞細亞の形勢　英露清の
爭衡……百七十五丁
第五十六章　緬甸暹羅越南の形勢　佛清の
戰爭……百七十九丁
第五十七章　朝鮮の形勢　日清露の關係……百八十三丁

刪正
東洋史要目錄終

正刪　東洋史要

常陸　市村瓚次郎編

第一章　太古の傳説

太古亞細亞の東部なる支那の中原に移住して最早く文化の域に進みたる者を漢族とし其族長を黄帝とす當時支那には數多の種族ありて各地に割據〜南方には三苗、東方には嵎夷、萊夷、北方には葷粥及ひ蚩尤あり而して中原の地は神農氏の領せる所たりき黄帝因て神農氏を破り蚩尤を擒にし更に地を略して東は海に抵り西は空峒（甘粛省粛州高臺縣にあり）に至り南は江に抵り北は釜山（直隷省宣化府保安州にあり）に至りて葷粥を逐ひ都を涿鹿（直隷省涿州）に定めたり黄帝崩して後顓頊（黄帝の孫と稱す）帝嚳（黄帝の曾孫と稱す）帝堯相つぎて立つ帝堯は帝嚳の子にして都を平

太古の種族

黄帝の事業

堯舜の治世

陽（山西省平陽府臨汾縣）に定め女婿虞舜を擧けて相となし遂に其位を禪れり是を帝舜といふ帝舜は都を蒲坂（山西省蒲州永濟縣）に遷し能く堯の政をつぎたり故に後世治を言ふ者は皆堯舜を稱すされど苗族は叛服常なく屢漢族と爭へり唯漢族の文化遙に周圍の諸族に優れたるを以て漸く統轄の功を奏したりき

漢族の文化

漢族の宗教は最天を敬するにあり皇帝は天子と稱し天意を奉して諸政を行ふ官職も亦天工と稱して九官（司空、后稷、司徒、士、共工、虞、秩宗、典樂、納言）に分ち又四岳十二牧の制を設け巡狩述職の法を建て或は九等の賦を定め或は五刑の罰を明にし諸般の制度頗具はりて政府の組織よく整へり加ふるに天文曆法より詩歌音樂に至るまて頗發達し文字も既に發明せられ結繩に代へて事を記するに至れり實に是れ支那四千年の文化

大洪水

の淵源にして他の東洋諸國の開明も亦此の文化の賜を受けたること少からず

當時各地に氾濫したる大洪水あり堯は鯀を〳〵て之を治めしめしが久く功を見ず舜因て鯀の子禹を擧けて其任に當らしむ禹遂に治平の功を奏して各地を從へり是より禹の勢力漸く大に遂に舜の諸政を攝し且其禪を受くるに至れり其年代詳ならざれど大約我か紀元前千五百年頃にあるべし（西紀凡二千餘年前）

禹の治水及ひ其攝政

夏禹の治世

第二章　夏殷の興亡　周室の興起

夏の始祖禹は都を安邑（山西省解州）に定め洪水の後を承けたるを以て施政の方針は儉素を主として專ら民力を休養せむ

夏の内亂及び其中興

ことを務めたり且治水の功德は深く人民の心を服するに足りしかは遂に子孫世襲の風を開きたり故に禹の崩するに及びて其子啓位を嗣くされと諸侯には猶服せさる者ありき啓の子太康の時有窮の君羿は太康の外に畋せるに乘して其弟仲康を立てゝ國政を執れり其子相の時に及ひ羿遂に簒立したりしが其臣寒浞また羿を追ひて自立す然るに相の子少康其臣靡と共に寒浞を滅したり是より後十一傳して桀に至れり桀暴虐にして大に民心を失ひ遂に商の成湯に滅されたりき（西紀凡千六百餘年前）

夏の滅亡殷の興起

成湯は夏の諸侯なりしが自ら天意を奉したりと稱し伊尹を用ひて相とし漸く各地の諸侯を從へて遂に夏を滅し帝位に即きて亳（河南省歸德府商邱縣）に都し國を商と號す支那革命の風は是に至りて全く成れり

殷の盛衰

成湯より太甲を經て兄弟相續の風行はれて諸子の爭あり諸侯叛服常なかりしかと賢聖の君屢其間に起れり是を太戊、祖乙、盤庚、武丁とす就中盤庚は最著名の君にして都を殷（河南省河南府偃師縣）に遷し國號を殷と改め諸政を修めたりしかは諸侯皆來朝し四夷服從せり其後また衰へたりしが武丁に至りて傅說を相とし內政を修め外夷を討ち殷室また興れり然るに武乙の時都を朝歌（河南省衛輝府淇縣）に遷しよりまた衰へて振ふ能はず遂に紂の時に至れり是の時西方には周室の勢方に盛なりき

周の興起

周室の祖は帝堯の時に后稷の官となりて邰（陝西省商州）に封せられ〳〵が其裔太王は獯鬻（葷粥に同し）の寇を避けて岐（陝西省鳳陽府岐山縣）に遷り國を周と號す其孫文王賢德あり太公望等を用ひ仁政を施〳〵て民心を收め近隣の諸侯を服して都を豐（陝西省西

安府鄠縣）に定めたりかく周室の盛あるに方りて殷王紂は庶兄微子、大臣箕子、比干等の諫を聽かず大に暴政を施ししかば民心悉く離るゝに至れりされど文王は尚殷を伐たずして死し子武王立つ時に紂の暴政やまず比干を殺し箕子を囚へ〜かは微子は遂に殷を去れり是に於て武王は諸侯を率ゐて東征す牧野（河南省衛輝府淇水縣の南にあり）の戰に紂遂に敗死し殷室全く滅ひぬ（西紀凡一千百餘年前）

殷の滅亡

第三章　周室の盛衰

武王の諸政

周の武王既に殷を滅し新に先王の子孫を封し又多く功臣同姓を封し太公望に齊を周公旦に魯を召公奭に燕を與へ舊來の諸侯と交錯せしめ且紂の子武庚を殷に封して管叔と蔡叔とをして監督たらしめ箕子の囚を宥して朝鮮に封

周公の攝政

したり武王在位久しからずして崩し子成王立ち〜が年尚幼かりしかば周公は輔相となりて諸政を攝行す然るに殷の遺民周に從ふを悅はず管叔蔡叔もまた周公の專政を忌み武庚を擁して兵を擧く周公東征して其亂を平げ更に微子を宋に封じ殷の遺民を洛邑（河南省河南府）に移し周の殷に代りたるは天意を奉したる所以なるを諭したり周公又洛邑に營みて東都となし西都と並ひて海内を制せり是より周公は大に制度禮樂を修め召公と共に成王を輔けて太平の基を開きたりき

周の制度禮樂

周は舊來存在せる諸侯の外に多く同姓を封して王室の藩屏とし中央政府に天地春夏秋冬の六官を設け天官は冢宰、地官は大司徒、春官は大宗伯、夏官は大司馬、秋官は大司寇、冬官は大司空を長とす田制は井田の法により一井を九百畝

周初の外交

周室の衰運

こして八家に分與す賦稅は粟米の征、力役の征、布縷の征あり是を後世の租庸調の始とす學校は大學、小學あり禮、樂、射御、書、數を六藝と稱して學校の教科とし就中禮樂には最心を用ひたりき

かく制度よく備はり禮樂よく整ひしかは成王の世は海内太平にして周の威德外に及へり奄及ひ淮夷の亂ありしが成王親ら淮夷を征し奄を滅したり東北は息愼より矢を貢し南方は越裳より譯を重ねて來貢したりいとふ

成王より康王に至る間、周室は極めて盛なりしかと昭王の世に至りて漸く衰へ諸侯放恣にして四夷交侵す昭王は南巡して漢水の濱にて弑せられたり穆王嗣きて立ち徐戎の亂を平け又犬戎を征せしが反て諸侯の心を失へり夷王の時に至りては西北の戎狄漸く迫り又南方なる楚は頻に近

周室の中興

周室の東遷

傍の地を侵略すかく外は四夷の來侵せるが上に内は諸侯の勢漸く強くなり夷王は堂を下りて諸侯を見たり次て厲王暴政を行ひけれは國人相共に叛きて王を彘（山西省霍州府）に逐へり是に於て宰相共に政を行ふ是を共和と稱す厲王遂に彘にて崩し子宣王立つ時に四夷の來侵益盛なりしが宣王は親ら徐戎を征し又諸將をして西戎、玁狁、淮夷、荆蠻を伐たしめ遂に中興の業を成したりき然るに子幽王は寵妃に溺れて國事を恤へす遂に犬戎に弑せられたり平王の時に及ひ周室既に衰へて戎狄の勢益强きを以て遂に東都に遷れり是を周室の東遷とす時に我が紀元前百十年なり（西紀前七七〇年）

周の制度禮樂は歲月を經るに從ひて漸く頽れ同姓の諸侯は藩屏の効なく異姓の諸侯と共に併呑攘奪を逞くし中央

周の制度禮樂の頽廢

政府は其諸侯を制する能はず田制稅法も整はず學校の制も行はれず禮樂の如きは頗末節に陷りぬ故に春秋時代の生せるは決して偶然にあらざる也（春秋とは平王の四十九年より敬王三十九年に至るまで二百四十二年の間をいふなり）

第四章　覇者の興起

周室諸侯の內亂

戎狄の雜居

春秋の時に至りて王室は益衰へて內亂多く且列國との交爭あり諸侯には君を弑し父を弑すること行はれ又大は小を滅し强は弱を併せてその數漸く減し齊、楚晉、秦魯衛、宋、燕、鄭、曹、陳、蔡のみ列國の觀を有せり是の時に方りて戎狄益勢を逞くし內地に入りて各處に雜居し漢族の領有せる中原は將に戎狄に蹂躪せられむとす是に於て覇者興りて王室を尊び諸侯を連ねて戎狄を攘はむと企てたり是を齊の桓

齊桓の覇業

宋襄覇を圖る

公とす

齊の桓公は管仲を用ひて政をおこし鐵及び魚鹽の稅を取り兵制を改めて兵を農に寓し國富み兵强きに及ひ遂に宋の亂を平け魯に侵地を返し後周の單公、宋公、衞侯、鄭伯を鄄（山東省曹州府濮州にあり）に會して初めて覇となれり（西紀前七一六）時に山戎は燕を改め狄は衞を滅し邢を破りしかは桓公は山戎を斥け燕をして貢を周に納れしめ又狄を追ひて邢を遷し衞を復すかくて諸侯を率ゐて楚を征し遂に召陵（河南省許州府偃城縣にあり）にて盟をなす葵丘（河南省歸德府考城縣）の會は最其盛を極め諸侯と共に五條の約をなしたりきされと管仲死し桓公薨せるに及ひ齊に內亂ありて覇業振はす是に於て宋の襄公齊に代りて覇たらむことを圖れり時に楚は近隣の諸國を滅し其勢中原を動かす襄公因て楚に請ひて諸侯を會せしが楚に執はれ

たり後釋されて國に歸りしがまた楚と戰ひて敗績し遂に

晉文の覇業

覇業をなす能はざりき

當時晉の文公は出亡して齊楚の諸國に流寓したりしが西秦に入り穆公の助をかりて國に歸り覇業をなさむとを圖れり時に周に內亂あり襄王を逐ふ文公因て兵を出して其亂を平け襄王を復したり又宋が楚に圍まれ救を晉に求むるに方り文公は齊宋の兵を率ゐて楚軍を城濮（山東省曹州府濮州）に破れり（西紀前六三二）かく文公も亦尊王攘夷の功ありしかは王室の信を得諸侯の心を博し遂に覇業をなしたりき文公の死後晉は秦の穆公と釁を開くに至れり

秦穆の覇業

秦の穆公は百里奚蹇叔由余の徒を用ひて國政を修め諸戎を滅し遂に西戎に覇たり（西紀前六二三）又曾て兵を出して鄭を襲はむとし殽（山名河南省河南府永濟縣にあり）に至りて晉兵に要擊せられたり

（西紀前六二七）是より穆公晉を怨みて其地を侵せり後晉秦相爭ふと止まざりき

第五章　晉楚の爭衡　吳越の興起

楚莊の覇業

楚は莊王に至りて益强く洛水の上に至りて兵を周の境上に觀し又鄭を伐つ時に晉は楚と衡を爭ひて諸侯を扈（河南省懷慶府原武縣）に會せしが陳は楚を畏れて會せす晉因て陳を伐ちて鄭を救ひ楚と戰ひて其師を破れり尋て楚また鄭を圍みしかは晉は鄭を救ひ楚と邲（河南省開封府鄭州）に戰ひて大敗す（西紀前五九七）莊王薨して後楚は屢與國を率ゐて晉と衡を爭へりされと晉常に競はず是に於て吳をして楚の南を侵さしめむとし使を吳に遣はして好を通す是より吳晉相通するとなれり（西紀前五八五）

晉吳に通す

弭兵の會

晉楚の交爭止まざるを以て宋の華元は兩國の大夫を宋に會して盟をなせりされど遂に其效なく晉大に楚を鄢陵（河南省開封府鄢陵縣）に破りしことありき（西紀前五七五）後晉楚兩國共に其與國の叛服によりて屢相戰ひしかは宋の向戌は華元の遺志を嗣きて諸侯弭兵の會を宋に開きたり（西紀前五四六）されど亦其効なかりき後楚は南方に吳の患ありて力を北方に注く能はざりしかは晉は幸に事少なきを得たりき

吳王闔閭の强盛

吳は晉に通して兵制を改めたるより國勢初めて强く屢楚の南部を侵せり闔閭が自立するに及び楚の亡臣伍子胥を用ひて楚を伐ち遂に其國を蹂躪す（西紀前五〇八）然るに秦は兵を出して楚を救ひ越は虛に乘して吳を攻む闔閭因て吳に歸り越王勾踐と戰ひて敗死す後闔閭の子夫差は越を破りて勾踐を會稽山（浙江省紹興府にあり）に圍みしが遂に其成を許す（西紀前四

越王勾踐の覇業

陪臣の專横

田齊及び韓魏趙の興起

九）是より勾踐は范蠡、文種を用ひて竊に回復を謀れり夫差が兵を江北に出して晉と雄を爭ふに及ひ勾踐は其虛に乘して吳を伐つ楚も亦使を越に遣はして共に吳を謀らむとす後勾踐遂に吳を滅して覇となれり（西紀前四七三）

かく江南に吳越の二國交興りて衡を中原に爭ふに至りしが楚の勢は頗衰へて振はず故に晉も亦邊境の患少く遂に內憂を生するに至れり是を六卿の專横とす六卿の內范氏中行氏先つ亡び知氏次ぎて亡び韓魏趙の三氏其地を分ち

○六卿の專横

て政權を專らにし齊の田氏と使を通して共に主家を簒せむとを計れり周の威烈王の二十三年韓魏趙の三氏を封して諸侯となす（西紀前四〇三）是より後を戰國といふ次て安王の時又齊の田氏を封して諸侯となす（西紀前三八六）後田氏は齊を併せ韓魏趙の三氏は晉を滅したりき

第六章　秦の强盛、人文の發達

七國の形勢

戰國に至りて秦、楚、齊、燕、韓、魏、趙を七雄國と稱し秦は西方にあり齊は東方にあり楚は南方にあり燕趙は北方にあり韓魏は中央にあり其交爭春秋に比すれは頗激烈なりとす時に列國名君賢相輩出して各富强を計りしが秦の孝公と商鞅とを以て最盛なりとす

秦の孝公及ひ商鞅の政治

秦は西方に僻在し其風習中原に異なりしかば常に諸侯より夷狄の待遇を受けたり是に於て孝公大に發憤し衞人商鞅を用ひて富强の計をなせり（西紀前三五九）鞅は農を以て國を富ます本となし多く粟帛を致す者は其役を免し工商を事とし又怠りて貧なる者は收孥とす井田の阡陌を破りて地力を盡し分家の制を立てゝ戸口を增し又法を以て國を治む

る要とおし什伍の法を設け姦を告くる者を賞し姦を匿す者を罰し軍功ある者に爵を授け私鬪をなす者に刑を加ふかくて十年を經て國益富み兵益强くなれり時に魏は韓を伐ちしが齊は韓を救ひて大に魏を馬陵（直隸省大名府元城縣にあり）に破れり（西紀前三四一）商鞅因て魏を伐ちて河西の地を取れり其後秦の勢は益强く列國の交爭愈烈くして人材の輩出、學術の勃興亦前古に卓越す

學術の勃興

春秋の際より智識は頗發達し思想も亦自由を得たりしが戰國に至りて愈其智識思想に活動の勢を加へ諸家の學術盛に興れり春秋の末に孔子（自紀元前五五一至西紀前四七九）は魯に出て仁を唱ひて周公を尊奉し堯舜を祖述し禮樂を興して周初の盛に復せむとす老子は楚に出て道を唱ひて仁義禮樂の非を論し無爲自然を以て國を治め身を修むべゝといふ是の二

諸家の學術

家の學說は他日支那の思想界の二大潮流となれり戰國に至りて孟軻は孔子の說を承けて性善を論じ仁義を說く莊周は老子の意に則りて無爲自然の論を發揚す墨翟は兼愛の說を主張し揚朱は爲我の旨を唱道す其他申不害の刑名法術の論、公孫龍の堅白同異の辨、鄒衍の陰陽說、鬼谷子の縱橫學などありき孔老の說一は純に一は高かりしかと當時の諸國には行はれす反て申不害、鬼谷子の說を悅ぶ者多かりき故に韓の昭侯が申不害を用ひ蘇秦、張儀が鬼谷子を師とせるを以て見るべし而して蘇秦、張儀はよく其學へる所を實地に試み合縱連衡をなしたりき

第七章　合從連衡　秦の統一

秦は孝公より後益富强となりしかは諸侯は常に恐怖の念

蘇秦の合從

張儀の連衡

を抱きたり是に於て蘇秦は燕に趙と從親すべき所以を說き又趙に赴き六國合從して秦に當るべきを說き更に韓、魏、齊、楚に說きて合從を約す（西紀前三三三）秦の惠文王は大に懼れ齊魏を欺きて趙を伐たしめ遂に其合從を破れり尋て張儀は秦の相となりて屢諸國の兵を破り更に出て丶魏の相となり魏をして秦に事へしめ復入りて秦の相となれり時に秦は巴蜀を取り（西紀前二一六）又齊を伐たむとし齊楚の從親を憂ふ張儀因て楚に使し懷王を欺きて齊と絕たしめ又楚をして秦に結はしめ更に韓、齊、趙、燕に說きて秦に事へしめたり（西紀前三一一）是を連衡とすされと秦の武王の立つに及ひ張儀秦を去りしかば連衡また破れたり

秦の武王は屢韓魏の地を略しまた韓、魏、齊と楚を伐ち懷王を囚ふかく秦の勢益盛なりしかば齊、韓、魏、趙、宋共に秦を伐

列國の交爭

ち鹽氏（山西省蒲州にあり）に至りて還れり（西紀前二九六）齊の湣王は向きに燕を破り後燕趙と共に中山を滅し又宋を滅〜て其地を併す是に於て齊、秦の勢最強く一時東帝西帝と稱したりき（西紀前二八八）列國齊の強大を憂へたりしが燕の昭王樂毅を將となし秦、韓、魏、趙の兵を連ねて齊を破れり時に齊の七十餘城皆下りしが田單の力によりて纔に回復するを得たりき（西紀前二七九）

秦の遠交近攻

秦の昭襄王は白起をして楚を破らしめ又連年韓、魏、趙の地を略す時に范雎は秦の相となり遠交近攻の策を定めて益近國を侵し大に趙を長平（山西省澤州府高平縣西）に破りしかは秦の威天下を震動す（西紀前二六〇）既にしてまた趙を伐ちしが趙の平原君は魏の信陵君、楚の春申君の援をかりて秦軍を破れりされと秦の勢衰へずまた韓を伐ち趙を攻めたりしかは周の

秦兩周を滅す

赧王大に恐れ列國に命して秦を伐たしめむとす時に周は東西に分れたりしが秦遂に西周を滅し後また東周を滅す時に我か紀元四百十二年なり（西紀前二四九）

秦王政立つ

秦の莊襄王は呂不韋を相となし屢魏を伐ちしかは魏の信陵君五國の兵を率ゐて秦を伐ちたり尋て莊襄王の子政位に上りしが年尚幼ありしかは呂不韋諸政を總理し毎年列國の地を略す是に於て楚、趙、魏、韓、衞の五國合從して秦を伐ちしが反て秦兵に破られたり是より秦益侵略を務め遂に韓を滅しまた趙を滅す趙の公族別に代國を建つかくて秦の境は燕に迫りしかは燕の太子丹、荊軻を遣はして秦王を刺さしめむとしたりしが果さざりき既に〜て秦は魏を滅し楚を滅し又燕を滅し代を滅し遂に齊を滅したり是れ我が紀元四百四十年なり（西紀前二二一）是より海内一統し天下の形

秦六國を滅す

勢大に變するに至れり

第八章　秦の政治　匈奴南越の興起

秦の六國を統一するに及び其境域頗廣大にありしかは朝廷の規摸、政治の機關また一變せさるを得す是に於て秦王政遂に始皇帝と稱し自ら呼ふに朕と稱し命を制となし令を詔と稱し正朔を改め謚號を廢し阿房宮を造りて壯觀を極め又屢海内の各地を巡狩す中央には政府に丞相、大尉、御史大夫を置き地方には郡縣の制を行ひ郡毎に守、尉、監、を置きたり（西紀前二二一）蓋戰國の際には門閥世襲の俗全く破れて封建の原素は漸く消滅し列國の領内には頗郡縣の制を布ける者ありき故に始皇は李斯の議によりて郡縣の制を用ひ權力を中央政府に集めたりき

秦の郡縣制度

始皇は更に衡石を同くし丈尺を一にし文字を改めて文書を同くせむとを期し又書を焚き儒を坑にして人心を一にせむと企てたり初め戰國の時學術甚盛にして諸家輩出し各其說を主張したりしが秦の時に至りても其諸家猶存し各其學によりて政府を非難したりき是に於て李斯は建議して醫藥卜筮種樹の書を除くの外は人民私有の書を焚きて學說の根原を絶ち悉く標準を政府の法令に取らしめむとす始皇遂に其議を用ひて天下の書を焚きしが猶諸生の誹謗をなす者あり因て咸陽の諸生四百六十餘人を坑したり（西紀前二一二）是れ實に學說分裂して人心統一せざりし反動なりとす始皇既に六國を滅し統一の政を布き富豪を移し兵器を銷し海内また敵たる者なかりしが境外の關係は頗る多かりき是を匈奴南越とす

秦の焚書坑儒

秦匈奴を斥く

秦南越を略す

匈奴は蒙古地方の游牧種族にして古の獫狁、葷粥と同種なりと稱す戰國の時燕、趙、秦の三國は共に地を接せるを以て皆其邊境に長城を築きて其侵寇を拒きたりき始皇の六國を統一するに及ひて蒙恬に命し數十萬の衆を率ゐて匈奴を伐たしめ河南（内蒙古オルトス）の地を取りて塞をなし遼東（奉天省錦州附近）より臨洮（甘肅省鞏昌府）に至る間に長城を修築したり是を萬里の長城といふ（西紀前二一四）蒙恬上郡に屯し始皇の長子扶蘇其軍を監し秦の勢威は漠北に振へり又南越は古の越裳にして越王勾踐と其種族を同くす始皇其侵寇止まざるを以て兵を出して其地を畧し南海象郡を置き五十萬の民を發して五嶺を守らしむ（同上）秦の勢威また南方に振へりされと匈奴南越の關係より人民多く兵役に就かさる可からす法令慘酷にして賦斂愈重く六國の遺民皆亂を思へり

始皇崩す

唯始皇の積威によりて敢て發せさりしが始皇崩し宦官趙高が李斯と謀りて少子胡亥を擁立し二世皇帝と號するに及ひ天下また大亂の世となれり

第九章　秦末の爭亂

群雄の蜂起

始皇の統一政治は外形に止りて未だ人心を合するに至らず其暴政は反て天下の望を失へり故に二世の暗愚にして趙高が權を恣にし秦の皇族大臣を殺して秦室孤立の勢を加へたるより陳勝、吳廣先つ兵を擧けて反す諸郡縣爭ひて蜂起せり（西紀前二〇九）勝は自立して楚王と稱し其臣或は趙王と稱し或は燕王と稱す齊、魏、趙の王族もまた各王と稱す既にして陳勝、吳廣は殺されしが楚の項梁は其姪項籍と兵を吳中に起し沛の劉邦は兵を沛に起すかくて項梁、項籍は吳中

の壯士八千人を率ゐて北上す劉邦等皆其麾下に從へり范増、項梁に說き楚の懷王の孫心を立てゝ懷王と稱す時に秦の將章邯大兵を率ゐて東征し魏の兵を破り又項梁を破殺し進みて趙の鉅鹿（直隸省順德府平鄉縣）を圍みたり楚の懷王項籍をして趙を救はしめ劉邦をして秦を伐たしむ項籍大に秦軍を破り章邯等を降しゝかは其威諸侯の間に振へり秦室には趙高益權を專にし李斯を殺して自ら丞相となり遂に二世を弑して公子嬰を立つ嬰帝位に即きて趙高を族殺せり時に劉邦進みて覇上に至りしかは秦また防き戰ふ能はず嬰は遂に面縛して降れり時に我か紀元四百五十五年なり（西紀前二〇九）項籍も亦既に河北の地を定め諸侯の兵を率ゐて關中に入り遂に地を割て其功將を善地に王とし舊諸侯を惡地に移

鉅鹿の役

秦の滅亡

し又義帝の約に背きて劉邦を漢中（陝西省漢中府）に封す劉邦漢中に至りて蕭何を丞相とし韓信を大將とし張良を謀臣とす項籍は秦の降王を殺し始皇の墓を發き咸陽の宮殿を焚き遂に東方に歸り陽に懷王を尊ひて義帝とし自立して西楚の覇王となり彭城（江蘇省徐州府銅山縣）に都し後遂に義帝を放弑したりき

既にして項籍は自ら兵を率ゐて東方の叛者を征す時に劉邦は兵を出して關中の地を略し進みて諸侯を從へ洛陽に入りて義帝の喪を發し遂に虛に乘して彭城に入れり項籍因て精兵を率ゐて引き返し大に漢軍を睢水の上に破れり劉邦走りて（河南省河南府滎澤縣）滎陽に至り軍勢また振ふを得たり尋て韓信をして河北を征せしめ魏を破り趙を滅し燕を下す彭越、英布の徒も亦漢に歸す時に項籍滎陽を圍みしが劉

劉邦漢王となる

項籍西楚の覇王と稱す

漢楚の交爭

漢楚を滅す

邦逃れて黄河を渡り韓信の軍を領し信をして別に兵を發して齊を伐たしめまた黄河を渡りて項籍と廣武（山名河南省開封府滎澤縣にあり）に相持す時に韓信は既に齊を破り進みて楚を擊たむとす項籍因て漢と天下二分するを約し兵を罷めて歸らむとす劉邦其約に背きて追擊し遂に楚を滅して帝位に即く是を漢の高祖皇帝といふ（西紀前二〇二）

第十章　漢初の政治　匈奴南越の强盛

漢初の郡國制度

漢の高祖は都を長安（陝西省西安府長安縣）に定め朝廷の規模大抵秦の制に據れり地方制度に至りては周秦の弊に鑑み封建と郡縣とを並び用ひ郡守と國王とを相交へて配置したり高祖の意同姓を以て藩屏となさむとしたりしかと帝業は異姓の諸王の力に因れる者多かれは俄に除くべきに非ず故

漢初の封建

匈奴の冒頓立つ

に其初には楚（韓信）梁（彭越）淮南（英布）燕（臧荼）韓（韓王信）趙（張耳）長沙（吳芮）の諸國は皆異姓の諸王たりき然れと數年の間に皆廢滅し僅に長沙王のみ存したりき是に於て同姓の諸侯益封せられ齊（高祖の子劉肥）楚（同弟劉交）代（同兄劉喜）趙（同子劉如意）吳（同姪劉濞）淮南（同子劉長）梁（同子劉恢）淮陽（同子劉友）燕（同子劉建）の諸國あり大なる者は七十餘縣若くは五十餘縣を有したりき高祖よく秦末の亂を定めて再一統の業を成したれと匈奴の侵寇は益憂ふべきに至れり

秦末の亂より邊境の備なかりしかは匈奴は漸く河南の地に入り東は東胡西は月氏と爭へり頭曼單于の子冒頓單于が立つに及び東は東胡を破り西は月氏を走らし南は樓煩、白羊を併せ悉く蒙恬が略せる地を復し遂に燕代を侵す時に漢楚相爭ひて北顧の遑なかりしかは冒頓の勢益盛にして近隣諸族を服し一大邦國を成すに至れり高祖の初に冒

匈奴漢に寇す

頓漢に寇しゝかは高祖親征して白登（山西省大同府大同縣東）に至り匈奴の兵に圍まれ纔に詭計を用ひて免るゝことを得たり（西紀前一九八）時に漢は國内諸侯分立し權力中央に歸せざりしかば高祖は遂に婚姻を通して和親を結ひ惠帝呂太后の時も猶和親を維持ゐたりき後文帝か立つに及ひ（西紀前一七九）冒頓は北地（陝西省慶陽府の地方なり）に寇ゐ且書を漢に贈りて頗傲慢なり〜が文帝は書を贈り物を遣はして再和を通す尋て冒頓死して老上單于立つ文帝また宗室の女を老上に嫁す然れど猶屢漢に寇し雲中、遼東、最其害を蒙れり當時憂國の士賈誼鼂錯の徒は皆匈奴に關して論述せる所ありき文帝の節儉を尚ひ奢侈を戒め殊に農事を尚ひて富强の基をなせるは他日匈奴を處する地をなさむこせる爲めなりとす

匈奴と漢の文帝

漢匈奴と和す

南越王趙佗立つ

文帝また使を南越に遣はす初め秦末に南海郡の尉趙佗、中

原の亂に乘じて桂林、象郡を併せ自立して南越王と稱す漢の高祖因て佗を立てゝ南越王となしたりき呂太后の時に佗自ら南武帝と稱し長沙に寇す太后將を遣はして出征せしめしが功なかりき是より閩越、駱越を役屬し天子の制を僭したり是に於て文帝使を遣はゝ佗を諭して帝號を去らしめむとす佗臣と稱して物を献せしが其國に於て帝號を稱することは舊の如くなりき（西紀前一七九）

漢と南越

第十一章　漢の封建及び文化

初め呂太后、攝政の時に諸呂を立てゝ王となしゝが太后の崩するに及ひ外は齊王襄兵を擧けて諸呂を討たむとし内は陳平、周勃等相謀りて諸呂を誅す高祖が同姓を封して藩屏となせる効は是に至りて顯はれたりと謂ふべし（西紀前一八〇）

封建の効果

諸王の強僭

吳楚七國の反

諸侯の削弱

然るに諸侯は年久く王位にありて漸く驕恣に流れ且親族の關係漸く遠くなりしかは文帝の位に即くに及ひて頗漢の法に從はす吳王濞の如きは窃に異志を抱き楚趙の諸國も亦強僭するに至れり是に於て賈誼、鼂錯は諸侯の地を分つへきことを論す文帝悉く其言に從はさりしかと齊を分ちて六國（齊、濟北、濟南、菑川、膠東、膠西、）となし淮南を分ちて三國（淮南、衡山、廬江）となしたりき

「景帝の立つに及ひ鼂錯の說により趙、楚、膠西の地を削り又吳の地に及ひしが吳王遂に膠西、膠東、菑川、濟南、楚、趙の六國と共に兵を擧けて反す景帝因て周亞夫を將とし諸將を率ゐて東征せしめ遂に其亂を平けたりき（西紀前一五六）是より景帝益諸侯の權力を削り又梁を分ちて五國（梁、濟川、濟南、濟陰、山陽）となしたりき武帝の立つに及ひまた趙を分ちて六國（趙、平原、眞定、中山、廣川、河間）

漢初の學術

儒教及ひ文學

となし又推恩の令を用ひて益諸侯の地を分ちしかは諸侯は纔に數縣の地を有することゝなり遂に政權統一の實を擧くるに至れり（西紀前一四〇）

「初め秦に焚書坑儒の厄ありしかと遺儒古老の存せる者猶多く各其學を奉して各地に居れり故に孔老の學は論かし申、商、蘇、張の說を治むる者も多かりき武帝は亟相衞綰及ひ董仲舒の說により儒教を尙ひ大學を設け五經博士を置きたり（西紀前一三六）是より儒教は後世の政治道德の標準となれり武帝又詞賦文章を好みしかば司馬遷、司馬相如、東方朔、枚臯の徒輩出す然れと政府の標準は儒教にありしかはまた申、商、蘇、張の言をなす者なく漸く人心統一の實を擧くるに至れり」

武帝は雄材大略ありて最功名の心に富み文景以來國家殷

富の時に際し政權と人心との統一を機とし漢の全力を外國經略に傾けたりき

第十二章　匈奴及び西域諸國　東北及び南方諸國

匈奴

「匈奴は景帝の時に軍臣單于（老上單于の子）位にあり景帝また和親を通し公主を嫁したりしかと其の侵寇猶止まず屢雁門、上郡の地方に入れり當時匈奴の西方には數多の邦國あり」鄯車（新疆省なる羅布泊の南にあり）車師（新疆省土魯番、キチーロ）龜茲（同庫車）の諸國は皆匈奴に服し

烏孫康居大宛

烏孫（伊黎の地方）も初めは匈奴に屬す烏孫の東は匈奴に接〜西は大宛（コーカンド、タシケントの地方）に界し西北は康居（イシクル湖アラル海の地方）に連れり大宛は康居の南にあり大宛の西南を大月氏とす初め月氏は敦煌祁連（甘肅省甘州府張掖縣西南）の間に居りしが匈奴に破られ後また烏孫に

大月氏

破られて西走し大夏（バクトリヤ）を破りて嬀水（アムダリヤなり）の上に國し其近隣に雄視するに至れり大月氏の南に罽賓（カブル地方）あり罽賓の西に安息あり秦の始皇の頃に「アルサケス」といふ者兵を起して「ペルシヤ」の大半を領す是を「パルチヤ」の祖とす漢に安息といふは其王の姓によれり漢の景帝の頃に「ミスリダテス」一世（西紀前一七四立つ）出て〜近隣を征服し西方羅馬と其雄を

安息

身毒

爭へり又罽賓の西南に身毒（即印度）あり昔時迦毗羅（カピラバ）蘇（スッ）都王の子釋迦牟尼（西紀前六八五死す）婆羅門教の弊を破りて佛教を興せり是を佛教の始祖とす其後二百餘年を經て摩揭陀（マカダ）の阿育王出て〜大に佛教を振張〜たりしかは佛教は遂に中央亞細亞に入りて各種族の宗教となれり故に漢の武帝が儒教を尊崇せる時に方りて佛教は既に東漸の基を開きたりといふべし」

佛教東漸の基

匈奴の東方には東胡及ひ朝鮮あり東胡は匈奴に破られて東走し鮮卑、烏桓の兩山を保ち遂に分れて二となれり是を鮮卑、烏桓とす

朝鮮

朝鮮は箕子の子孫相づき四十代を經て箕準に至れり時に秦末の亂に際して齊、燕の民往き歸せる者多かりき尋て燕人衞滿、箕準に屬して西境を守りしが後遂に齊、燕亡命の民を從へ箕準を襲ひて其國を奪ひ都を王險(平壤)に定めたり是より衞滿は其近傍を從へて頗勢を有しけるが再傳して右渠の時に至れり

南越、閩越

南方にては南越王趙陀死して其孫胡位にありしが閩越の勢最強くして南越の邊境を侵し又東甌(浙江省杭州府)を圍み諸越互に相爭へり南越の西には苗族の君長頗多く中に夜郎(貴州省南籠府等の地)を最大なりとす夜郎の西北には滇(雲南省雲南府の地方)邛都(四川省寧遠府の地)嶲(四川省越嶲府免寧縣の地方)徙都(四川省雅州府清溪縣)冉駹(四川省茂州府地方)を最大

なりとす駹の東北には氐種の君長多かりき

第十三章　漢の外國經略

匈奴を征す

武帝の時匈奴は漢に寇しゝかは武帝は衞青等を遣はし河南の地を收めて朔方、五原郡を置く後匈奴朔方を侵しゝかは衞青等出征して沙漠を渡れり(西紀前一二二)既にして匈奴の昆邪王降りしかは其地を以て郡となす初め張騫月氏に赴き共に匈奴を攻めむと計り途にて匈奴に囚はれたりしが遂に逃れて康居、大宛、大月氏の諸國を經て還り具に西域諸國の國狀を陳す昆邪王の降るに及ひ西域の路通したりしかは烏孫に結ひて匈奴の右臂を斷たむとしまた張騫を遣はす(西紀前一一五)是より西域との交通開け漢使は安息、犂靬(羅馬)身毒の諸國に至り西域人の漢に來るもの亦多かりきかくて匈

西域に通す

南越を下す

東越南夷を併す

朝鮮を征す

樓蘭車師を下す

奴は右臂を斷たれて稍衰ひしが衛青は霍去病と共に兵を出して匈奴を驅逐し青は闐顔山（外蒙古喀爾喀地方）に至り去病は狼居胥山（喀爾喀カラナリンの近傍）に至りて還れり是より匈奴遠く逃れて漠南に王庭なかりき

武帝又既に閩越を破り東甌を移し東越を立て夜郎を郡とし卬、筰、冉駹を縣とゝたりしが南越の亂に及ひまた其國を滅して九郡（儋耳。珠崖。南海。蒼梧。鬱林。合浦。交趾。九眞。日南）を置きたり（西紀前一一一）時に南夷及ひ東越の兵來り會せす漢兵因て東越を平け又南夷を郡とおす尋て卬、筰、冉駹、滇を郡となす是に於て南方の地皆漢の版圖に入れり

朝鮮王右渠、辰國を拒みて漢に通せしめす又漢の使者を殺ゝしかは武帝は諸將をして海陸兩路より往き征せしめ遂に其國を平け四郡（眞番。臨屯。樂浪。玄菟。）を置きたり（西紀前一〇八）又樓蘭、車師

烏孫に通し大宛を征す

武帝神仙を信す

漢室の疲弊

武帝崩ず

が西域の路に當り屢漢使を劫かせるを以て其地を征定したり（西紀前一〇八）尋て翁主を烏孫に嫁し益交を厚くして共に匈奴を伐たむとす又大宛が漢使を殺せるを以て李廣利をして征定せしめたり（西紀前一〇一）是より漢の威は西域に振ひ匈奴は益孤立の狀に陷れりされと漢も亦是によりて疲弊したりき

武帝は征伐を事とし外國に通ゝたるのみならす神仙を信して方士を用ひ屢海内を巡り樓臺園池を營み奢侈を極めたりゝかは漢室も亦困厄の境に陷れり武帝因て商賈を任用ゝ利を興し財を得るを務めたり時に吏民の法を犯す者多く東方の地は盜賊横行し長安にはまた巫蠱の亂起れり武帝因て哀痛の詔を下して人心の將に崩れむとするを防きたり既にして武帝崩して昭帝立ち（西紀前八七）漢の方針また

一變するに至れり

第十四章　漢の內治　匈奴西域の服從

漢の內治外交の一變

昭帝年幼なりしかは霍光武帝の遺詔を受けて政を攝す時に燕王旦、上官桀等の不軌を謀りしことありしが皆誅に伏せり（西紀前八〇）霍光は專ら民力を休養せむと欲し窮乏を賑はし賦役を輕くし又對外の政策は頗收縮の方針をとれりされど猶兵を出して烏桓を討ちしかは匈奴は漢を懼れて寇をなさゝりき（西紀前七八）昭帝の崩するに及ひ霍光は昌邑王賀を立つ賀淫虐なりしかば霍光更に宣帝を立てたり（西紀前七四）

漢の宣帝立つ

霍光の薨するに及ひ霍氏の族黨反を謀り遂に宣帝に誅除せられたり（西紀前六六）宣帝聰明にして能く心を政治に用ひ海內よく治りしかは稱して漢の中興の主といふかくて漢は

漢烏孫を救ふ

匈奴の衰亂

漢西域を從ふ

西域都護を置く

匈奴の分裂

再勢威を匈奴西域に振ふに至れり

匈奴は宣帝の時に至り烏孫を攻めしかは宣帝諸將を遣はして烏孫を援けしめむとす匈奴因て遁れ去れり（西紀前七二）尋て常惠、烏孫に赴き其兵を發して匈奴を伐ち之を破れり匈奴又烏孫を攻めたりしが大雪に逢ひて士馬凍死し且丁零烏桓烏孫に攻められ其勢大に衰へて漢の邊境頗事少なかりき既にして鄭吉は車師を征して其地に屯田す馮奉世は莎車を征して別に王を立て趙充國は西羌を征して金城の屬國を置きたり是より匈奴は益衰へて振はす日逐王其衆を率ゐて來降す鄭吉遂に都護となりて天山の南北を併せ護し烏壘（庫車の地方）に居れり（西紀前六〇）是を西域都護の始めとす後匈奴に五單于の爭あり國內益亂れたりしかは漢の邊境は益事なきを得たりき後匈奴は呼韓邪單于と郅支單于と

匈奴漢に従ふ

の分領に歸せしが郅支の勢甚強きを以て呼韓邪は遂に漢に來朝し郅支も亦使を漢に遣はしたり（西紀前五一）元帝の時に及ひ郅支は西走〜て呼揭（伊黎の西方）を破り堅昆（今の「エニセイス」河及「イルチス」河の傍の近）を下し丁零を從へて都を堅昆の地に定め屢烏孫を攻めたり時に康居は郅支を迎へて共に烏孫を伐たむとす西域の都護甘延壽康居を襲ひて郅支を斬れり（西紀前三六）呼韓邪は國に歸り漸く其衆を定め西北の地方全く定まれり

漢の宦官外戚の患

王莽の專政

第十五章　漢の内亂　後漢の中興

元帝の時宦官は外戚と黨を結ひ帝の師傅を斥けて朝政を專にす（西紀前四七）成帝の立つに及ひ宦官の患を除きたれと其外戚王氏の勢は漸く強く王鳳大司馬となり〜より諸弟相つき遂に王莽に至れり後王莽は平帝を擁立し尋て又平帝

王莽漢を簒す

を毒殺し孺子嬰を立てゝ自ら諸政を攝し漢室を簒せむとしたりしが劉氏の諸侯は外戚を制する力なく中に兵を擧けたる者ありしかと皆討滅せられたり是に於て王莽遂に漢室を簒して帝位に即き國を新と號す時に我が紀元六百八年なり（西紀八）王莽は天下の田を王田となし奴婢を私屬となし皆賣買するを得ざらしめ或は職官の組織を改め或は州縣の名目及ひ境界を變し或は新に貨幣を製し或は州縣に諸種の稅を課せしかは人民其堵に安せず且外交の道を失ひしより諸外國も亦皆叛くに至れり

王莽の諸政

匈奴の叛

匈奴は久く漢に服屬したりしが王莽の時に及ひ西域の諸國を伐ち又邊境を侵す王莽因て兵を發して匈奴を征せむとし天下騷然たりき（西紀一一）又扶餘の種族は滿洲北部にありしが其部族また南方に下り卒本扶餘（盛京省懷仁縣の地方）の地に至

高句麗の興起

りて國を建つ是を高句麗とす王莽其兵を發して匈奴を伐たむとす高句麗從はすして邊境を侵す(西紀一二)西域諸國は王莽が威信を失へるを見て焉耆先つ叛きて都護を攻殺す是より西域の交通遂に絶えたり(西紀一三)西南の地方には鈎町王

西域鈎町の叛

の地方)の反あり王莽南討せしめたれと功なかりき(西紀一二)既

各地の亂擾

にして各地に兵を起す者多かりしが漢の宗室劉秀は其兄縯と共に兵を舂陵(潮北省襄陽府棗陽縣)に起し新市、下江、平林の兵と

王莽の滅亡

勢を合す(西紀二二)尋て諸將漢の宗室劉玄を立て帝とな〜宛(河南省南陽府)を取りて都を定めたり尋て劉秀大に王莽の軍を昆陽(河南省南陽府葉縣)に破りしかは四方の豪傑爭ひ起りて漢に應せる者多かり漢軍遂に長安に入りて王莽を殺したりき(西紀二三)劉玄は長安に入りて都したりしが劉秀は河北の地を徇へ又河内燕趙の地を下し遂に帝位に即き洛陽に都し劉玄を

後漢の光武立つ

淮陽王とあす是を後漢の光武皇帝といふ(西紀二五)時に公孫述は蜀にあり隗囂は隴西にあり竇融は河西にあり其他猶東南の地に據りて王と稱せる者多かりき光武諸將を遣はして先つ東南の地を平けしめ後隴西を平け又蜀を定めたり竇融も亦來朝したりしがは海内全く一統し中興の業遂に成れり(西紀三六)光武王莽の諸政を改めて漢の舊に復し政權を王室に收めて尚書に委任し功臣には兵事と吏事とを任せず大學を起し禮樂を修め孝廉の士を擧け高節の人を重し海内よく治まれり

光武の諸政

匈奴南北に分る

匈奴は光武の時南北に分れて互に相爭へり(西紀五一)光武南匈

第十六章　匈奴及び西域諸國　東北及び西南諸族

西南諸族

西域の形勢

西域漢に迫す

奴の保護をなしゝかは北匈奴も亦和親を請へり然るに明帝が位に即くに及ひ北匈奴の侵寇止ます明帝因て竇固、耿秉等をして北征せ〜む固は伊吾盧（今の哈密の地）の地を取りて屯田し秉は沙漠を渡りて還れり（西紀七三）時に西域に通じて匈奴の右臂を斷たむとの議ありき西域の諸國は王莽の時より西域の諸國は王莽の時より匈奴に屬したりしが光武の時都護を置かむことを請ひて許されざりしかは或は匈奴に屬し或は獨立す于寘（今の和闐）鄯善の二國最大なり竇固の伊吾盧に屯するにあたりて其假司馬班超を西域に遣はす超、鄯善をして匈奴と絶たしめ又于寘王を降〜疏勒王を更立す是より西域の諸國再漢に通するに至れり僧侶及び佛經の漢に入りしも亦此頃にありき尋て竇固耿秉は車師を平け復西域の都護を置きたり（西紀七四）章帝の時に及ひ都護を廢し

班超西域を從ふ

竇憲北匈奴を征す

漢西域を棄つ

鮮卑漢に寇す

高勾麗漢に寇す

又伊吾盧の屯兵を罷め且班超を召し還さむとす然るに班超は西域を平けむことを請ひ疏勒を破り莎車を下し龜茲を走らし其威名西域に振へり大月氏、安息皆使を漢に遣はす時に北匈奴も全く衰へ其南邊の五十八部は遂に漢に降れり（西紀八八）和帝が立つに及ひ竇憲北匈奴を征し大に其兵を破れり班超また大月氏を破り西域の都護となり龜茲に居りて五十餘國を羈屬す（西紀九一）又其部下甘英を大秦（羅馬）に遣はしゝが條支に至り西海に臨み遂に達せずして還れり（西紀九七）安帝の時遂に都護を罷めしかは北匈奴また諸國を收めて共に寇をな〜たりき烏桓の種族は内屬して邊患をなすこと少なかり〜が鮮卑の種族は漸く勢を有し光武の時より屢邊患をなし漢末に至るまて北方の州郡常に其患を蒙れり高勾麗は屢遼東に

三韓の形勢

寇し又玄菟を圍みしが漢は扶餘と力を併せて其兵を破れり高勾麗の東南には馬韓、辰韓、弁韓あり又其域内に多くの小國ありしが他日馬韓の伯濟、辰韓の斯羅は高勾麗と鼎立するに至れり

羌族の叛亂

氏羌の種族は今の陝西、甘肅、四川の地方に蕃殖して頗漢の患をなし燒當羌は明帝、章帝の時に各地に寇し先零羌は安帝の時に其酋長天子と稱して各地に寇したり後漢は其兵を破りたれと羌族の患をなすことは漢末に至るまて絶えざりき

外戚の專恣

第十七章　後漢の衰亂

後漢の初めは外戚の禍なかりしか和帝以後の諸帝幼冲にて位に上り又早世〜たりしかは遂に外戚專恣の源をなし

宦官の跋扈

和帝の時には竇氏あり安帝の時には鄧氏、閻氏あり順帝より冲帝、質帝、桓帝の時に亘りては梁氏あり諸帝多くは宦官の力によりて外戚を制せむと〜更に宦官の權力を增したりき和帝は鄭衆と謀りて竇氏を除き安帝は閻氏と江京等とによりて鄧氏を斥け孫程等また閻氏を斥けて順帝を擁立し桓帝また單超等と謀りて梁氏を平けたり是より宦官頗凶威を逞くし氣節の士と衝突を惹き起すに至れり

氣節の士の輩出

前漢の末より家塾盛に行はれ又光武の時に大學を設け氣節の士を重し孝廉の科を盛にせるより士大夫皆經術を重し名節を尚ふ風ありき桓帝の時陳蕃、李膺、郭泰の徒最名聲あり共に宦官を惡むこと蛇蝎の如くありしかは宦官も亦氣節の士を懼るゝこと仇讐の如くありきかく兩派の軋轢益甚しかりしが宦官相謀りて膺等の朋黨を誣告し遂に二

宦官と氣節の士の衝突

黄巾の亂

群雄の蜂起

百餘人を捕へて終身禁錮となす（西紀一六六）然れど膺等の名聲益高く當時の士互に名目を立てゝ表榜したりき既にして靈帝の立つに及ひまた氣節の士を用ふ竇太后の父竇武は陳蕃と宦官を除かむと謀り事成らずして殺されたり是より宦官の勢益強く李膺等百餘人を殺し其他隙ある者六七百人を廢禁したりき（西紀一六八）

鉅鹿の張角は其徒と共に兵を起して各地を燔刼す是を黄巾の賊といふ（西紀一八四）既にして賊黨は官軍に破られたれど宦官は猶威福を專にせり會靈帝崩して皇子辨立つ何太后の兄何進は袁紹と謀り地方の猛將を召して宦官を誅せむとし反て宦官に殺されたり袁紹因て悉く宦官を誅除す（西紀一八九）時に董卓は召に應して來り辨を廢して献帝を立て又何太后を弑し諸政を專にす是に於て關東の州郡共に兵を

董卓都を遷す

曹操天子を奉す

孫策江東を領す

曹操冀州を平け荆州を征す

起して董卓を伐たむとし袁紹を推して盟主となす曹操孫堅も亦起れり（西紀一九〇）關東の兵鋒甚盛かりしかは董卓は献帝を擁して長安に遷れりかくて關東の諸將は内自ら乖離して各地に割據す長安にては董卓殺されて關中の地大に亂れ献帝は東に逃れたり（西紀一九六）曹操因て献帝を奉して許（河南省許州）にありしが會劉備は呂布に破られて曹操の許に走れり曹操因て劉備を助けて呂布を虜にす時に袁紹は既に全く河北の地を領し兵を官渡（河南省開封府中牟縣）に出して曹操と相持す孫堅の子孫策吳に據りしが其虚に乘〳〵て許を襲はむとし果さずして死す曹操遂に袁紹を破り（西紀二〇〇）更に冀州を平け又烏桓を破りて歸れり（西紀二一〇）劉備は向きに曹操に背きて袁紹に歸し又荆州の劉表に依りしかは曹操荆州を征せむとす時に劉表既に死して其子降りしかは劉備は

赤壁の役

劉備益州を下す

後漢の滅亡

吳蜀の和戰

夏口（湖北省武昌府）に走りて吳の孫權（孫策の弟）に援を求めたり曹操大兵を率ゐて江を下り吳の將周瑜と赤壁（湖北省武昌府嘉魚縣）に戰ひて大敗す（西紀二〇八）劉備も亦荆州の四郡を下し關羽を留守とし自ら益州に入り漢中の地を取りて漢中王と稱す時に關羽荆州にありて其勢中原を凌き將に三國の均勢を破らむとす孫權因て曹操と結ひて關羽を攻殺す既にして曹操薨し其子丕漢を簒す（西紀二一〇）是を魏の文帝といふ劉備も亦帝と稱す是を蜀漢の昭烈帝といふ孫權は吳にあり魏蜀と鼎立の勢をなす是を三國といふ

第十八章　三國の分立

蜀の昭烈は關羽の仇を復するを名とし吳を攻めたりしが吳の將陸遜と夷陵（湖北省宜昌府）に戰ひて大敗す（西紀二一）然るに吳

魏吳を伐つ

蜀南夷を平く

蜀魏を伐つ

諸葛亮死す

は反て使を蜀に遣はし好を結びたりしが吳魏の交は遂に破れ魏の文帝は自ら吳を征し克たすして還れり時に蜀の後帝立ち諸葛亮輔相となり吳に親みて魏に當らむとし使を吳に遣はして和親を固くす魏の文帝因て兩回吳を征せしが江を渡らすして還れり（西紀二二五）蜀の諸葛亮は南夷を平けて後顧の患を除き魏の明帝が位に即くに及ひ自ら諸軍を率ゐて北征し魏の祁山（甘肅省鞏昌府西和州の北にあり）を攻めたりしが戰利あらずして漢中に還れり後兩回兵を出して陳倉（陝西省鳳翔府寶雞縣）祁山を圍みしが皆糧盡きて引き還りしを以て更に農を勸め武を講し三年を經て吳と約して共に魏を伐つ魏の明帝は吳軍に當り司馬懿は蜀軍に當れり然るに諸葛亮陣中にて薨したりしかは蜀軍罷め還り吳軍も亦引き去れり（西紀二三四）

魏遼東を平く

魏高勾麗を伐つ

司馬氏の専恣

司馬昭蜀を滅す

司馬炎魏を簒す

魏は諸葛亮の薨せるより西方事なり〜かは司馬懿をして遼東の公孫淵を平けしめ（西紀二三八）遂に高勾麗と境を接するに至れり後高勾麗の東川王、遼東の地を襲ひしことありしかは魏の毋丘儉高勾麗を伐ち大に其兵を破りき（西紀二四六）司馬懿は既に遼東を破りしより益權力を有し明帝か崩するに及ひ自ら丞相となりて政を專にす後懿薨し其子師、昭相嗣き已れに敵する者を平け屢帝を廢弑し益威權を振へり時に蜀の姜維恣に兵を出して魏の地を攻めたりしかは司馬昭遂に鄧艾、鐘會等を遣はして蜀を攻めしめ成都に入りて後帝を降したり（西紀二六三）是より司馬昭の勢益强く遂に晉王となれり尋て昭薨して其子炎立ち魏の位を簒す（西紀二六五）是を晉の武帝といふ

吳は孫皓に至り暴虐にして刑賞を濫にす初め交趾の郡吏

吳交趾を征す

晉吳を滅す

百濟新羅高羅

吳に背き使を魏に遣はして太守を請へり晉の魏に代るに及ひ將を遣はし交趾を守りて吳の南を制す吳の將屢交趾を征して其地を定めたり後交趾また叛き交廣の地騷動す吳の將再南征するに至れり是より先き晉の將羊祜は吳の將陸抗の死せるに乘して吳を伐たむことを請へりしが果さゞりき後孫皓の暴虐益甚く且南方に交趾の亂ありしかは武帝は杜預、王濬等をして吳を伐たしめ遂に建業（江蘇省江寧府）に入りて孫皓を降す是に於て海内また一統せり時に我が紀元九百四十年なり（西紀二八〇）

第十九章　晉初内外の形勢

晉の初にあたりて外部の形勢は後漢の時と異なり東北には百濟（即伯濟）新羅（即新羅）漸く勢を得て互に相攻め高勾麗は南

鮮卑の慕容氏

鮮卑の拓跋氏

匈奴の劉氏

氐羌の諸族

下して地を略し日本は屢新羅を攻めたりされば武帝が位に即ける後東夷の諸國晉に内附する者多かりき鮮卑の種族は後漢の時より北部に蔓延したりしが其遼東にある者を慕容氏とし代地にある者を拓跋氏とす慕容氏は棘城（盛京省錦州府義州の東北）にありしが魔の立つに及び屢晉の境上に寇し又扶餘を破れり拓跋氏は分れて三となり祿官は上谷の北、濡源の西（直隸省宣化府の西）にあり猗㐌（祿官の姪）は代郡の北にあり猗盧（猗㐌の弟）は盛樂の故城にありき匈奴は後漢の末に單于扶羅衆を率ゐて内地に入り太原（山西省太原府）の地方に留まれり魏其衆を分ちて五部となす皆姓劉氏を冒す於扶羅の子豹左部の帥たり其子淵任子となりて洛陽にありしが後、晉の初に五部の大都督となり其部衆最盛ありき氐羌の種族は後漢の末に屢亂をなして内地に入り後曹操又叛氏を伐ち武都の

晉の封建

佛老の流行

清談の風習

種を秦川に移す是より氐羌の族は關中の各地に雜居したりき晉初四方の狀勢此の如し更に内部の國情を述べざる可からず

後漢以來封建の制度は名ありて實なく魏は孤立して晉に簒せられたり故に晉の武帝は大に宗族を各地に封して王室の藩屏となさむとしたれど其結果は尾大不掉の勢をすに至れり當時社會に經學を事とせる者ありしかど佛教及ひ老莊の學漸く行はれ遂に清談の風を生せり佛教は後漢の明帝の時に西域の僧初めて來り寺院を建て飜譯をなしより後月氏、安息の諸國より僧侶の來る者益多く飜譯の經典も亦少なからず老莊の學は後漢の時より頗行はれたりしが晉に至りては清談の風盛にして士大夫皆麈尾を把りて玄理を高談し浮誕を喜びて實務を卑み其風一世を

外戚の専恣

風靡するに至れり且武帝は吳を滅してより大に滛佚に耽り遂に州郡の武備を撤し外戚楊氏は政を專にし武帝の弟齊王攸及び諸王を外に出す時に戎狄の内地に雜居せる者を塞外に移さむことを請へる者ありしが行はれざりきかくて武帝崩して惠帝立ちしが天資暗愚にして賈后政を專にせるより海内の爭亂起りて諸王相鬩きたり是を八王の亂といふ（八王は汝南王亮・楚王瑋・趙王倫・齊王冏・河間王顒・成都王穎・長沙王乂・東海王越なり）

八王の亂

戎狄諸族の蜂起

晉の諸王相鬩きしより内地に雜居せる種族は遂に各地に蜂起せり巴氐李雄は蜀の地を略し後帝位に即きて國を大成と號す（西紀三〇六）鮮卑の慕容廆は大棘城に據りて大單于と

第二十章　西晉の大亂　東晉の興起

趙燕の强大

漢の興起

稱し拓跋猗盧は三部を統攝して慕容廆と好を通す氐酋蒲洪は略陽公と稱し羌酋姚弋仲は扶風公と稱す匈奴の劉淵は左國城（山西省永寧府にあり）にて大單于と稱し國を漢と號す（西紀三〇六）劉聰、劉曜、石勒の諸豪皆其下にありかくて劉淵は帝と稱し都を平陽（山西省平陽府）に定め屢晉を侵す時に晉の惠帝崩して懷帝位に在りしが漢を拒きて互に勝敗ありき既にして劉淵死し劉聰立ち又諸將をして晉を攻めしめ洛陽を陷れ懷帝を執ふ

漢の侵略

（西紀三一二）晉の愍帝長安にて位に即く然るに劉曜また長安を陷れ愍帝を執へたり（西紀三一六）時に晉の諸王多くは滅絶し瑯琊王睿江東に據りしが遂に帝位に即きて建業（江蘇省江寧府）に都す是を東晉の元帝といふ（西紀三一八）西北の地方には涼州に張寔の徒ありしかと中原の地は大抵戎狄種族に占領せらるゝに至れり

西晉滅び東晉起る

漢の内亂

漢は劉聰の死後に内亂あり劉曜帝位に即きて長安に都し國號を改めて趙（前趙）と稱す尋て石勒は別に國を立てゝ趙（後趙）と號し襄國（直隸省順德府邢臺縣）に都し屢劉曜と爭ひ又東晉の北境を侵す東晉は其將祖逖中原を回復せむと謀りしが果さずして死〜又王敦の反、蘇峻の亂相つきて起りしかは北方經略の遑あかりき石勒も亦劉曜と相爭ひたり〜かは南方を侵略する能はざりき既にして石勒遂に劉曜を滅して北方に併有す氐王蒲洪、羌酋姚弋仲皆趙に降れり（西紀三二九）

東晉の内亂

後趙、前趙を滅す

石勒死して石虎の立つに及ひ都を鄴（河南省彰德府臨漳縣）に移し好を高勾麗に結び慕容皝を伐ちて利あらず又晉の北境を侵し使を成に送りて共に晉を伐たむことを約す又涼州の張駿を征せしめて敗績す是より大兵を起して三方を征せむとし國内騷擾す且石虎奢侈を好み殘忍を喜び大に人心を

後趙の外征

失ふ姚弋仲、蒲洪の徒其下にありて隙を伺へり慕容皝は既に石虎を破りしより使を晉に遣はし又高勾麗を伐つ高勾麗の故國原王和を求め貢を納れたり皝都を龍城（盛京省錦州府義州にあり）に定めて燕王（前燕）と稱し高勾麗を征して丸都（朝鮮平安道楚山の地方）に入り又宇文歸を破り地を北方に開きたり（西紀三四四）皝死して儁立ちたか燕の勢甚盛にして常に趙の北方を窺へり東晉は庾亮北方の回復を謀り果さずして死し其弟翼代りて武昌を鎮す翼常に趙を滅し成を取るを任とし燕と涼とに約して夾擊せむとしたりしがまた成らすして死す東晉の穆帝桓溫を用ひて庾翼の代とす時に成（時に漢と稱したり）は李勢の位にあり荒淫にして國政を修めす且簒奪相つきて國勢大に衰ふ桓溫因て兵を率ゐて西征し遂に成を滅したり（西紀三四七）是より桓溫の勢甚盛にして晉の勢も亦稍振ふに至れり

前燕の侵略

東晉の北方經略

東晉、成を滅す

第二十一章　前秦の隆盛　西域及ひ東北諸國

後趙の滅亡

後趙の臣冉閔が簒立して國號を魏と稱せるより蒲洪、姚弋仲は皆自立を謀りて互に相爭ひ燕王儁も亦兵を出して南侵す蒲洪の子健は長安に據りて國を秦と稱す（西紀三五一）姚弋仲の子襄は河洛の間に據りて晉に屬す涼州は張駿の子重華位にあり代は拓跋猗盧の從孫什翼犍また其領土を擴め東は穢貊に接し西は破落那（古の大宛の地にして鐵汗或は鐵汗那の地と稱する者と相同じ）に至れり

前秦の興起

代の隆盛

東晉、前秦を伐つ

晉の桓溫は北方の騷亂に乘じ秦を伐ちて苻健（姓蒲を改めて苻と稱す）を長安に圍み更に姚襄を河洛の間に破りしが襄の弟萇遂に秦に降れり尋て秦は苻堅立ちて帝と稱す（西紀三五七）燕は冉魏を滅し都を鄴に遷し又洛陽を取れり桓溫因て大擧して燕を侵す（西紀三六九）既にして桓溫燕の將慕容垂と戰ひて敗績し晉に還りて後天子を廢立し威權を專にす慕容垂は桓溫を破りしより威名益盛なり〜が慕容評に忌まれ遂に秦に走れり苻堅因て東征して燕を滅したり（西紀三七〇）時に王猛秦の相となり諸政を修めしかは秦國大に治まれり王猛の死後に苻堅は涼を伐ちて其國を滅し又代を滅して其地を分ちたりき（西紀三七七）

前秦、前燕前涼代を滅す

西域諸國と佛教

苻堅既に北方諸國を統一し其勢威は西域及ひ東北諸國に振ひたり西域には佛教盛に行はれ葱嶺の東なる于寘、龜茲、車師、鄯善の諸國皆信奉したりしかは西域の僧侶の晉秦に來れる者頗多く佛圖澄を以て最名ありとす其門下に衛道安ありて佛教を各地に擴めたり秦の勢の盛なるに及ひ車

前秦西域を征す

師王及ひ鄯善王は秦に來朝し漢の例によりて西域の都護を置かむことを請ふ苻堅因て其將氐種の呂光を遣はして西域を征せしめたりき（西紀三八二）

高勾麗は秦の燕を滅すに及ひて秦に通せしかは苻堅使を遣はして佛像佛經を送れり（西紀三七二）是を高勾麗佛法の始めとす百濟は東晉及ひ日本に通して高勾麗を制せむとす故に百濟の佛法は晉より入れり新羅は屢日本より攻められたりしが亦使を秦に遣はしたりき（西紀三八一）

東北諸國と佛教

東晉の形勢

苻堅遂に東晉を滅して海内を一統せむとす時に晉は孝武帝位にあり桓溫既に死して謝安相とあり其姪謝玄及ひ桓氏の諸族を荆楊の地に配置し秦の備をなす苻堅諸將を遣はして晉の北境を侵さしめたりしが常に志を得る能はざりき是に於て親ら大兵を率ゐて南征し晉の將謝石、謝玄等と肥水に戰ひて大敗し纔に長安に遁れ歸るを得たり（西紀三八三）是より北方大に亂れて遂に四分五裂するに至れり

肥水の役

第二十二章　前秦の分裂　東晉の衰亡

後魏の强大

西秦後燕西燕後秦後魏の興起

苻堅が大敗して還りしより各種の種族は皆叛き起れり西秦（鮮卑の乞伏國仁）は苑川（甘肅省鞏昌府）に據り後燕（鮮卑の慕容垂）は中山（直隸省定州）に據り西燕（鮮卑の慕容永）は長子（山西省路安府長子縣）に據り後秦（羌の姚萇）は苻堅を執へて長安に據り後魏の道武帝（鮮卑の拓跋珪）は盛樂の故城に據れり（西紀八六三）前秦の滅ぶるに及び諸國の爭正に盛なりき

西燕の滅亡

東方にては後燕遂に西燕を滅し又後魏と爭ひて互に勝敗ありしが後魏遂に中山を取りて平城に都す（西紀八九三）是より後燕の地分れて南燕（鮮卑の慕容德）は廣固（山東省青州府臨朐縣）に據り後燕は

南燕北燕の興起

後涼北涼南涼西涼大夏の興起

東晉の内亂

南燕後秦の滅亡

龍城に據りて高勾麗と爭へりしが後北燕（漢人馮跋）遂に後燕を滅したりき（西紀四〇九）

西方にては後涼（氐の呂光）姑臧（甘肅省涼州府武威縣）に據りしが後其地分れて北涼（匈奴の沮渠蒙遜）南涼（鮮卑の禿髮傉檀）西涼（漢人李暠）の諸國起れり然るに後秦の勢甚盛にして屢後魏と爭ひ又後涼を滅す（西紀四〇一）既にして大夏（匈奴の赫連勃々）起りて朔方に據れり（西紀四〇七）

晉は前秦の分裂せるより反て苟安を得たりしかは武帝は酣飲を事とし遂に其妃に弑せられたり安帝位を嗣き會稽王道子及ひ子元顯が政を專にするに及ひ內亂屢起れり事皆幸にして平きしが後桓溫の子桓玄兵を擧けて反し元顯父子を殺し遂に帝位を簒す時に劉裕兵を起して桓玄を平け安帝の位を復し南燕を征して其國を滅しまた盧循、徐道覆の亂を平け更に蜀の地を定め遂に晉室を簒せむとし己

東晉の滅亡

南涼西涼の滅亡

西秦大夏北燕北涼の滅亡

れの忌む所の者を誅除し且晉の宗族を驅逐す後秦、兵を出して晉の宗族を助く劉裕因て兵を率ゐて後秦を伐ち遂に其國を滅したり是より劉裕の勢甚盛にして安帝を弑して恭帝を立て遂に其位を簒す是を宋の武帝といふ時に我が紀元千八十年なり（西紀二〇四）

宋の武帝が立つに方り南涼、西涼は既に滅ひ後魏、大夏、西秦、北涼、北燕の存せるに過きず後魏の勢最盛にして明元帝は宋の諸郡を下し太武帝は屢大夏を破りしが大夏は更に平涼（甘肅省平涼府）に據りて西秦を滅す太武帝また平涼を破りて大夏を滅し更に北燕を伐つ北燕王戰敗れて高勾麗に走り又宋に赴かむとす高勾麗因て北燕王を殺して魏に從へり太武帝また北涼を下し全く北方を統一したりしが其北境なる柔然との關係は頗殷なりき

を下し全く北方を統一したりしが其北境なる柔然との關係は頗殷なりき

第二十三章　魏と柔然西域諸國　宋と南東諸國　宋魏の爭衡

柔然と後魏との關係

柔然は社崙の出つるに及ひ其勢頗盛にして蒙古の地方を略し屢魏の境上に寇す社崙の死後暫く寇せざりしが後また北燕と好を通し魏の境上に寇す太武帝因て大兵を率ゐて北征し燕然山に至りて還れり（西紀四一〇）後、柔然は魏と和を講せ〜が叛服定らず太武帝更に再北征して大に其兵を破れり（西紀四三八　同四四三）

初め龜茲、鄯善、焉耆、車師、疏勒、烏孫の諸國皆魏に通す太武帝因て使を西域に遣はしゝが柔然に留められて達せず後また使を遣はして諸國を招撫し更に破落那、車舌（漢の康居の地なり）に至れり（西紀四四四）破落那の南に悒怛（或は嚈噠に作る漢の大夏の地なり）あり柔然と婚姻を通し近傍の諸國を服屬す魏が柔然を破り又鄯善、焉耆、龜茲を服せしより諸國皆使を魏に遣はゝたりき

西域と後魏との關係

南方諸國と宋との關係

宋は武帝の時林邑を伐ちしが文帝の時に及ひ遂に其國を征服したりき東北にては高勾麗の長壽王魏に親み又宋と柔然とに通して魏を制せむとし新羅、百濟を犯す百濟は日本に從ひ勿吉（靺鞨）に結びて高勾麗を伐たむとし又宋に通して隱然聲援を求めたり故に魏は柔然を破りて宋を制せむとし宋は南方を略し百濟を連ねて魏に當らむとし高勾麗は巧に宋魏の間に處したりき

東北諸國の形勢

魏が柔然を征するに方りて宋の文帝は兵を出して魏の地を取りしが魏また宋を攻めて其地を復す後宋魏互に使聘

宋魏の攻戰

柔然と宋との連合

宋の滅亡齊の興起

を通し事なきこと殆十餘年に亘りしが魏が再ひ柔然を征するに方り宋軍また北征す然るに魏の太武帝既に柔然を破り大擧して南征し宋の江北の地を蹂躪し揚子江上に至りて還れり（西紀四五〇）是より魏は益盛に宋は漸く衰ふに至れり後宋魏は互に其地を侵し丶が柔然は宋に通して共に魏を制せむと謀れり魏の孝文帝が立つに及ひ（西紀四七一）宋の蕭道成は威權を專にし使を柔然に通して共に魏を伐たむとす尋て道成宋の國を簒す是を齊の高帝といふ（西紀四七九）時に柔然は兵を出して魏を伐たむとしたりしが齊は新に國を成せるを以て應する能はざりき

後魏の孝文帝の政治

後魏、齊を伐つ

齊の滅亡梁の興起

第二十四章　後魏の隆盛　齊梁の興亡

後魏の文化　後魏の分裂

「後魏の勢益盛にして孝文帝は支那の文化を尙ひ制度禮樂を變し遂に都を洛陽に遷し其國服を改め國語を禁し國姓を變す時に宗室勳舊悅はざるもの多かりしかと孝文帝は其改革を遂行したりき」

齊の明帝が簒立するに及ひ孝文帝は其罪を鳴して再齊を攻め丶が克たずして還れり尋て齊に內亂あり蕭衍は兵を起して建康を下し遂に帝位を簒す是を梁の武帝といふ（西紀五〇二）魏は孝文帝既に崩して宣武帝位にあり齊の宗族を助けて梁の武帝と爭へりしが孝文帝の改革の結果は遂に優柔奢侈の俗を成し暗に衰頹の源をなすに至れり且佛敎は鳩摩羅什が多く經典を譯せるより益盛大に赴きしが道敎

後魏の佛教經學

も其刺激によりて全く形を成したり太武帝は道教を尊ひて佛教を抑えたれど宣武帝及ひ胡太后の如きは最佛教を尚ひしかは西域の僧侶の來り住せる者甚多く佛寺の數三萬餘あり加ふるに經學も亦頗行はれしかは鮮卑固有の風習を破りて支那古代の文化を思想の上に及ほしたること少なからす

後魏の内亂

魏の胡太后が政を專にするに及ひ紀綱大に紊れ西北の邊鎮騷亂相つきて起り梁も亦魏の内亂に乘して北征す爾朱榮は胡太后を殺し孝莊帝を立つ（西紀五二八）尋て孝莊帝榮を殺ししかは其族黨洛陽に入りて孝莊帝を弑し遂に節閔帝を立つ時に高歡兵を起して爾朱の亂を平け節閔帝を廢して孝武帝を立て大丞相となりて晉陽に居りしが後兵を率ゐて洛陽を攻めむとす孝武帝因て長安に出奔して關西の大

高歡宇文泰の興起

都督宇文泰に依れり是を西魏といふ高歡は孝靜帝を立て鄴に都す是を東魏といふ（西紀五三五）是より兩魏互に相爭ひ各柔然に婚姻を通して其力を借らむとす かくて南朝は幸に無事を保つを得たりしかは文學佛教共に盛なりき

後魏の兩分

第二十五章　南朝の文化　梁の衰亂　齊周陳の興起

南朝の佛教

佛教は南朝にても盛に行はれ宋齊を通して縉紳の徒佛說を信せるもの多く梁に至りて武帝は佛教に心醉し國政を省みさりき文學は北朝には盛ならざりしかと南朝にては頗其盛を極め前に陶淵明、謝靈運、顏延之あり後に謝朓、鮑照、江淹、沈約、范雲、徐陵、庾信の徒ありき時に佛老の說は多く文學に加はり儒教と共に思想の三大潮流となれり然れと文

南朝の文學

學佛教の流行せるは遂に梁朝衰弱の源となり候景の叛亂に及びて上下悉く瓦解するに至れり

○候景の亂

候景は初め高歡と共に兵を起し東魏の將となりて河南にありしが高歡死し其子澄つぐに及び遂に東魏に背きて西魏に降りまた梁に降れり梁の武帝景を河南王に封し蕭淵明を遣はし東魏を伐たしめしか梁軍敗れて淵明は虜にせられたり(西紀五四七)既にして梁は東魏に和を許したりしかは候景疑懼して兵を起し江を渡りて建康を下す武帝の崩するに及び景は簡文帝を立てゝ政權を專にす(西紀五四九)湘東王繹は王僧辯を遣はし陳霸先と共に侯景を平けしめ帝位に即きて江陵(湖北省荊州府)に都す是を元帝といふ(西紀五二五)初め梁の諸王は各地に割據して互に相猜す時に西魏は宇文泰諸政を總攬し其勢頗盛なりしが梁の岳陽王詧の求に

北齊の興起

應し兵を出して漢東の地を取り尋て詧を封して梁王となす東魏の高洋(高澄の弟)は其帝位を簒して齊の國を建てしが(西紀五五〇)梁の邵陵王綸を封して梁王となす然るに西魏は遂に綸を攻殺し又兵を出して蜀を取れり尋て江陵を攻め元帝を虜にし梁王詧を江陵に移す是を後梁の宣帝といふ(西紀五五四)齊は蕭淵明を梁王となして梁に入れむとす時に王僧辯は陳霸先と建康にありて既に晉安王方智を立てしが齊の勢を憚り淵明を容れて帝となす既にして陳霸先は僧辯を殺してまた方智を立て遂に帝位を簒す是の陳の武帝といふ(西紀五五七)時に西魏の宇文泰は既に薨し其子覺帝位を簒す是を北周の孝愍帝といふ(同上西紀)是より南に陳及び後梁ありて北に齊、周あり齊、周の北に突厥あり突厥の勢漸く盛にして齊、周との關係頗重大になれり

梁と西魏北齊の關係

陳及ひ北周の興起

第二十六章　突厥及ひ周齊陳隋　南北の異同

突厥の興起

「突厥は曾て柔然に服屬したりしが其酋長伊利可汗に至りて始めて強く鐵勒の諸族を破り遂に柔然と絶ち更に婚を西魏に通〜又大に柔然を破れり尋て木杆可汗が立つに及びまた柔然を破りしかは柔然遂に散亡するに至れり（西紀五五）

柔然の散亡

五）是より突厥は更に近隣諸國を破りて其勢甚盛なりき周の武帝は突厥と齊を伐たむとし共に婚を通す齊の武成帝も亦婚を突厥に通せむと謀りしが成らす周遂に突厥と齊の晉陽及ひ洛陽を攻めて利を失ふ是より突厥は窃に齊に通したりき齊の武成帝位を後主緯に讓りしより姦臣其政を專にし國勢頗衰ふ時に周の武帝諸政を親にし大に紀綱を整ひしが遂に兵を出して齊を減したりき（西紀五七七）

突厥と周齊との關係

北齊の滅亡

「突厥の他鉢可汗は齊の宗族を擁立して周の境上に寇す武帝因て親ら北征したりしが病に罹りて崩し宣帝つきて立ち復和親を通す時に周の外戚楊堅政を專にし周の諸將の

周と突厥との和戰

已れに反ける者を平け遂に帝位を簒す是を隋の文帝とい

北周の滅亡隋の興起

ふ（西紀五八一）隋の文帝は大に心を諸政に用ひて内治を整へ北は突厥を斥け南は梁陳を併せむとす時に突厥の他鉢可汗死して國内分裂し東突厥の沙鉢略可汗最盛にして屢隋の境上に寇す文帝因て兵を出して大に沙鉢略を破れり（西紀五八三）既にして突厥の諸部相離畔し沙鉢略は西突厥の達頭可汗に困められ遂に隋に歸するに至れりかくて西北の地邊患少なかりしより文帝は遂に後梁を廢し更に晉王廣を這はして陳を滅さしめたり是に於て南北初めて一に歸す時に我か紀

突厥の分裂

後梁陳の滅亡

元千二百四十九年なり（西紀八九五）

南北の學術風俗の異同

南北の學術風俗は自ら差異あり文學は南朝を主とし經學は北朝を推す且南北の經說は其主とする所を異にし文字は書風を別にし言語は音調を同くせず清談は南朝に盛なりしかと北朝に行はれず騎馬の風は北朝に行はれて牛車の俗は南朝に行はれたり隋が海内を統一するに及ひ清談の風は遂に滅絕し騎馬の俗は士人の間に流行し駢體の文學は天下を風靡し漸く南北の混化をなしたれと經說は未た全く一定せす言語の如きは遂に南北の別をなすに至れり

隋と突厥

隋と西域諸國

第二十七章　隋と近隣諸國

隋が南北を統一せるより近隣諸國との關係頗廣くなれり東突厥の都藍可汗は陳の滅ひたるに及び西突厥と連結を謀らむとしたりしかは文帝は婚を啓民可汗（都藍の從兄弟）に許し且其族を離間す（西紀五九七）是より都藍は屢隋の境上に寇す文帝因て東突厥を討たしめしが都藍は其下に殺されて步迦可汗自立し其國内大に亂れたり文帝啓民を助けて步迦を伐つ步迦遂に吐谷渾（今の青海地方）に走れり（西紀六〇一）吐谷渾は鮮卑の慕容廆の兄吐谷渾の建てたる國にして其子孫相つきて隋の時に至りしが隋の煬帝に破られたり是より西域諸國は隋に來朝して土地を献す煬帝因て四郡（西海、河源、鄯善、且末）を置きて西域の路を通す（西紀六〇九）時に焉耆、龜茲、疎勒、于闐、鑑汗（破落那に同し前に出つ）挹怛（前に出つ）等皆隋に通す波斯も亦使を

隋と南方諸國

送れり

林邑は隋が陳を滅せるに及び大に懼れて方物を隋に貢せしが文帝は更に劉方をして其國を經略せしめたり（西紀六〇五）

隋と東方諸國

煬帝は陳稜をして琉求を征せしめ數千人を虜にして還れり（西紀六一〇）日本は小野妹子を隋に遣はしゝかは煬帝は斐世清をして往き報せしめたりき（西紀六〇九）

新羅百濟高麗の交爭

新羅、百濟、高麗は久く相爭ひたりしが新羅は遂に任那を滅し（西紀五六二）高麗に結びて百濟と日本とに當れり隋が陳を滅せるに及ひ百濟は其勝を賀したれと高麗は拒守の計をなし又隋の遼西を侵す文帝因て高麗を征せしめしが功なかりき（西紀五八九）煬帝の時に及ひ其四方を征服せる勢に乘して高麗を圖らむとす高麗使を突厥に遣はして好を通し且其援を借らむとを求む時に突厥と隋との和親益厚く啓民可

隋と高麗との關係

汗は其事を煬帝に申す煬帝因て親征の大兵を發して遼東に至り且諸將をして平壤を攻めしめしが遂に大敗して還れり（西紀六一一）既にして再親征の兵を發して遼東城（奉天省遼陽の地方）を攻めたりしか會内變あり軍を還して其亂を平け又涿郡に往きて高麗を征せむとす然るに高麗降を請ひしかは煬帝は洛陽に還り又江都（江蘇省揚州府）に幸したり（西紀六一四）時に海内群雄蜂起し擾亂漸く盛なりき

第二十八章　隋末の擾亂　唐の興起

唐初の制度

煬帝の驕奢

隋の文帝は頗心を政治に留め節儉を尚ひたれと煬帝は西苑を開き離宮を設け馳道を穿ち運河を通し長城を築き大に驕奢を極めて海内の民望を失へりされと猶四方を征服

群雄の蜂起

せる餘勢を以て人心を威壓したりき然るに高麗を征して大敗せしより隋の威望は俄に地に墜ち不逞の徒各地に起れり中に竇建德、蕭銑、劉武周、宋金剛、薛舉、李軌等最勢力あり唐公李淵も其子世民と兵を晉陽に起し援を突厥に借り遂に長安に入り恭帝を立て煬帝を上皇と稱す時に上皇は江都にありしが宇文化及等亂をなして上皇を弑し兵を擁して西上す李淵は遂に恭帝の禪を受く是を唐の高祖皇帝といふ時に我が紀元千二百七十八年なり（西紀六一八）

唐の興起

竇建德は宇文化及を殺して夏王と稱し王世充は洛陽に據りて鄭帝と稱す其他群雄或は王と號し或は帝と稱したりきかくて唐の高祖は世民と謀り先つ薛仁果（薛舉の子）を平け李軌を執へ劉武周、宋金剛を破り蕭銑を滅し又竇建德を擒にし王世充を降す既にして劉黑闥の徒兵を擧げたりしが世

唐群雄を平く

民の力によりて皆平定に歸し東南の群雄も亦互に相爭ひて滅亡したりき（西紀六二六）

唐太宗立つ

唐の創業は世民の力最多かりしかは高祖は遂に位を世民に禪れり是を太宗皇帝といふ太宗房玄齡、杜如晦、魏徵等を用ひ海内大に治まれり

唐の制度

唐の官制は隋の制度を折衷し六省（尚書、中書、門下、殿中、秘書、内侍）一臺（御史臺）九寺（太常、光祿、衛尉、宗正、太僕、太理、鴻臚、司農、太府）を設け其掌る所各異れり地方には府に牧尹、州に刺史、縣に令長を置き且數州に都督、邊陲に都護を置きたり田制は後魏以來の均田の法を參酌し班田租庸調の法を設け兵制は後周の府兵を基礎とし國内を十道に分ち六百餘の折衝府を設け又邊州には守捉、城、鎮軍を置きたり學制は南北以來の衰態を振作し京師に國學、大學、四門學等を設け又地方には府學、州學、縣學を設けたり其教課

は經書を主とし南北經說の差異は是に及びて遂に統一するに至れり選擧の法は生徒、貢擧、制擧に分れ生徒及び貢擧には秀才、進士、明經等の諸科あり進士、明經の二科最行はれ唐の人心學術に影響を與へたること少なからず

第二十九章　唐と突厥鐵勒及び西域諸國

唐と突厥

突厥は始畢可汗（啓民の子）立ち隋末の擾亂に乘じ東は契丹、室韋を服し西は吐谷渾、高昌の諸國を從へて隋に寇す後頡利可汗（始畢の弟）立ちまた屢唐に寇す唐は婚を西突厥に結ひて頡利を制せむと企てたり頡利因て其婚を妨け且屢唐に寇したりしが常に志を得ず時に薛延陀の勢漸く盛なりしかは太宗遂に好を薛延陀に通じ李靖をして突厥を平けしめたり（西紀六三〇）是より諸國唐の聲威に震慴して朝貢する者多く吐

唐と吐谷渾、吐蕃、高昌

谷渾、吐蕃（西藏の地）も亦内附したりしが後吐谷渾唐の西邊を侵しゝかは太宗諸將を遣はして其國を討たしめ（西紀六三五）また吐蕃の叛けるを以て其國を征せしめ尋て和を通したりき（西紀六三八）太宗また高昌を平け安西都護府を置きたり時に西突厥も亦内亂ありて射匱可汗と咄陸可汗とに歸し獨薛延陀のみ獨盛なりき

唐と薛延陀、鐵勒

唐の高麗を征するに及ひ薛延陀の多彌可汗唐に寇したりしかば太宗兵を出して征討す鉄勒諸族薛延陀に背きしが回紇遂に多彌を殺して其地を領す唐また其餘衆を平けたり（西紀六四六）かくて鐵勒の十一族唐に内附す太宗因て府州を置き其酋長を都督刺史となし燕然都護府を置きて統轄せしめたり後單于、翰海の二都護府を設け西北諸州を分轄せしむ是より北邊事なきこと三十年に亘れり

唐と天竺

太宗また焉耆を平け龜茲を破り于闐を下し天竺を震駭す天竺は隋の時戒日王（尸羅逸多）立ち摩迦陀王と婚し天竺諸國を從へて使を唐に送れり太宗因て使を遣はし兩國の交を通したり後王玄策の往き使するに及び阿羅那順自立して玄策を囚ふ玄策逃れて吐蕃に走り其兵を借りて阿羅那順を擒にし又其諸城を陷れたりき（西紀六四八）

唐と西突厥

太宗崩して高宗の立つに及び突厥の阿史那賀魯、唐に背き衆を擁して西走し西突厥の射匱可汗を破り牙を千泉（吹河の附近の地にあり）に建て自ら沙鉢羅可汗と號し咄陸可汗と兵を併せて唐の西邊を犯す後唐は蘇定方をして沙鉢羅を平けしめ其地を分ちて濛地崑陵の二都護府を置きたり（西紀六五七）是より西突厥衰ひしが其殘類吐蕃に附して安西を侵したりき（西紀六一九）

唐と吐蕃

吐蕃は吐谷渾を破り又西域諸州を下す唐因て吐谷渾を援け吐蕃を伐ちしが利あらず（西紀六七〇）吐蕃遂に吐谷渾の地に據り屢唐の西邊を犯す唐の將また吐蕃と青海の上に戰ひて敗績す（西紀六七八）時に吐蕃の勢益盛にして近傍の土地を併略す武后（則天）の時に及ひ遂に吐蕃を破りて安西都護府を龜茲に置く後吐蕃和を請ひ婚を通す（西紀六九六）時に大食（タジク）は吐蕃と境を接するに至れり

唐と波斯大食

初め大食（亞刺比亞）に摩訶末（マホメット）起りて「イスラム」教を創立して死せしが（西紀六三二）後其「カリフ」（首長）たる者相つきて近隣諸國を略し又波斯を征す波斯王子卑路斯、援を唐に求めしが高宗路遠きを以て應せず後波斯都督府を置きて卑路斯を都督とす尋て卑路斯は大食に滅されたり後大食の勢益盛にして「ワリード」の「カリフ」となるに及び（西紀七〇七）中央亞細亞を略し又天竺

を征し遂に吐蕃と境を接し唐の西邊を犯さむとす既にして「ワリド」歿して兵を旋したれと「イスラム」教は遂に中央亞細亞及ひ天竺に流布するに至れり是を「イスラム」教東漸の基とす

唐高麗を征せ

第三十章　唐と高麗百濟新羅日本及ひ東北諸國

高麗百濟新羅の三國は屢使を唐に遣はし又日本に朝貢したりしが後新羅は唐に結托し百濟は日本に依賴し又高麗と連合す時に高麗の泉蓋蘇文其君を弑して別に王を立て又新羅を侵す新羅因て援を唐に求めしかは唐の太宗親ら高麗を征して遼東に至り遼東城を拔き白嚴城（奉天省遼陽州の東北）を下し安市城（同奉天府蓋平縣の東北）を攻めしが拔く能はずして還れり

唐百濟を滅す

（西紀六四五）後新羅の武烈王援を唐に求めて百濟を伐たむとす唐の高宗蘇定方等を遣はし新羅と共に百濟を伐たしめて其王を降す（西紀六六〇）時に日本は百濟の質子豊璋を擁立し兵を出して赴き援けしめ百濟の遺臣と回復を謀りしが唐は

日本百濟を救ふ

新羅と力を併せて百濟及ひ日本の兵を破り豊璋を高麗に逐へり（西紀六六三）高麗にては泉蓋蘇文既に死して其二子互に相爭ふ唐因て李世勣をして高麗を伐たしめ新羅と共に平壤を拔きて遂に其國を滅したりき（西紀六六七）かくて新羅は唐と境を接したりしかば心頗安せす私に高麗の遺族を封して高麗王となし又百濟の地を侵し屢唐兵と戰へりしが後互に兵を罷めたりき高麗の滅びしより契丹と靺鞨は漸く勢を得るに至れり

唐高麗を滅す

初め契丹は奚と共に唐に内附したりしかは太宗松漠都督

唐と契丹

府を設け其酋長を都督となしたりき武后の時に至り其都督李盡忠反して自ら無上可汗と號す尋て盡忠卒し萬榮代り立ちしが大に突厥に破られたり萬榮餘衆を收めて再勢を回復し唐の北境を侵す武后因て大兵を出して北征せしめ奚、突厥と共に契丹を破りしかは其餘衆は皆突厥に降れり（西紀六九七）是より後靺鞨獨盛なりき

唐と渤海

靺鞨は武后の時粟末靺鞨の大祚榮といふ者震國王と稱し突厥に附す睿宗の時祚榮を渤海郡王に封す（西紀七一二）是より遂に渤海の國號を稱するに至れり祚榮の子武藝の時に至り益土地を開き東は海に至り南は新羅に接し西は契丹に界し北は室韋に連れり

第三十一章　唐室の衰運　回紇吐蕃の强盛

唐室の女禍

唐の勢威は近隣諸國に振ひたれと内には女禍相つきて起り遂に衰運の源をなす高宗の皇后武氏政權を專にし高宗崩して中宗の立つに及び遂に中宗を廢して其弟睿宗を立て已れに叛ける者を平け又士民を殺し唐の宗室を除き遂に睿宗を廢して自ら帝位に即き國を周と號す時に我が紀元千三百五十年なり（西紀九〇六）後中宗の位に復するに及び韋后また政權を專にし中宗を弑して溫王重茂を立つ時に睿宗の子隆基兵を起して韋后及び其黨を殺し溫王を廢して其父を立つ睿宗尋て位を隆基に讓れり是を玄宗皇帝といふ

唐の制度の變遷

玄宗の初め姚崇、宋璟相つきて政を執り稍中興の觀ありしかど唐初の制度は是に至りて一變したる者多し官制は六省、一臺、九寺、五監並び立ちたれと同中書門下、平章事は宰相の實を有し節度使は兵馬財政の權を掌りて隱然一大勢力

唐と突厥、吐蕃、契丹

を有するに至れり班田租庸調の法は漸く行はれず府兵の制も頗空名に歸し後遂に彊騎となれり

突厥は武后の時默啜可汗西北諸國を從へて屢唐の境上に寇し玄宗の時北庭都護府を攻圍す唐兵を出して突厥を征せしが默啜の殺さるゝに及び奚契丹は唐に屬し吐蕃も亦和親を請へり（西紀七一八）後吐蕃は突厥と共に唐を侵さむとし又安西を圍む是より唐屢吐蕃と戰へり契丹の可突汗は其君を弑して突厥に降りしかは唐兵を出して契丹を伐つ（西紀七三二）尋て唐兵大に契丹を破りて別に王を立つ突厥も亦內亂ありて全く衰ひしかは回紇漸く强く牙を烏德鞬山（鬱督軍山と同じ）北に建て益土地を開きたり南方にては南詔（雲南省の地方）初めて唐に通し（西紀七三八）東北にては新羅は百濟高麗の故地を併せて唐に服事し渤海は唐に寇したるとあり〜が後常に

唐と回紇、南詔、新羅、日本

唐及ひ日本に使聘を通す日本も亦屢國使及ひ留學生を唐に送れり

唐の荒政

唐の玄宗頗邊功を好み屢兵を四境に用ひ又漸く驕奢に陷りしかは國用足らず遂に聚斂の吏を用ひたり且李林甫を相とし楊貴妃を寵せるより國政大に亂るゝに至れり時に安祿山は平盧、范陽、河東の三節度使を兼領したりしが李林甫死して楊國忠相となるに及び遂に兵を擧げて反し洛陽を陷れて大燕皇帝と僭號す（西紀七五五）顏眞卿、顏杲卿、郭子儀、李光弼、張巡、許遠の徒王事に勤めたれと賊勢益盛にして遂に長安に入りしかば玄宗蜀に奔れり肅宗靈武（甘肅省靈州）にて位に即き李泌と謀り回紇の援兵をかりて長安を復しまた洛陽を取れり（西紀七五八）後祿山の子及ひ史思明父子相つきて亂をなし唐兵と戰ひて互に勝敗ありしが代宗の立つに及び

安史の亂

僕固懷恩等回紇の兵と共に遂に其亂を平けたり時に我が紀元千四百二十二年なり（西紀七六二）

吐蕃、回紇唐を侵す

吐蕃は唐の內亂に乘して河西、隴右の地を陷れ遂に奉天に寇し長安に入りしが郭子儀等の赴き攻むるに及びて引き去れり尋て僕固懷恩反し回紇、吐蕃の兵を連ねて唐を侵す唐回紇に說きて共に吐蕃を伐たむとす吐蕃因て逃れ去れり（西紀七七三）德宗立つに及び朱泚の難あり唐は吐蕃の援をかりて割地の約に背きしかは吐蕃遂に大擧して唐を侵す德宗李泌の策を用ひて回紇に婚を許し又南詔を招き大食、天竺に結びて吐蕃を制せむとす南詔唐に通するに及び吐蕃の勢漸く減したり」（西紀七八八）然るに沙陀（突厥の別種）は回紇に背きて吐蕃に附き共に北庭都護府を下す回紇唐兵を助けて北庭を取らむとし反て吐蕃に破られたり後回紇吐蕃を北庭

唐回紇、南詔、大食に結ひて吐蕃を制す

に破れり（西紀七九一）南詔また深く唐に結びて吐蕃を攻め大食も亦吐蕃の西境を侵したれは吐蕃は遂に和を唐に求め沙陀も吐蕃に背きて唐に降れり

第三十二章　唐代の文化及ひ藩鎭宦官の禍

唐の宗教

唐の文化は舊來の文化と頗同じからず景教は波斯より入り摩尼教は回紇より入り「イスラム」教は大食より入りて道佛の二教に加はれり道教は唐に至りて朝廷に尊奉せられ常に佛教と相軋れり佛教は玄奘、義淨の徒天竺に遊ひて還りしより大乘の學益行はれ頗佛教の面目を改め諸宗に分れて東方諸國に傳れり代宗深く佛教を信したるより僧尼增加し文宗の時には其數七十餘萬ありきと稱す然るに武宗大に道教を尊ひて痛く佛教を排し遂に其他の諸教にも

唐の文學

及べりされと後佛教は再勢を得て宋の義理の學發達の源をなすに至れり

經學も亦重せられ明經の科は進士の科と並ひ行はれ遂に文學革新の氣運を作れり玄宗の時李白、杜甫出てゝ詩風大に開け憲宗の時韓愈、柳宗元出てゝ遂に文風を一變す後明經の科衰へて進士の科盛なりしかは漸く輕浮の風を長じ元稹、白居易の出つるに及ひて詩風また大に變したり顧ふに宗教文學は當時の人心と相關すれは唐末藩鎮宦官の禍に影響せる所少なからさる可し

藩鎮の驕横

初め肅宗賊の降將を平盧、淮西の節度使となし代宗また盧龍、魏博、成德の節度使となし常に其驕横を容れしかは諸鎮頗跋扈し子孫世襲、軍士簒立の風を生したり德宗の立つに及び藩鎮世襲の風を改めむとす河北の四鎮黨援〳〵て朝命を拒み淮西も亦叛きたり（西紀八二七）德宗諸鎮の兵を發して淮西を伐たむとす時に涇原の兵長安を過きりて亂をなし朱泚を奉して主とす德宗奉天に出奔し己れを罪する詔を下して天下に大赦す時に魏博、平盧、成德は上表して其罪を謝したれと盧龍、淮西は猶從はず李懷光も亦叛きたり既にして唐軍朱泚、李懷光を平け別に淮西、盧龍の節度使を任せしが後淮西の叛を宥せるより藩鎮益驕横を極めたり憲宗の立つに及び大に紀綱を振はむと欲し西川、夏綏、鎮海の叛を平け遂に成德を伐つ（西紀八一〇）時に魏博と平盧とは陰に成德と謀を通せしかは遂に成德を宥したり尋て魏博の軍亂れ遂に朝延に歸降す憲宗また裴度をして淮西を平けしめしかは諸鎮益懼れ盧龍は歸順し成德は質を納れ地を獻す憲宗また李愬をして平盧を平けしめたり（西紀八一九）凡藩鎮の跋

藩鎮の平定

宦官の跋扈

宦官と明黨との關係

扈六十餘年に亘りしが是に至りて全く朝廷の約束に從へりされと内には宦官の勢漸く盛なりき

宦官は玄宗肅宗の時より益跋扈し德宗の時には兵權を握り政務に參す後遂に憲宗を弑して穆宗を立て又敬宗を弑し後更に文宗を立てたり（西紀八二六）初め李德裕は李宗閔と軋轢したりしかは文宗の時に及び宗閔は宦官に結びて宰相となり德裕を斥け牛僧孺を引きて共に敵黨を排す德裕西川の節度使となりしが事によりて益僧孺と相軋れり既に〜て文宗僧孺と宗閔とを斥け德裕を召して相となす然るに德裕宦官と善からず宦官宗閔を引きて德宗を排す李訓、鄭注の權を專にするに及ひまた宗閔を斥け文宗に勸めて宦官を除かむと謀りしが遂げざりき文宗の崩すに及ひ宦官また武宗を立つ（西紀八四〇）武宗德裕を引きて相となす德裕

昭義の叛を平けしより大に威權を弄し盡く敵黨を排す武宗崩するに及ひ宦官宣宗を立つ（西紀八四六）時に德裕、宗閔、僧孺相つきて死し朋黨の軋轢は止みたれと宦官の專横益甚くまた懿宗を立てたり（西紀八五九）是の時に方りて唐室の形勢日に非にして回紇、吐蕃の國狀また變するに至れり

黠戛斯の興起

回紇の散亡

第三十三章　回紇吐蕃の衰弱　南詔の侵略　唐室の亂亡　五代の分裂

唐末に至りて黠戛斯の種族は漸く勢を得て大に回紇を破り〜かは其部族援を唐に請ふ武宗其請を許さざりしかは遂に唐の北邊を侵す武宗因て兵を出して回紇を攘ひ黠戛斯と好を結べり回紇は奚及ひ室韋に依りしが宣宗の時唐兵大に奚を破り黠戛斯又室韋を破りしかは回紇全く耗散

したりき（後其部族甘州を取りて別に國を立つ）

吐蕃の衰亂

吐蕃は既に唐と和せしより國勢漸く衰ひしが後尚恐熟兵を擧けて反し宣宗の時黨項等の諸族を率ゐて唐に寇し又尚婢婢と爭ふ唐因て其虛に乘して河湟の地を復し又黨項を平けしかは吐蕃益衰へたりき

南詔の侵略

南詔は吐蕃の衰ひしより頗勢を得て懿宗の時に國を大禮と號し（西紀八五九）屢唐の南境を犯し遂に交趾を下す唐高駢を安南都護となし大禮を破りて交趾を復したれと後大禮また西蜀に寇す駢更に西川の節度使となりて其衆を破りき（西紀八七〇）

唐の境内には藩鎭の擾亂絶えず宦官の跋扈止まず加ふるに懿宗の時は浙東、徐州に内亂起りしが幸にて皆平きたり僖宗の時に及ひ國用足らず賦歛愈急なりしかは百姓流離し盜賊蜂起す中に最勢力を得たるを黃巢とす黃巢は河南江南嶺南の各地を轉掠し更に北上して洛陽を陷れ長安に入りて大燕皇帝と僭號す（西紀八八〇）是より先き沙陀の李國昌は振武の節度使となりて晉陽にあり其子克用と唐に背き戰ひ敗れて韃靼に逃れしか唐は其罪を宥して兵を借らむとす克用因て唐軍を助けて長安を復し遂に黃巢を平け河東の節度使となれり（西紀八八四）朱全忠は宣武の節度使となりて汴（河南省開封府）にありしが克用と事により相善からす克用先つ近畿の諸鎭を滅し然る後に汴を攻めむとし屢長安に逼れり昭宗の時に及ひ全忠は河南、河北の諸鎭を破りて克用と相爭へり後兵を率ゐて長安に赴き悉く宦官を殺し（西紀九〇三）梁王となりて汴に還り都を洛陽に遷し昭宗を弑して哀帝を立て遂に帝位を簒して汴に都す是を後梁の太祖皇

黃巢の亂

季克用の血起

朱全忠唐を簒す

帝といふ時に我が紀元千五百六十七年なり（西紀九〇七）是より後五十餘年間を五代と稱す五代とは梁、唐、晉、漢、周をいふ

諸國の分立

各地に割據したる藩鎮は或は王と稱し或は帝と稱し晉（河東の克用）燕（盧龍の劉仁恭）岐（鳳翔の李茂貞）吳（淮南の楊渥）吳越（鎮海の錢鏐）閩（威武の王審知）南漢（清海の劉巖）楚（武安の馬殷）蜀（西川の王建）の諸國並ひ立てり而して梁晉の爭最激烈なりき梁の太祖は燕に結ひて晉を侵す時に李克用の子存勗大に梁軍を破りて又燕を伐つ太祖燕を救はむとして晉軍に破られたり既にして太祖死し末帝立ちしが存勗は既に燕を滅し又梁軍を破りて王彥章を擒にし遂に帝位に即き梁を滅して洛陽に都す（西紀九二三）是を後唐の莊宗皇帝といふ莊宗岐を服し蜀を滅したりしが漸く驕奢に耽りて將士人民の心を失ふ既にして鄴都の變あり李嗣源叛きて大梁を下す莊宗遂に反兵に弑せられ嗣源洛陽に入り

後唐後梁を滅す

て位に即く（西紀九二五）是を明宗皇帝といふ是の時に方り荊南（高季興）後蜀（孟知祥）の二國起りしのみならず境外列國の形勢頗變し新羅亂れて高麗起り渤海衰へて契丹強く大禮微にして南晉興れり

新羅の內亂

高麗の興起

第三十四章　高麗の興起　契丹の強大　交趾の獨立

新羅は唐の末世に及ひ國內大に亂れ群雄蜂起して各地に割據す甄萱は國を後百濟と號し（西紀八九二）弓裔は國を泰封と號し（西紀九〇一）王建は國を高麗と號す（西紀九一八）高麗遂に泰封を走らし後百濟を破り新羅を降す（西紀九三五）是に於て高麗は半島全体を併せ契丹と境を接するに至れり

契丹は耶律阿保機の出つるに及び近隣の部族を併せ遂に

契丹の興起

皇帝と稱す是を太祖といふ太祖已に其部族を併せ更に燕を征して諸州を徇へ西陲の諸族を下し又渤海を征して遂に其國を滅したり（西紀九二六）尋て太祖崩して太宗立ち其勢益盛なりき

契丹、後晉を援けて後唐を滅す

後唐は明宗崩して閔帝立ちしが鳳翔の節度使李從珂簒立し河東の節度使石敬塘と相猜す敬塘援を契丹に求め遂に後唐を滅して帝位に即き大梁に都す是を後晉の高祖皇帝といふ（西紀九三六）高祖遂に北邊の十六州を契丹に割き且歲に金帛三十萬を贈り常に使聘を通して臣禮を執れり高祖崩して出帝立つに及ひ契丹に事ふるに臣禮を以てせす契丹因て大擧南征して晉を滅し大梁に據りしが叛民の蜂起するに及び引き還れり（西紀九四七）

契丹後晉を滅す

契丹の還るに及ひ河東の節度使劉知遠大梁に入りて帝位に即く是を後漢の高祖皇帝といふ（西紀九四七）隱帝の時に及ひ郭威をして三藩の亂を平けしめ又讒を信して郭威を除かむとす郭威が兵を率ゐて來るに及ひ隱帝遂に亂兵に弑せられたり初め南唐は吳に代りて國を建て又閩を滅して其地を併せしが三藩の聲援をなし且契丹に後漢を攻めむを請へり契丹の世宗其請に應して漢の北邊を侵す郭威契丹を拒かむとして澶州に至りしが兵士に擁立せられて帝位に即く是を後周の太祖皇帝といふ（西紀九五一）隱帝の叔父劉崇は晉陽にありて帝位に即き國を北漢と號し遙に南漢と並ひたりき（西紀九五一）

後漢後周の更迭

初め南漢の劉巖は交趾を取りしが後矯公羨と吳權とは其地に據りて互に相爭ひ矯公羨は救を南漢に求めたり然るに吳權は矯公羨を破り又南漢の兵を破りて遂に王と稱し

交趾の獨立

後國を南晉と號し交趾獨立の基を開くに至れり時に我が紀元千六百十一年なり（西紀九五一）

第三十五章　周の經略　宋の統一

交趾の騷亂

周の太祖が漢に代るに及ひ北漢は契丹の援をかりて屢周の北邊に寇す既にして世宗立ち大に北漢及ひ契丹の兵を高平（山西省澤州府高平縣）に破れり（西紀九五四）是より世宗の勢甚盛にして先つ内政を修め遂に天下を併せむとし後蜀を破り南唐を降し更に契丹を伐ちて關南の地を復せしが疾に罹りて崩し子恭帝立つ時に歸德の節度使趙匡胤、契丹の侵入を拒がむとして陣橋驛（河南省開封府祥符縣）に至り兵士に擁立せられ遂に帝位に即きて汴に都す是を宋の太祖皇帝といふ（西紀九六〇）

周の世宗の經略

宋の興起

時に外は吳越、南漢、荆南、南唐、後蜀、北漢の諸國猶存せるのみならす周行逢は湖南に據り李彝興は夏州に據れり且内は藩鎭跋扈の風猶存し兵士專横の弊また行はれたりき

宋初の形勢

宋の太祖は宰相趙普と謀り功臣の禁兵を司るを罷めて節度使となし尋て其節鎭を罷めて朝請を奉せしめ且漸く文臣を用ゐて節度使となし諸州に通判を置きて軍民の政を治め轉運使を置きて其租稅を管理せしめ又藩鎭所領の支郡をして皆朝廷に直隷せしめたり是より藩鎭の權初めて輕くなれり太祖また更戍の法を立て諸道の兵を擇ひて京城を衛らしめ禁旅を擇ひて邊城を守らしめ常に道路に往來して勤苦に習はしむ是より兵士專横の弊少くなれりかくて太祖は良將に命じて西北の邊境を守らしめ力を東南に專にして海内を統一せむとし慕容延釗、王全斌、潘美、曹彬等

宋初の政治

海内の統一

をして次第に荆南、湖南、後蜀、南漢、南唐等を滅さしめたり時に吳越國王は宋に來朝したり〜かは海内略定まれり唯北漢は太原に據りて下らさりき太祖崩して弟太宗の立つに及び遂に北漢を平け海内を統一す時に我紀元千六百三十九年あり（西紀九七九）

交趾の内亂

初め南晉亡ひ丁部領國を立てゝ瞿越と號せしが後内亂ありて丁部領の父子を殺す時に其將黎桓丁氏の族を立て遂に其位を簒す丁氏の黨、占城の兵を引きて來り侵す宋の太宗其内亂を聞き兵を出して往き征せ〜めしが大に破れて引き還れり黎桓因て占城を伐ちて大に其兵を破り更に好を宋に通す宋如何ともする能はず黎桓を安南都護、靜海軍節度使となしたりき

第三十六章　契丹の强盛　西夏の興起

交趾の形勢

宋と契丹との交爭

契丹は宋と好を通せしが宋が北漢を滅すに及ひ遂に其好を絶てり宋因て契丹を侵したれと利あらずして還れり（西紀九七九）是より契丹屢宋を侵し宋も亦契丹を攻めたり宋更に高麗女眞をして契丹を侵さしめむとしたりしが二國は契丹に犯され援を宋に求めて得ず遂に契丹に從へり時に契丹の聖宗は宋を侵して淄齊の地を掠め尋てまた大舉して澶州を圍む宋の寇準眞宗に勸めて親征せしめ遂に契丹と和し金帛三十萬を贈るを約して兵を解きたり（西紀一〇〇四）契丹は既に宋と和し南境頗事なかりしかは前後兩回高麗を征して其降を許し後又興遼の國（渤海の遺族大延琳契丹に叛きて國を建てたるもの）を滅〜

澶淵の役

契丹、高麗を征し興遼を滅す

たりきかくて契丹にては聖宗崩して興宗立ちしが宋は眞

宗の子仁宗位にあり西夏は李繼遷より再傳して元昊に至れり

西夏の興起

初め李繼遷（李彝興の後也）夏州に據りて夏國王と稱し或は宋に附き或は契丹に從ひ向背定らさりしが其孫元昊に及ひ大に其國政を改め近隣の諸州を取り大夏皇帝と稱し屢宋の西境を侵す時に宋は內に朋黨の爭ありしかと韓琦、范仲淹等をして守禦の任に當らしむ既にして元昊大擧して宋に寇し韓琦の兵を破りて深入したりしが范仲淹の出て拒くに及ひ引き去れり（西紀一〇四一）

宋と西夏との關係

宋と契丹との交渉

契丹は宋が西夏の難あるに乘し周の世宗の復したる關南の地を得むとす宋は富弼を擧けて談判の任に當らしめ割地を拒みて增幣を議す後遂に銀帛二十萬を增すを約して局を結ひたりき（西紀一〇四二）

宋と西夏との和議

宋夏の兩國は久く兵を用ひて互に困弊せるより西夏は書を宋に送りて和を求めたり後元昊の子諒詐立ち宋の封を受けて夏國王となりしが尋てまた契丹に降れり是より西夏は宋と契丹とに兩屬す（西紀一〇四五）かくて宋は西邊頗事なかりしが南方交趾との關係起れり

宋と交趾との關係

交趾は李公蘊、黎氏の位を簒して帝と稱し宋と好を通す其子德政の立つに及び儂智高叛きて儻猶州（安南國諒山府東北）に據りて大曆國と稱す德政因て智高を擒にしたりしが後また叛きて安德州（儻猶州と接す）に據りて大南國と稱し宋の南境を攻陷す宋の仁宗狄青を將として南征せしめ大に智高を破りて大理國に走らす大理國王智高を斬りて宋に送りしかは南方の擾亂全く平きぬ（西紀一〇五三）

第三十七章　宋の法度更革及び外國經略

宋の法度更革の原因

宋は歷代西夏契丹に對して敗辱を取り且國用足らず府庫空くなりしかは遂に法度更革の必用を生したり神宗因て國を富まし兵を强くして其敗辱を雪かむとし王安石を用ひて參知政事とす（西紀一〇六九）安石先つ法度を改めて天下の利權を收めむとし制置三司條例司を置き尋て同平章事となり遂に農田水利青苗、免役、市易、均輸、方田均稅の法を行ひ更成の法を改めて更に保甲、保馬の諸法を興したり是を新法といふ當時韓琦、司馬光、程顥、蘇軾の徒皆新法の不便を論せしか安石は悉く反對者を斥けて其實施を務めたり後其黨相つきて宰相となり益新法を固執し更に官制を改定すかく宋は法度更革に力を盡くしたれと遂に外國經略の目的を達する能はざりき

王安石の新法

宋西邊を經略す

初め神宗は西夏と好を通したりしが後西夏屢宋の境上に寇す時に王安石は王韶をして西邊を經略せしめ然る後に西夏を取らむとす韶大に吐蕃の兵を破りて遂に熙河路の安撫使となれり契丹は宋の熙河路を置き保甲保馬の法を創め且沿邊の戍壘を修めたるより其幽燕を回復せむとする志あるを疑ひ使を宋に遣はし戍壘を撤し且境界を定めむことを請へり宋は西方に事ありしかは遼の要求を斥くる能はず遂に地を割きて契丹に與へたり（西紀一〇七五）時に交趾も亦宋を侵したりき

宋と契丹と交渉

宋交趾を征す

交趾は李日尊（德政の子）の時宋を侵し又占城を伐ちしが其子乾德の立つに及ひ宋の南境を侵し且新法の非を鳴す王安石因て兵を出して占城眞臘と共に交趾を合擊せしめ遂に其降を納れたり（西紀一〇七六）されと西夏の經營は遂に功なかりき

宋西夏を征して大敗す

宋は王詔が西夏を圖る志を達する能はさるを以て李憲を擧けて其代りとす後西夏の其君を幽するに方り神宗は李憲をして大擧出征せしめたりしが克たず尋て夏兵に永樂城（陝西省綏德州米脂縣にあり）を陷れられたり（西紀一〇八二）是より神宗遂に西伐の念を止め西夏も亦好を宋に通す幾もなくして神宗崩し子哲宗つきしが宋の内政また一變せり（西紀一〇八五）

宋の佛教

第三十八章　宋初の文化及び黨派の軋轢

五代の時周の世宗は大に佛教を斥けたりしか宋の太祖は其禁を解き僧侶を印度に遣はし又大藏經を印行す且太宗眞宗は譯經院を置きて經論を譯せしめたり仁宗の時より禪宗最盛にして學者の思想に影響を興へたること少なからず當時道教も亦行はれたれと其勢は佛教に及はさりき

宋の儒學

宋の文學

儒學は漢より後訓詁の學行はれて義理の說は多く佛教に歸したりしか宋に至りて訓詁の反動と佛教の影響とにより周敦頤、張載、邵雍、程顥、程頤の徒出て、理氣性命を論し義理の學行はるゝに至れり

文學は唐末より詩風振はす文體も亦駢偶となりしが歐陽修出て、詩風を矯め文體を改むるに及び蘇洵、蘇軾、蘇轍、王安石、曾鞏の徒輩出し文學の氣運頗盛なりき且國事の多難は頗人心を刺激し大に政治思想を誘發したれば諸家の政治論文觀るべき者多かりき蓋義理の學の行はれしと政治思想の發達せるとは宋の黨派軋轢の原因に關係せること少なからざるべし

哲宗立ち高太后政を執るに及ひ司馬光、呂光著を宰相となし程頤、蘇軾等を任用し遂に新法を罷め且其黨與を排す是

元祐の更化

を元祐の更化といふ（西紀一〇八八）既にして司馬光薨し舊法派は洛黨蜀黨朔黨に分れて相軋れり是より新法派の勢漸く盛にして頻に朝政を攻擊す高太后崩して哲宗親ら政をとるに及ひ紹述の論大に起りて章惇、呂惠卿、蔡京等を任用し諸新法を行ひ舊法派を貶斥す是を紹聖の紹述といふ（西紀一〇九四）

紹聖の紹述

哲宗崩して徽宗立ち向太后政を執るに及ひ章惇、蔡京等を罷めて韓忠彦、曾布を宰相とし大公至正によりて朋黨を消せむとす然るに徽宗は遂に蔡京を宰相とし布と忠彦とを罷めたり蔡京紹述の說に托して徽宗を箝制しまた悉く舊法を罷め舊法派を排斥したりき

祭京の專恣

蔡京徽宗を〳〵て心を政治に用ひさらしめむとし奢侈を勸め盛に土木を興し又邊功を立てゝ久く政權を專にせむとし童貫をして西邊を經略せしめたり童貫功を西邊に立てしより北邊も亦圖る可しとなし遂に使し遂に金と連合の策を畫するに至れり」

金遼を伐つ

第三十九章　金の興起　宋金の連合　遼の滅亡　西遼の建國

金は初め女眞と稱し生女眞と熟女眞とに分れたりしが完顏烏古廼といふ者遼の命を受けて生女眞の節度使となり近隣諸部を從へり是を其勢力を得たる初とす阿骨打の立つに及ひ遼（契丹）の衰ひしに乘し兵を起して遼兵を破り國號を金と改め自ら皇帝と稱す（西紀一一一五）是を金の太祖といふ太祖遂に勝に乘して遼を侵す遼和を金に求めたれど成らさりき

宋は童貫の策を用ひ使を金に遣はし金は遼の中京を取り

宋金連合の約

宋は燕京を取るを定め事成らは石晋の割きたる地を宋に取り遼に贈りし金帛を金に贈らむことを約す（西紀一一二〇）金遂に兵を進めて遼の上京、中京を下し天祚帝を雲中に走らし又其西京を下す宋は童貫に命し大兵を率ゐて出征し金兵と相應せしめしが遼兵に破られて進む能はす金は宋が出兵の期を失へるを名とし遂に前約を破り更に燕京と六州（滄、景、檀、順、涿、易）の地のみを宋に與ふることゝし兵を進めて遂に燕京を下す（西紀一一二二）かくて遼の五京は皆金の有となれり

宋金共に遼を攻む

遼の滅亡

遼の天祚帝は金兵に襲撃されて西走し西夏に赴かむとす金因て遼夏の連合せむことを恐れ西夏に地を割くを許し遂に天祚帝を虜にす時に我か紀元千七百八十五年なり（西紀一一二五）遼の同族耶律大石は兵を率ゐて西走し西鄙の七部十八州を會して興復を諭し精兵萬餘を得て西征し回紇を下し

西域の形勢

て天山南路を略し進みて尋思干（サマルカント）に至れり

初め大食は「アル、マムン」の死後漸く衰へて突厥に侵され且内亂屢起りて國内分裂す波斯は大食の衰に乘して屢起りしが後突厥に破られたりかくて突厥の「メリク、シア」は亦思法抗に都し（西紀一〇七二）諸部を統一し一大王國を建てしが其衰ふるに及ひ花剌子摸「グール」、「トランス、オクサナ」の諸國も亦起りて各地に分立し八吉打の「カリフ」の權力は殆地に墜つるに至れり耶律大石の來るに及び西域諸國拒ぎ戰ひしが大石大に其兵を破り「トランス、オクサナ」花剌子摸を服し起兒漫（サマルカントとボクカラの間にあり）に至り帝位に即きて天祐皇帝と稱す（西紀一一二五）是を西遼（又黑契丹と稱す）の德宗といふ德宗都を虎思斡耳朶（吹河の附近なるべし）に定め宗國の回復を圖らむとし大兵を率ゐて東征したりしが遂に其志を果さずして殂し子仁宗つき

西遼の興起

て立ち中央亞細亞の地方を支配したりき（西紀一一三五）

第四十章　宋金の和戰

金宋を征す

金の太宗は宋が其降將を納れたるを名とし遂に粘沒渴斡離不を遣はし道を分ちて南侵せしめ汴京を圍む宋の徽宗位を欽宗に禪り好を金に求めたれと成らず欽宗更に使を遣はして和を請はゝめ盡く金の要求に應し且割地の詔を與へたり然るに宋其約を果さゞりしかは金軍遂に汴京を陷れ徽宗欽宗を執へて去れり時に我が紀元千七百八十六年なり（西紀一一二六）

金宋都を下す

宋の南渡

宋は高宗立ちて李綱を用ひ意を戰守に致しゝが黃潛善、汪伯彥の相となるに及ひ遂に揚州に幸す（西紀一一二七）是より後を南宋といふ時に金人三道より宋を侵し汴京を下し揚州に

向ふ高宗因て江を渡りて杭州に往き張浚韓世忠等をして守禦の任に當らしめしが金軍は江を渡り杭州を陷れて高宗を走らし（後宋は都を杭州に定めて臨安と稱す）更に韓世忠と鎭江に戰ひ又張浚を富平（陝西省西安府富平縣）に破れり（西記一一三〇）陝西の諸州多く金に下りしが獨蜀の地方は猶下らざりき

金宋を侵す

金の熙宗は向きに宋の降將劉豫を納れて齊國を立て兵を連ねて屢宋を侵す宋の岳飛等齊金の兵を破りて北方を經略たりしが時に講和の議と主戰の論と並ひ起れり高宗講和の說を納れ屢和を金に求めたれと金人從はず後南侵して利あらず且齊國を廢するに及ひ遂に和を許す然るに金また盟を渝えて南侵したりしかは岳飛等其兵を破りて諸州を復す時に秦檜相位にありて專ら和議を主とし遂に諸將を召還し且岳飛を殺して和議を成したりき（西紀一一四二）是よ

和戰の說

宋金の和

り秦檜威權を專にして悉く主戰論者を斥け金も亦屢內亂ありて南侵の遑なかりしかは南北和好を全くせること殆二十年に亘れり

金、宋を侵す

金の海陵王が熙宗を弑して自立するに及び燕京に移り又汴京に移り遂に盟を破りて宋を侵したれと克たず金の諸將遂に海陵王を弑して還れり(西紀一一六一)尋て金の世宗立ちて燕京に都し再好を宋に通したり宋は孝宗立ちて北方の回復を企てしが成らず遂に復和を講したりき(西紀一一六五)

宋金の和

宋は孝宗より寧宗の時に亘りて佛教の勢は舊の如くならざれと學術は益盛にして碩學大家輩出す中に朱熹は義理の學を以て名ありき趙汝愚が寧宗を相けて韓侂胄と相爭ふに及び遂に朱熹を任用す既にして侂胄勢を得て朱熹を斥け趙汝愚を貶し更に僞學の名を以て當時の名士を斥け

韓侂胄の專恣

たり(西紀一一九七)是より侂胄は益威權を弄し遂に邊功を建てゝ其地位を固くせむとし金が蒙古の難あるに乘じて北征したり〳〵が利あらず金人九道より宋を侵す宋因て和を成さむと欲し金も亦兵を罷むるを望みしが議久く調はす宋遂に侂胄を殺して和を成したりき(西紀一二〇六)

成吉斯汗の興起

第四十一章　蒙古の興起　宋金の攻守

金の滅亡

蒙古は斡難河及ひ客魯漣河の上に游牧せる種族なりしが也速該に至りて其近隣を併せ漸く勢を得たりき也速該の子鐵木眞雄邁にして大略あり近隣諸族を服し又西夏を征し遂に斡難河上にて帝位に上り成吉斯汗と號す是を太祖といふ(西紀一二〇六)かくて成吉斯汗は更に乃蠻を伐ち其主屈出

律を西遼に走らし又屢西夏を伐ちて其降を納れ更に畏兀兒（回紇に同し）を破り遂に金を侵さむとす（西紀二〇九）金は章宗の時文學を尚びしより漸く優柔の風を長じ允濟の立つに及び國勢愈衰へたり然るに成吉斯汗はよく蒙古の軍制を整ひ警察を嚴にし「クルリタイ」の會議を設けて諸族の統一をなし其子朮赤、察合台、窩濶台、拖雷を從へて南征し遂に燕京を圍みしが會蒙古に內難ありしを以て金の和を請ふを許して引き還れり尋て金が都を汴京に移すに及びまた南征して燕京を下し（西紀二一五）更に西域遠征を企てたりき

蒙古金を侵す

西遼の衰勢

初め西遼の勢は頗盛なりしが直魯古（仁宗の子）の時に及ひて國勢振はず其地分裂して畏兀兒、花剌子模「トランス、オキサナ」等皆獨立せしが乃蠻の屈出律が來り寓するに及び遂に直魯古の位を簒して自立す（西紀二〇一）時に花剌子模は國勢最盛

にして其王默呼（ムハメッド）は屢西遼を攻め又「トランス、オキサナ」を滅し撒麻耳干（サマルカンド）に都し「グール」を併せ哥疾寧（ギズニ）を領す然るに八吉打の「カリフ」を攻めて利を失へるより國勢また衰へたりき（西紀二一七）

花剌子模の盛衰

成吉斯汗は花剌子模を征せむとし先づ其將哲伯をして西遼を滅さしめ尋て自ら諸子を率ゐて西征す（西紀二一八）朮赤、察合台等沿道の諸城を下し成吉斯汗は拖雷と共に不花剌（ブカラ）を陷れ撒麻耳干を下す默呼は裏海の一島に逃れて死せしが其子札剌丁（チエラルエヂン）兵を起して回復を圖れり成吉斯汗大に其兵を破りしかば札剌丁は信度河（インダス河）を越えて遠逃す蒙古の將追擊して印度に入りしが札剌丁は遂に「デルヒ」に走れり（デルヒには奴隷朝三世の王「アルタムシ」位にありき）かくて成吉斯汗は東歸の路に就きたれと其將哲伯と速不台（ソブタイ）とは裏海の西邊に沿

蒙古、西遼を滅す

蒙古、花剌子模を滅す

宋金相攻む

ひて北進し哥力米（ミクリヤ）に至りて還れり（西紀一二二四）

蒙古西征の間に金は北邊事少なかりしかは更に宋を侵し境土を擴めむとす宋もまた三道より金を攻め且書を西夏に贈りて連合を約す是より宋金の間に屢交戰ありしが後兩國共に困弊して兵を罷めたり時に金は汴京に遷りしより既に二十餘年を過き士風は愈優柔に陷り國勢は愈衰弱に傾くに至れり

蒙古金を伐つ

成吉斯汗は西征より歸りて夏を滅し更に西方より金を侵し六盤山（甘肅省鞏昌府にあり）に至りて崩し（西紀一二二七）窩濶台立つ是を太宗といふ太宗拖雷と共に金を伐ち遂に進みて汴京を圍み且使を宋に遣はして連合を求めたり金は一旦蒙古と和したりしが幾もなくして和議破れ哀宗蔡州に出奔し使を宋に遣はして連合を求めたれと成らす宋の理宗其將孟珙

蒙古宋と共に金を滅す

を遣はし蒙古と共に蔡州を攻めしめ遂に金を滅したり時に我が紀元千八百九十四年なり（西紀一二三四）

第四十二章　蒙古の隆盛　宋の滅亡

蒙古宋を征す

蒙古は既に金を滅し宋と境を接せしが宋の諸將中原回復の論を主張し遂に汴京を取り又洛陽を取れり太宗因て三道より宋を侵し東軍は淮西に入り中軍は隋鄂を下し西軍は蜀の諸州を下す（西紀一二三六）時に蒙古は更に阿羅思（今の露西亞）及ひ高麗を征したりき

蒙古阿羅思を征す

阿羅思は當時國内分裂して諸侯互に相爭ひしが朮赤の子拔都は貴由及ひ速不台等を率ゐて西征し烈也賛（リヤザン）を下し莫斯科「ウラジミル」等を破り（西紀一二三八）又師を旋して「チエル

ニゴフ」を圍み「キエフ」を陷れ更に諸軍を分ちて波蘭を破り匈加利を征し遂に多腦河を渡りて歐洲列國を震驚す（西紀一二一四）既に〜て太宗の崩したるを聞きて引き還りしが拔都は遂に阿羅思を領〜都を「サライ」に定め欽察王國の主となれり是を金黨の汗と稱す其兄斡耳朶別に其東方に國す是を白黨の汗といふ

欽察王國の起原

高麗は初め好を蒙古に通せしが後其使を殺しゝかは太宗其國を征せしめ京城を圍み更に南方諸州を侵す高麗質を送りて降を請へり（西紀二四二）後定宗を經て憲宗の立つに及ひまた高麗を征せしめたりき（西紀二五三）

蒙古高麗を征す

憲宗更に弟旭烈忽を遣はし西方亞細亞を征せしむ旭烈忽遂に「イスメール」の五十餘城を平け（西紀二五六）其王「ロクン、エヂン、クレシア」を降し（西紀二五六）更に八吉打を陷れて「モスタシム」を降す（西紀二五八）また「アレッポー」的迷失吉（ダマスクス）を下し進みて迷思耳（埃及）を取らむとしたりしが果さず更に「アルメニヤ」の地方を略し「タブリヅ」に都したり是を伊蘭王國の基とす

蒙古、西方亞細亞を征す

伊蘭王國の起原

憲宗また弟忽必烈をして大理國を討たしむ忽必烈遂に大理を破りて其王を虜にし更に吐蕃に入りて其王を降す（西紀一二五三）次て其將兀良合台は交趾を征す是より先き交趾は內亂屢起りて占城眞臘また來り寇す女主昭皇の立つに及び位を陳日煚に禪れり兀良合台遂に日煚をして朝貢の約を成さしめたりき（西紀二五八）

蒙古大理吐蕃交趾を征す

憲宗また宋を征す時に宋は理宗久く位にあり賈似道政を專にして國勢頗衰へり憲宗は合州を圍み忽必烈は鄂州を圍み兀良合台は大理國より來りて潭州を圍みたり（西紀二五八）

蒙古宋を征す

蒙古國を元と號す

賈似道兵を率ゐて鄂州を援ひしが窃に和を求む時に憲宗崩し阿里不哥(アリブカ)亂をなせるを以て忽必烈は遂に其請を許し和林に還りて帝位に即く是を世祖といふ世祖國を大元と號し都を燕京に定めたりき(西紀一二六〇)

元宋を征す

既にして宋は度宗立ちしが元は賈似道が其和約に背けるを以て遂に再南征し樊城を取り又襄陽を下す(西紀一二七三)度宗崩して恭帝の立つに及び世祖は更に伯顔を將とし江に順ひて東下し沿岸の諸城を下す恭帝因て賈似道を貶し勤王の兵を徵〳〵が文天祥、張世傑等皆兵を率ゐて入衛す既にして伯顔臨安に入り恭帝を執へて燕京に送れり(西紀一二七六)宋の群臣端宗を立てゝ福州に據りしが元兵既に各地を略し遂に福州を攻めしかは端宗は廣州に走れり文天祥、張世傑等頻に回復を謀りしかと成らす端宗遂に舟中にて崩す

宋の滅亡

宋の群臣遂に其弟昺を立てゝ崖山(廣東省廣州府新會縣南)に移れり元兵水陸兩路より南侵〳〵遂に文天祥を擒にし又崖山を破れり宋の陸秀夫帝を負ひて海に投し張世傑は交趾に赴かむとし途にて死す時に我が紀元千九百三十九年なり(西紀一二七九)

我が紀元千九百三十九年なり(西紀一二七九)

第四十三章　元初の外征及び内治

元日本を伐つ

日本は唐末に使聘を絶ちしより唯僧侶商賈の私に往來をなすに過きざりしが元に及びて世祖は好を通せむと欲し屢使を遣はしたれど達する能はず因て高麗と共に對馬、壹岐を侵し尋て使を遣はして招諭せしめむとす然るに北條時宗其使を斬り〳〵かは世祖遂に大兵を出して高麗と共に來り侵さしめしが皆大敗して還れり(西紀一二八一)元の敗績と日

本の富強とは當時世祖に仕へたる「マルコポロ」の記行によりて歐洲諸國にまて知られたりき

元緬國占城安南瓜哇を征す

元の大理を平くるに及び世祖は使を緬國に遣はして招諭せしめしが從ばず因て諸將を遣はして其國を征服せしめたり(西紀一二八七)又占城の叛服定らざりしかは世祖再其國を征せしめ道を安南に借らむことを求む安南王陳日烜恐れて拒守の計をなす世祖因て前後再安南を征せしむ然るに陳日燇の立つに及びて元に入貢したりしかは世祖遂に其征討を止め且占城征伐をも罷めたりき世祖また瓜哇を征して其國を破らしめたり(西紀一二九二)時に蘇木都剌、馬八兒の諸國皆元に朝貢したりき世祖崩して成宗立ち(西紀一二九四)瑠求を招諭し八百媳婦を征定し其勢猶盛なりき

元瑠求八百媳婦を征す

初め海都(太宗の孫)は阿里不哥に屬して世祖に背きしが遂に自ら蒙古大汗たるべきを主張し察合台王國(察合台の封せられし所にて中央亞細亞の地方を領す)の「ボラク」と共に阿母河畔の地を略す後「ボラク」は海都に背き援を欽察王國の「マングチムル」に求めて海都を討ちしが海都はまた「マングチムル」と同盟して「ボラク」を破れり尋て三國は共に和を講し海都を推して蒙古大汗となす(西紀一二六九)世祖は伊蘭王國の「アバカ」と結托し親ら兵を率るて海都を征し且甘麻剌を晉王とおして北邊を鎮せしめたり伊蘭も亦察合台の地を侵しゝかは海都は欽察と共に察合台を救ひたりき後明里鐵木兒は海都に附きて叛きしが成宗の時に及ひて海都死し其子察八兒は明里鐵木兒と共に元に歸順したり(西紀一三〇三)是より元は北邊の兵を罷めたりき

海都の叛

察八兒の降

世祖頗意を内政に留め官制を改め京師に中書省、樞密院、御

元の官制

史臺、及ひ寺、監、衛、寺を設け地方には行中書省、行樞密院、行御史臺等を設け路、州、縣に達魯花赤を置き諸官の長には必蒙古人を任す時に中書省の權力最盛にして遂に丞相專恣の原をなしたりき

元の學術宗教

世祖は新に蒙古文字を製せしめ字學を諸路に設け又儒教を重し道教を尊ひ喇嘛教を奉し耶蘇、回回の教徒をも優待せり就中西北慓悍の民俗を矯めむが爲めに最喇嘛教を奬勵せしが帝師八思巴の權威甚盛にして驕恣僭越を極めたりき

元の財政

世祖は屢外國を征伐し又藩王に賜與したりしかは國用足らず時に阿合馬、盧世榮、桑哥の徒相つきて理財の任に當り或は鹽稅を增し或は鈔法を理し或は錢穀を鉤し大に人民の望を失へり中に交鈔の發行最濫なりしかは遂に財政の紊亂を來すに至れり

第四十四章　元の衰亂　明の興起　明初の諸政

元末の形勢

元の中世は帝王の更立、丞相の專恣及ひ財政の紊亂と僧徒の跋扈との事跡に過きず世祖より十傳して順帝の時に及び伯顏丞相となりて威權を恣にす其養子脫脫順帝と謀りて伯顏を貶し自ら丞相となりて諸政を執れり（西紀一三三三）是の時に方り交鈔の價益下落して全く用をなさす物價騰揚して國用足らす賦斂繁重にして人民困めり且喇嘛の僧侶は寵を恃みて驕橫を極めしが漢人敵愾の氣は漸く盛に盜賊各地に蜂起するに至れり燕南、山東、河南の地騷亂最甚く或は名を回復に托し或は力

群雄の蜂起

を宗教に借れり中に台州の方國珍、河南の劉福通、徐州の李二、高郵の張士誠、湖廣の徐壽輝最勢力あり元の丞相脫脫出征して李二を平け又張士誠を破りしが讒によりて斥けられ哈麻代りて丞相となれり(西紀一三五五)時に内亂益甚く劉福通は韓林兒を迎て宋帝と稱し汴梁に都して各地を侵畧す徐壽輝の將陳友諒は江西の各地を下し遂に壽輝を害して漢陽に都す(西紀一三六〇)朱元璋も亦兵を起して江南の諸州を下し都を江寧に定め明玉珍は四川に據り元の宗族梁王は雲南に據れり

群雄の割據

明太祖各地を略す

元の内部にては皇族大臣黨を立てゝ相爭ひ攻戰絶えさりしかは國亂を鎭定する遑なく群雄の勢頗盛なりき劉福通は張士誠の將に殺されしが朱元璋は其將を破り又陳友諒を平けて湖廣の地を併せ又張士誠を擒にして江蘇の地を

明の太祖海内を統一す

明の太祖の諸政

領し更に福建、廣東、廣西を平けしめ又徐達、常遇春をして北伐せしめ順帝を上都(察哈爾御馬廠の東北)に走らし河南、山西、陝西の地を定めたり元璋帝位に即き國を明と號す是を太祖皇帝といふ時に我が紀元二千〇二十八年なり(西紀一三六八)

太祖更に諸將を遣はゝ上都を下し順帝を應昌(内蒙古克西克騰捕魚兒海旁)に走らす順帝の崩するに及ひまた其子愛猶識里達臘及ひ其將擴廓帖木兒を破れり太祖更に四川を征して明昇(明玉珍の子)を降し雲南を征して梁王を平け西南方の諸蠻を服し遂に海内を統一したりき(西紀一三七八)

太祖の政治は主として元末の諸弊を改むるにあり故に租稅を輕くし刑罰を嚴にし教化を尙ひ科擧を明にし吏治を重じ宦官を抑えて政事に關らしめず六部の尙書に任ゝて丞相專恣の弊を除きたり而して諸子を封して王室の藩屏

となし疑獄を起して功臣を除きたるか如きは其最意を致したる所とす是より功臣宿將は其跡を絶ちたれと封建の諸侯は漸く驕横なりき

燕王の反

太祖崩して太孫惠帝立ち官制を改革し且諸侯を削壓したりしかは燕王棣（惠帝の叔父）は遂に兵を擧けて反す惠帝諸將を遣はして出征せしめ兩軍交戰數年に亘りて互に勝敗あり後燕王は宦官の内通により遂に大擧して南侵し京師を下〜て帝位に即きたり是を成祖皇帝といふ時に我か紀元二千〇六十二年なり（西紀一四〇二）

明の成祖の諸政

成祖は諸侯の地位を復し州縣の租稅を免し刑罰を嚴にし四書、五經、性理の大全を編して教育科擧の標準とし又官制を舊に復したれと大學士は漸く機務に參し他日遂に宰相の實を有するに至れり

第四十五章　欽察、伊蘭、察合台の形勢

帖木兒の興起

欽察の盛衰

欽察王國は「マングチムル」より三傳して「トクトカ」に至り歐洲諸國と交通し漸く其文化に浸染す後其姪「ウツベク」立ち益版圖を擴め埃及と婚し宗教文學を保護し其勢頗盛なりき其子「チヤニベク」の立つに及ひ波蘭、匈牙利を侵し又伊蘭を攻めたりしが其死するに及ひ内亂相つき國勢遂に衰ふ

伊蘭の衰亂

時に白黨は哥力米派と共に金黨の王位を爭へり伊蘭王國は「アバカ」より數傳して「アブサイド」に至り欽察汗及ひ「ウツベク」人に侵されて國勢振はす其後繼嗣屢絶えて疎族位に上り且人種の混雜甚しく爭亂常に絶えす國勢漸く衰へて邦土分裂し花剌子模、八吉打等皆獨立するに至れ

察合台の内亂

帖木兒兵を起す

り察合台王國は「ボラグ」の子「ドア」立ちしか其死するに及ひ諸子更〻位に即き凡三十餘年間に十三君を經たり尋て「カザン」位〻上りしかと人民を虐遇したるを以て其下に殺されたり是より國内大に亂れて諸王更立し「トグルク、チムル」は王位を嗣くべきを主張し兵を起して王位に即き其子「エリアス、ボチア」をして撒麻耳干(サアルカント)に治せしめたりき

帖木兒は「トグルク、チムル」の部下に在りしが兵を「カンタガル」に擧げ「エリアス、ボチヤ」を破り「ウツベク」人を逐へり時に明の太祖即位の翌年なりき(西紀一三六九)帖木兒は更に察合台王國の地を畧し又花刺子模を伐ち花刺散「マザンデラン」を下して伊蘭王國の地を畧したりき(西紀一三八三)

欽察王國の哥力米派なる「トクタミシ」は白黨に逐はれて帖木兒に投す帖木兒因て「トクタミシ」を助けて王位に即かしめたり(西紀一三七六)尋て「トクタミシ」は莫斯科を服して再勢力を得たりしが後帖木兒に背き花刺子模「ウツベク」人と謀を通して來り侵す帖木兒逆擊〻て其軍を破り遂に花刺子模を下し「トクタミシ」を烏刺耳(ウラル)地方に逐ひ「ウツベク」人を也兒的(エルテ)石河上に破り更に欽察王國に入り「トクタミシ」を破り別に欽察王を擁立〻たりき(西紀一三九一)

帖木兒欽察を伐つ

帖木兒印度を征す

帖木兒また印度を征す時に印度は「デルヒ」の「トグラク」王朝大に衰ひ諸國分立して爭亂止まざりしかは帖木兒は其機に乘して印度に侵入し「ムルタン」を降し「バニトル」を拔き「デルヒ」を下す(西紀一三九八)時に土耳其の「バヂヤゼット」は埃及、八吉打の士丹(ソルタン)と連合して來り侵す帖木兒因て急に兵を班したりき

初め突厥種族の「オスマン」及ひ「オルカン」は伊蘭王國の衰に

帖木兒土耳其を破る

乘して西方亞細亞を侵畧したりしが「アムラス」一世の立つに及ひ都を「アドリヤノープル」に定めて近傍を征服す是を土耳其帝國の初めとす其子「バヂヤゼット」は希臘を侵し君斯丹丁堡を取り遂に其勢に乘して帖木兒を伐たむとす帖木兒因て先つ小亞細亞の各地を下し埃及の士丹を走らし八吉打を圍み更に土耳其と「アンゴラ」に戰ひて「パヂヤゼット」を虜にしたりき(西紀一四〇〇)

帖木兒明を侵さむとす

帖木兒は屢使を明に遣はゝたりしが明の太祖も亦報使を送れりかくて成祖の時に至り帖木兒は全く近傍の諸國を從へたれば更に東征して明を侵さむとす成祖因て甘肅の總兵宋晟に命して其備をなさしむ既にして帖木兒は途に死して其志を果さず(西紀一四〇五)其子再好を明に通せしかは明は幸に其攻撃を免れたりき

第四十六章　倭寇　朝鮮の興起　韃靼安南の形勢

倭寇の起原

日本は元寇の後より南北の亂に及び朝令四方に行はれず西陲の人民出でゝ高麗の南邊を侵し延きて元明の沿岸に及べり是を倭寇といふ高麗王及び明の太祖は屢使を日本に遣はして禁絶せられむことを請へり然るに侵寇猶止まず明は沿海に城塞を築き衛所を設く高麗は李成桂倭寇を防きて功あり漸く威權を專にす後高麗が元に通して明を侵さむとするに及び李成桂は其議に反して廢立をなし遂に王位を簒して國を朝鮮と號す是を太祖といふ(西紀一三九二)日本は南北既に一に合し足利義滿政を執りて海禁を嚴にし明の成祖と和親を結ひしより倭寇は漸く其跡を絶つに至

朝鮮の興起

れり

韃靼の形勢

元主脱古思帖木兒は猶明の境上に寇せしかは太祖諸將を〳〵て出征せしめ大に其兵を破れり後坤帖木兒に至り鬼力赤といふ者簒立して國を韃靼と號し又可汗と稱す（西紀一三九九）既にして其臣阿魯台鬼力赤を弑して本雅失里を立てまた明使を殺す成祖因て親征し斡難河に至りて其軍を破りしかは本雅失里は瓦剌に走れり（西紀一四〇九）時に瓦剌の勢漸く盛なりしが其刺酋馬哈木は本雅失里を殺し答里巴を立てゝ可汗とし明に通〳〵て阿魯台を除かむとす阿魯台因て明に

明の北征

内附し瓦剌を伐たむことを請へり尋て成祖瓦剌を征して土拉河に至るに及ひ馬哈木は使を遣はして明に朝貢す（西紀一四一四）然るに阿魯台また明に背きしかは成祖親征して其兵を破れり後成祖は兩回阿魯台を征せしが遂に病に罹りて

崩し仁宗を經て宣宗に至れり時に阿魯台は脱脱不花に破られ更に瓦剌の脱歡（馬哈木の子）に殺されたり（西紀一四三四）是より瓦剌の勢獨盛なりき

安南の形勢

安南は屢占城と爭ひたりしが黎季犛は占城を征せる功を以て權を專にし遂に簒立して國を大虞と號す（西紀一四〇〇）次て位を其子漢蒼に傳へて使を明に遣はす時に明の惠帝の世なりき漢蒼大に國政を修め又大擧して占城を伐つ占城援を明に求む明の成祖因て占城を救ひ又陳氏の遺族を援けて安南を伐ち漢蒼父子を擒にしたりき（西紀一四〇六）既にして騷

明の南征

亂起りて黎利等各地に割據す明の宣宗諸將をして往き征せしめしが利あらず黎利の勢益盛にして陳氏の後を立つるを約し兵を罷めむことを請へり宣宗因て其請を容れて遂に安南を棄つ（西紀一四二七）後黎利陳氏の裔絶えたりと稱し更

に明に請ひて自ら安南王となり遂に獨立するに至れり（西紀一四三一）

明麓川を征す

瓦剌明を侵す

第四十七章　明の外患と宦官藩王の禍

明の英宗より武宗に至る間に起れる外患を麓川、瓦剌、韃靼土魯番の關係とす麓川の酋思任發は緬甸を略し又其近傍土司の地を侵しゝかは英宗兵を發して麓川を伐ち思任發を緬甸に走らす（西紀一四三八）尋て王驥をして緬甸を圖らしめしが果さずして引き還し更に騰衝に戍兵を設けて諸蠻を控制す後王驥また麓川を征したりき（西紀一四四八）瓦剌の脫歡は脫脫不花を立てゝ可汗とし自ら亟相となりしが脫歡死して也先嗣くに及ひ其勢益盛にして兀良哈を破り朝鮮を脅し且大舉して明に寇す（西紀一四四九）英宗親征して

瓦剌の形勢

韃靼明を侵す

明の吐魯番經略

土木（直隸省宣化府土木堡）に至り遂に虜にせられしかは于謙等景帝を立てゝ守禦の備をなす也先更に進みて京師を圍みしが明兵の來り集れるを以て引き返り且英宗を還す既にして也先遂に脫脫不花を弑して自ら可汗と稱せしが尋て其臣に殺されたり（西紀一四五四）是より廢立相つきて韃靼の部長益專横を極め明の憲宗の時に及ひ其河套に據る者共に滿都魯を可汗となし大舉して明を侵す（西紀一四六五）憲宗王越をして出征せしめ大に其兵を破りしかば韃靼の部長皆遠く去りて河套に居らず明の北境稍事少なきを得たりき

土魯番の酋長阿力は哈密の都督罕愼を破りて遂に其地を占領したりしかは明の憲宗は諸將を遣はして征討せしめ其回復を謀れり後罕愼は哈密を回復したりしが憲宗崩して孝宗の立つに及び土魯番また其の地に據れり（西紀一四八八）孝

宗因て張謙等をして經略せしめたりき（西紀一四九五）孝宗崩して武宗の立つに及び明の國勢は益衰へ宦官藩王の禍頗甚しかりき

宦官の專恣

初め明の太祖は宦官の政事に與るを禁し且其讀書を禁したりしが成祖の時に及ひ其讀書を許し且東廠の長とす宣宗また內書堂を立てゝ宦官に教授したりしかは宦官漸く勢を得て權を專にし英宗の時には王振あり憲宗の時には汪直あり皆兵權を握りて專横を極めたり孝宗の時稍宦官を斥けたれと武宗に至りて劉瑾また跋扈を極めたりき

藩王の友

劉瑾が正士を斥け朝政を紊りしより安化王寘鐇兵を擧けて反す（西紀一五一〇）幾もなくして事平き劉瑾も誅せられしかと地方には盜賊蜂起し直隸、山東、四川、江西の地最しかりき幸にして皆平定に歸したりしが寧王宸濠また兵を起して反す時に王守仁其亂を平けたれと內には江彬の徒猶權を專にしたりき（西紀一五一九）武宗崩して世宗立ち江彬を誅したれと明の國勢は愈衰へて外寇益盛なりき

第四十八章　韃靼の侵略　倭寇　朝鮮の役　清の興起

小王子の侵寇

韃靼の卜赤また小王子と號し其族吉囊、俺答と各北邊に雄視す小王子最富强にして屢明に寇したりしか後東方に徙りて土蠻（土默特と同し）と號す（西紀一五三二）是より吉囊俺答は河套に據りて屢明を侵せり吉囊の死に及び俺答の勢獨盛にして山西の各地を侵し宣府、大同、延安等の地に寇す後古北口より入り北京の近傍を抄掠して去れり（西紀一五四二）尋て明と馬市を通したれど侵寇猶止まざりき

俺答の侵略

倭寇の再起

初め日本の商船明に赴く者多く貿易の道頗開けしか世宗の時其商民事によりて浙江を擾す(西紀一五二三)是より倭寇また起りて沿海の地を侵す明の諸將防禦の任に當りて海禁を嚴にしたれと効なく倭寇は益猖獗を極め明の徐海、汪直の徒皆其群にありき胡宗憲か軍務を總督し謀を以て徐海、汪直を除きしより江蘇、浙江の患頗止みたれと福建、廣東の侵

倭寇の平定

掠益甚しかりき尋て戚繼光は俞大猷と共に纔に其難を平けたれと倭寇の殘黨は臺灣を占領し猶時に明を侵したりき(西紀一五六七)

明政の頽廢

かく明は南北の外寇甚しきに方り世宗は毫も心を國事に用ひず道教を尊奉し又嚴嵩を信任す嚴嵩姦佞にして前後二十餘年威柄を弄したり世宗晩年嚴嵩を去りたれど幾もなくして崩し穆宗立ちて張居正を任用す(西紀一五九二)尋て穆宗崩して神宗立つに及ひ居正諸政を輔けて紀綱を振へり然るに居正の薨するに及び朝政擧らす朝鮮の役起れり

日本朝鮮を伐つ

朝鮮は宣祖に至り國勢衰へて紀綱振はす時に日本の豐臣秀吉は明を征せむとし先つ兵を出して朝鮮を伐ち殆其八道を下さむとす(西紀一五九七)明因て兵を出して赴き援けしめしが平壤に至り日本の兵と戰ひて敗績す因て沈惟敬を遣はして和を議せしめ又李如松を遣はして平壤を復せしめたれと碧蹄館に至りてまた大敗す是に於て更に沈惟敬をして和を成さしめしが幾もなくして和議また破れ日本の兵

明と日本との和戰

再朝鮮を伐つ(西紀一五九七)明因て更に水陸の兵を發して赴き援けしめ交戰歲餘に亘れり既にして秀吉の薨せるを以て日本の兵皆還り明も亦其兵を引き上けしかは朝鮮は滅亡を免れたりき

明國の疲弊

明は朝鮮の役に加ふるに寧夏、播州に兵を用ひたれは財用足らず國帑缺乏し鑛山を開き租稅を增し人民の怨を買へり時に韃靼の勢衰へて其侵寇少なかりしかと滿洲に愛親覺羅努爾哈赤起りて屢明に寇すに至れり

清の太祖の興起

初め女眞の種族は滿洲に割據したりしが努爾哈赤の赫圖阿拉に起るに及ひ悉く滿洲五部（蘇克素護河、渾河、完顏、棟鄂、哲陳）を定め（西紀一五八八）又長白の鴨綠部を下す後其勢愈盛なるに及ひ近隣の諸部併呑せられむことを恐れ連合して來り侵す努爾哈赤大に其軍を破り扈倫及ひ東海の諸部を下し更に葉赫を攻め大に明の援軍を破りて遂に葉赫を滅す（西紀一六〇九）是より其境域東は海に至り西は遼東に抵り南は海を控え北は黑龍江に至れり努爾哈赤の勢益盛にして瀋陽（今の奉天府）遼陽を下し遂に遼陽に都し遼河を渡りて明の諸城を下し更に都を瀋陽に移す（西紀一六二五）是を清の太祖といふ

明の文學

第四十九章　明代の文化及ひ其黨爭內亂

明の初め宋濂は文を以て高啓は詩を以て著はれしが李夢陽、何景明の出つるに及ひ復古の風大に起れり後李樊龍、王世貞出でゝ古文辭の勢殆海內を風靡したりしが袁宏道兄弟の出つるに及ひ文學の氣運また一變するに至れり且詞曲小說は元より明に至りて益行はれたりき

明の儒學

儒學は太祖、成祖が宋學を重せるより當時の學者皆之に傾き薛瑄、胡居仁は程朱を主とし王守仁の出つるに及ひ遂に良知良能の說を唱導し程朱の學と共に人心に影響を與へたりされは當時の士大夫多くは理論を尙ひて直情を主とし殊に言官の如きは意氣を尙ひて矯激に陷り遂

東林黨の起原

に黨爭の因をなすに至れり

神宗の時顧憲成、趙南星等事によりて皆官を罷めたりしが憲成は其鄕無錫に還り同志の徒と學を東林書院に講し頗朝政を諷議す不平の徒其風を聞きて響附す南星も亦鄕に歸り徒を集めて學を講したり時に朝廷の諸臣には憲成等を攻擊して東林黨と稱する者あり是より朝野の士兩派に分れて互に軋轢したりしが後非東林黨勢を得て悉く東林黨を斥けたり(西紀一六一五)神宗崩して光宗、熹宗相つきて立つに及ひ三案(挺擊、紅丸、移宮)の議起り東林黨は理論に據り非東林黨は情實を主として互に相爭へり熹宗が趙南星を吏部尚書となすに及ひ東林黨の勢また盛にして非東林黨を排す(西紀一六二三)非東林黨は遂に宦官魏忠賢と結托し趙南星等を斥け悉く東林黨を除き各地の書院を毀ちたり(西紀一六二七)毅宗立ちて

黨派の軋轢

流賊の亂

流賊北京を下す

忠賢及ひ其黨を貶殺したれと明の國勢は益衰へて振はす外は清兵の侵略盛にして內は流賊の騷亂また起れり

初め陝西飢饉にして賦歛繁重なりしかは流賊蜂起して陝西及ひ山西の地を侵す(西紀一六二九)中に張獻忠、李自成の徒最勢ありき後獻忠は武昌を陷れ蜀に入りて遂に成都に據り李自成は開封、襄陽を陷れ遂に西安に據りて國を大順と號す(西紀一六四三)時に明は清兵の南侵を防くに急なりしかは力を討賊に專にすると能はす李自成は山西の各地を下し居庸關を過きて北京を圍み遂に其城を下す時に我が紀元二千三百四年なり(西紀一六四四)

第五十章　清の攻略　明の滅亡

清の統一

清の太祖崩して太宗立ち屢明を攻めて諸城を破り又蒙古の察哈爾、土默特、鄂爾多斯を下し更に大擧して明を征し遂に國を大清と號す（西紀一六三六）時に近隣の諸國皆清に服從したりしが唯朝鮮のみ從はず太宗因て親征して其國都に入れり時に朝鮮は援を明に求めしが明は流賊の難あるを以て其求めに應すると能はず朝鮮因て清に降り其正朔を奉したりき（西紀一三六六）

清明を征す

清朝鮮を下す

太宗屢明を征して各地を下しゝが太宗崩して世祖の立つに及ひまた多爾袞をして明を征せしむ明は李自成の迫るを以て其將吳三桂を召し還す三桂途にて北京の陷り毅宗の崩したるを聞き清に降りて共に李自成を逐ひ北京を復す世祖遂に都を北京に移し更に山西を定め陝西を伐ちて李自成を破れり（西紀一六四四）

清明を征し北京に都す

明の王族國を江南に建つ

明の福王は別に國を江南に建てしが清兵河南、山東を下し遂に進みて揚州を陷れ更に江を渡りて南京及ひ太平を陷れて福王を降す（西紀一六四六）是に於て唐王は福州にて帝位に即き魯王は紹興にて監國と稱す世祖剃頭の令を下すに及ひ不平の徒江蘇の各地に起れり清兵遂に江蘇を下け又江西を下し更に張獻忠、李自成を平けて四川、湖廣を下し浙江に入りて魯王を走らし福建に入りて唐王を虜にす尋て桂王は肇慶にて位に即きしが清兵遂に南侵して桂王を走らす（西紀一六四七）明の張名振は魯王を奉して舟山に據り瞿式耜は桂王を奉〳〵て廣西を定めたり清兵が桂林を下し舟山を破るに及び桂王は南寧に移り援を安南に借らむとす魯王は厦

清江南諸省を下す

鄭成功臺灣に據る

門に走りて鄭成功に依れり成功因て温州、台州を下し又楊子江に入りて鎭江、南京を下す既にして戰敗れて厦門に歸り後臺灣を取りて魯王を奉したり是より先き清兵南寧に迫りしかは桂王は安隆所に走り又雲南に走れり清兵三路より雲南に入りしかは桂王は緬甸に逃れ緬甸王に執へられて清に送られたり魯王及ひ成功も亦相つきて死し成功の子鄭經猶臺灣に據りて明の正朔を奉す時に我か紀元二千三百二十三年なり（西紀一六六三）

明の滅亡

清は世祖崩して聖祖立ちしが明の降將吳三桂は雲南に尙可喜は廣東に耿繼茂は福建にあり然るに三桂先つ兵を擧けて反し四川、貴州、湖南を下す（西紀一六七三）時に耿繼茂の子精忠も亦反す尙可喜の子之信も亦父を幽して三桂に通す聖祖因て諸將を遣はして征討せしめしが精忠、之信皆降り三桂は帝號を僭して死す清兵遂に其子世璠を破りて雲南を平けたりき（西紀一六七八）

三藩の亂

臺灣の鄭氏は屢援を日本に求めたれど得ず又耿精忠と連和したりしか忽隙を生し福建の沿岸を侵し又清兵と戰へり後鄭經死して子克塽立ちしか雲南の平くに及ひ清の將施琅先つ澎湖を取り遂に臺灣を伐つ克塽拒くを能はず遂に出て降れり時に我か紀元二千三百四十三年なり（西紀一六八三）

臺灣の平定

第五十一章　莫臥兒帝國の形勢　西人の東漸　露清の衝突

帖木兒の崩してより其國内また分裂したりしが其五世の孫に「バーバル」といふ者あり「カブル」に據り漸く勢を得て其

「バーバル」の興起

莫臥兒帝國の隆盛

莫臥兒帝國の衰頽

近傍を併せ遂に印度を侵さむとす時に印度は「ロデ」朝の支配する所たりしか諸侯離叛して各獨立を謀れり「バーバル」因て印度に入り「ロデ」朝を滅し「デルヒ」に都し印度の大半を領す(西紀一五二六)「バーバル」崩して「フマユン」立ち「ベンガル」王に逐はれて波斯に走りしが後其子「アクバル」と共に來りて舊地を復し近方を略し「アグラ」に都す(西紀一五六〇)「アクバル」意を諸政に用ひ信教の自由を許し大に人心を收攬したりき是を莫臥兒帝國の始祖とす後「アフランゲーブ」の時に及び波斯、阿富汗と兵を構へ且信教の自由を禁したるより印度教徒は連合して反抗を企てたり是を「マラッタ」同盟といふ(西紀一六八三)かく内憂外患交起り〳〵かは莫臥兒帝國の勢は遂に衰ふるに至れり時に西人東漸の勢正に盛にして其先鞭を着けたるを葡萄牙人西班牙人とす

葡人西人の印度南洋經略

支那天文曆法の變化

蘭人の東征

葡萄牙人は「ヴァスコ、ダ、ガマ」の喜望峯を發見せる後益東方に來り印度の臥亞(ゴア)、錫蘭(セイロン)等の地を略有〳〵(西紀一五一〇)西班牙人は非律賓群島を占領〳〵たりき(西紀一五六五)又其徒の明に來れる者亦多く「フェルヂナンド、アンドレー」の後「フランシス、サヴール」「マテオ、リシ」(利瑪竇)あり「マテオ、リシ」は初め廣州に來り後北京に入り徐光啓等の信仰を受け天文曆法に關する著譯少からず(西紀一六〇〇)支那の天文曆法は此の時より一變するに至れり又日本に來りて布教及ひ通商をなす者ありき葡萄牙、西班牙に次きて東方を經略せるを和蘭人、英吉利人とす

和蘭人は印度に來りて葡領を奪ひ勃泥(ボルネオ)及ひ爪哇を略〳〵明及ひ日本に來りて貿易を求め遂に臺灣を占領す(西紀一六二一)後鄭成功の臺灣を取るに及び清軍を助けて鄭氏の軍を討ち又日本に通し永く長崎にて貿易するを許されたりき

英人の印度經略

英吉利人も印度に來り東印度會社を設けて貿易に從事し（西紀一六〇〇）遂に葡萄牙人に勝ち蘇門都剌瓜哇、暹羅等に商館を設け明及ひ日本にも通したりき後和蘭と競爭して勝たさりしかど獨印度にては益勢力を得て「マドラス」「ベンガル」等を占領し盛に貿易を營みたり（西紀一六三九）是を其印度蠶食の基とす

露人の悉比利亞經略

露西亞人は明の中葉に至りて蒙古の裔を滅せるより頗勢を得て烏剌爾山を越えて東征し蒙古の諸族を下し悉比利州を立つ（西紀一五一四）後哈薩克の「エルマーク」露西亞に降りて東征の任に當り也兒的石河畔を略す「エルマーク」の戰死するに及ひ其勢稍頓挫したりしかど露西亞人の經略怠らず益人口を移植し「トボルスク」「トムスク」の府縣を設け又「ヤクーツク」に將軍を置きたり時に「ボヤルコフ」は黑龍江を探驗し

清露の衝突

「ネルチンスク」の條約

「ギリヤク」人を下す（西紀一六四三）次て「ハバロフ」また探驗をなし「アルバジン（雅克薩）」を下し猶進みて滿洲人に逢へり是れ清の世祖の時にして清露衝突の始めなり（西紀一六五二）後世祖は「アルバジン」を下して露西亞人を逐ひしが聖祖の時に至りて露西亞人はまた「アルバジン」を取れり（西紀一六八二）聖祖因て愛琿城を築き薩布素を留めて露西亞人に備へ且臺灣の平きしを以て更に「アルバジン」を攻めて其守將を「ネルチンスク」（尼布楚）に走らす既にして露西亞人また「アルバジン」に據りしかは聖祖は薩布素に命して攻擊せしめたり（西紀一六八五）時に露西亞は全權大使「ゴロヴェン」を遣はして經界の談判をなさしめむとし「アルバジン」の圍を解かむことを請へり聖祖因て薩布素をして兵を撤せしめ且內大臣索圖を遣はし「ゴロヴェン」と「ネルチンスク」に會せしめて七條の條約を訂結す時に我

が紀元二千三百四十九年なり（西紀一六八九）

第五十二章　清と蒙古西域及ひ西南諸國

蒙古の形勢

蒙古は各部に分れしが清の太宗の時漠南の諸部は皆清に降れりされど漠北ゑは喀爾喀あり漠西には厄魯特（瓦剌と同し）ありて猶下らさりき厄魯特は四部に分れしが準噶爾王噶爾丹の勢最強く他の三部（都爾伯特、土爾扈特、和碩特）を併せ又回部を攻めたりき（西紀一六七八）

回部の形勢

回部は初め喀什噶爾王の領せる所にして白山黑山の兩回教派ありて互に相爭へり後黑山派の「イスマイル」立ちて白山派の教主「アバク」を逐ふ「アバク」西藏に逃れ遂に救を噶爾丹に求めたり噶爾丹因て兵を出して喀什噶爾を破り「アバク」を立てゝ天山南北を併せ更に喀爾客を侵す（西紀一六八八）是に

清準噶爾を征す

於て喀爾喀の三部（土謝圖汗車臣汗、札薩克圖汗）皆清に降れり聖噶因て屢準噶爾を征せしが噶爾丹自殺し阿爾泰山以東の地は皆清領に歸す（西紀一六九四）後其姪策妄拉布坦伊黎に據りて西藏を侵す清の聖祖因て兵を出して西藏に入り準噶爾の兵を逐ひ遂に達賴喇嘛を封し兵を駐めて還れり（西紀一七二〇）

清西藏を略す

聖祖崩して世宗の立つに及び青海背きて西邊を侵す世宗因て諸將をして青海を破らしめ其酋長を準噶爾に走らす尋て準噶爾を征せしめ更に其降を許す高宗の立つに及び準噶爾を征し遂に其地を平定す既にして阿睦撒納また其地に據りて叛きしが清兵再征討し全く準噶爾の地を下す

清準噶爾回部を下す

時に我が紀元二千四百十七年なり（西紀一七五七）其後幾もなくして回部の亂起りしが高宗諸將をして征討せしめ遂に其地を平けたり（西紀一七六二）かくて清は伊黎、塔爾巴哈台、烏爾木齊、喀

清の西域行政

什噶爾を四鎮と〜參贊大臣、辦事大臣及び領隊大臣を置き更に將軍を伊黎に設け又地方の行政を整ひ租稅を輕く〜風俗宗教の自由を許したり後伊黎に惠遠城を築き烏爾木齊に都統を設け天山北路に駐防の兵を置き南路に換防の兵を置きたりき

清緬甸を征す

清の高宗既に西城を平け又金川を破り緬甸を征す初め木疏の甕籍牙緬甸王となり暹羅を征して其國都を取り(西紀一七六七)益其地を擴め遂に清の南境を侵す清の高宗明瑞をして征討せしめしが利あらず更に傅恒をして征討せしめ遂に其降を許したりき(西紀一七六九)後緬甸は暹羅を破りて其地を取れり

暹羅の獨立

暹羅に鄭昭といふ者あり兵を起〜て緬甸の兵を走らし自立して王と稱し屢柬埔寨を代ち又安南の阮氏と爭へり後鄭昭の弟立ち安南と和を講したりき

安南の亂

初め安南王黎氏の臣阮氏は別に國を建てしが後阮文惠兄弟の亂あり其王阮福順は擒にせられて死し阮福映立つ(西紀一七七九)時に阮文惠の勢益强く柴棍に迫りて阮福映を暹羅に逐ひ更に東京を下して黎氏の王維祁を逐ふ(西紀一七八六)清の高宗黎氏を助けむとし孫士毅を〜て出征せしめ大に阮文惠の兵を破り〜が後また利を失ふ文惠暹羅の寇あるを以て清に降り遂に安南に據れり(西紀一七八八)

清安南を征す

清廓爾喀を征す

廓爾喀(ネパールの地)は西藏を犯しゝが高宗の兵を出〜て征討するに及ひ遂に清に降れり時に我か紀元二千四百五十四年なり(西紀一七九四)

第五十三章　清初の文化及ひ其衰運

清は滿洲より起りて明に代りしが常に其國俗を失はざら

むことを務め且漢族をして滿裝をなさしめたりされど其制度に至りては明の遺範を襲きたる者多し

清の官制

中央政府の組織は內閣を中心とし大學士其機務を總理し六部（吏、戶、禮、兵、刑、工）を支體とし尙書其政令を分掌し更に軍機處を設け軍國の大事を處分す都察院は百官を糾劾し通政使司は章奏を通達す地方政府は支那本部を十五省（後十八省となす）に分ち數省に總督（直隸四川のみは一省一總督とす）あり各省に巡撫（直隸四川のみは置かず）ありて文武の政令を統べ布政使は財政を掌り按察使は刑獄を理す又府に知府、州に知州縣に知縣ありて民治を掌れり滿洲は將軍、都統ありて軍民を理す（但盛京省には五部の侍郎ありて各事を掌分す）蒙古新疆及ひ西藏は各其制度を異にして京師の理藩院に屬す凡て京官は滿人と漢人とを並び用ひて相制せしめ其人物を登用するは多く鄕試、會試、殿試の法によれり

清の兵制

兵制は八旗綠旗に分つ八旗は滿洲八旗蒙古八旗漢軍八旗に別れ京師を守るを禁旅八旗と稱し地方を守るを駐防八旗と稱す每旗皆都統副都統ありて其統轄をなす綠旗は明の亡後に漢人を編制したる者にて各地に駐防す提督、總兵ありて其指揮をなし總督、巡撫の節制に屬す

清の學術

清に至りて明代理學の反動として考據の學起り顧炎武の如きは其稱首たり閻若璩、毛奇齡の經說に於ける顧祖禹胡渭の地理に於ける錢大昕、趙翼の歷史に於ける皆其萃を拔きたる者とす又文學は侯方域魏禧汪琬の文に於ける吳偉業、王士禎、查愼行の詩に於ける金聖嘆、李漁の小說、戲曲に於に於ける皆其最著しき者とす蓋清初學者の輩出せるは聖祖、高宗が學術を奬勵し且諸書を編纂せしめたるとと與りて力ある可し

清の宗教

佛教、道教は支那本部に行はれ喇嘛教は蒙古、西藏に行はれ耶蘇教は明末より各地に行はれ清に及ひ事によりて其布教を禁せられしが廣東、廣西の地には猶盛に行はれたりき回教は天山南路より陝西、甘肅の地方に行はれ白蓮教は明代より嚴禁せられしかと猶竊に民間に行はれたりき

白蓮教徒の亂

高宗の世は清の極盛の時にして武威四方に輝き文化各地に及べりされど其晩年財政疲弊し白蓮教徒亂を作し國勢漸く傾かむとす（西紀一七九六）仁宗の立つに及び白蓮教徒の亂益甚く湖南、湖北、河南、四川、陝西、甘肅に蔓延して侵掠を逞くす時に太平の餘にして士氣振はず七歳を費して纔に平定の功を奏したりき（西紀一八〇二）尋て海盜の臺灣を侵し福建、浙江に寇すあり事幸に平きしかと清の國勢は夕陽殘月の如くなりき

第五十四章　英國の印度經略　英清の戰爭　清國の內亂外寇

莫臥兒帝國の衰勢

莫臥兒帝國は「アフランクゼーブ」の後諸帝皆暗昧なりしかは國勢振はす南方の地方は獨立し「マラッタ」は益勢を得て各地を併略す加ふるに波斯、阿富汗斯坦の來侵ありき

英人印度を略す

英吉利人は既に勢力を印度に得たりしか佛蘭西人も亦「ポンヂシェリ」に據り「ベンカル」藩王と氣脉を通し常に相軋れり後東印度會社の書記「クライブ」は「ベンガル」を征して其王を破り遂に知事となり佛蘭西人を破りて其地を取れり後「クライブ」か再知事となるに及び「ベンガル」藩王を破り莫臥兒帝より各地の收稅權を得たり「ヘスチング」か總督となるに及ひ英吉利人の勢益盛なりき後總督たる者相つきて「マイ

ソル」を削り「ネパル」を征し「マラッタ」を從へ緬甸を略し益英吉利の勢力を擴めたりしか「アウクランド」が總督たる時に至り

鴉片貿易

鴉片の事に關して清國と戰を開くに至れり

初め英吉利は印度を蠶食せるより盛に鴉片を清國に輸入し其害毒甚しかりしかは宣宗の時湖廣の總督林則徐を廣東に遣はし其鴉片を燒き且貿易を禁せしむ(西紀一八三九)英吉利人因て印度より軍艦を派して廣東を攻め更に貿易を復せむことを求めたれと成らす英艦は舟山、乍浦を下し寧波を下し更に渤海に入り白河に泝り北京に迫らむとす清廷廣東にて和を議せむとを求めしが和議遂に成らす時に英の後軍至り廣東を攻め厦門を取り定海、鎭海寧波、乍浦を下し又吳淞を破り鎭江を取り將に南京を攻めむとず清廷因て再和を求め伊里布、耆英を遣はし英の全權公使「ポチンジヤ

英人清國を侵す

清英の和約

ー」と南京に會して條約を結はしめ遂に香港を割き償金(二千一百萬兩)を出し廣州、福州、寧波、厦門、上海の五港を開くとを定めたり時に我か紀元二千五百〇二年なり(西紀一八四二)

鴉片の戰爭より清廷の威大に減〜人民また朝廷を重せす兩廣の地には盜賊屢起れり時に耶蘇教徒に洪秀全といふ者あり清朝の末運を察し其教を利用し遂に兵を廣西に起したり是を長髮賊といふ(西紀一八四九)宣宗崩して文宗の立つに及び其勢頗强く廣西の各地を徇へ國を太平天國と稱し自ら天王となり湖南に出てゝ長沙を攻め進みて武昌、漢陽を下し更に長江を下り遂に南京を取りて都となす其將更に江北の各地を下し屢清軍を破れり(西紀一八五三)曾國藩が兵を湘鄉に起すに及ひ清軍頗振ひ武昌、漢陽を復したりしが賊將また其地を取れり尋て胡林翼其地を回復したれと洪秀全

長髮賊の興起

長髮賊南京に據る

英佛清を侵す

清と英佛と和す

は猶南京に據り兵を出して各地を侵掠したりき

清國が五港を開きしより各國との貿易頗盛なりしが葛藤常に絶えず英吉利人は船舶の事に關して不和を生し廣州を燒き遂に佛蘭西を擁して清廷を脅す時に清廷は和議を求め天津にて條約を結べり然るに清兵が白河にて二國の使節を砲擊せるより二國は大舉して太沽、天津を下し遂に北京に侵入す時に文宗は逃れて熱河に在りしが恭親王をして和を求めしめ且露西亞の公使「イグナチーフ」の斡旋により遂に償金（千八百萬兩）を出し更に牛莊、登州、臺灣、潮州、瓊州、九江、漢口を開くことを定めたり時に我が紀元二千五百二十年なり（西紀一八六〇）

露西亞は「チルチンスク」條約の後恰克圖條約を結び益東方の經略に怠なかりしが「ムラヴヨフ」の東悉比利州の總督たるに及ひ鋭意版圖を擴め境界改正の事を清國に迫り愛琿條約を結ひたり（西紀一八五八）是に至りて「イグナチーフ」はまた北京條約によりて烏蘇利江東の地を得たりき

露清の關係

長髮賊の平定

長髮賊は猶猖獗なりしが曾國藩、左宗棠、李鴻章の諸將各鄕勇を率ゐて漸く各地を回復す文宗崩して穆宗の立つに及び西人を用ひて洋鎗隊を編制し屢賊兵を破り遂に南京を下し洪秀全を平けたり（西紀一八六三）是より鄕勇を設け江軍を置きて軍制を作新し又釐金稅を加へて海關稅と共に財源を補足し朝廷は頗中興の觀ありしかと各地は戰亂によりて疲弊を極めたりき

第五十五章　中央亞細亞の形勢　英露清の爭衡

「マームート」の興起

波斯阿富汗斯坦の興亡

中央亞細亞なる「アム」河の北部は久く「ウツベク」人に歸し南部は亞富汗人に屬したりしが後「ウツベク」人の地は敖罕、布哈爾、基華の三國となり阿富汗人の地は「ペシヤワル」「カブル」「ヘラット」等に分れたり「マームード」の起るに及び阿富汗人の地を併せ遂に波斯に侵入し「サファビー」朝を滅し波斯に君臨す(西紀一七二二)其子「アスラッフ」の時に及び「ナジル」といふ者「サファビー」朝の裔を立てしが遂に自立して波斯王となり(西紀一七三六)西は土耳其を破り東は阿富汗斯坦及ひ莫臥兒帝國を略す其將「アーメット」は阿富汗斯坦に國を建てゝ近隣を併略す後阿富汗斯坦は「ドストモハメット」に篡せられ波斯は「アガムハメット」の領に歸す是を今の波斯「カジヤル」朝の始祖とす(西紀一七四九)露西亞は益版圖を擴め高加索地方を略し更に波斯を侵し裏海沿岸の地を取り又「タブリヅ」を陷れ遂に「アクラス」河北

露人波斯を侵す

英人の對露政略

露人中央亞細亞を略す

を奪ひて和を講す(西紀一八二八)後波斯は露西亞の後援を恃みて阿富汗斯坦に侵入し「ヘラット」を攻圍す英吉利は波斯に勸めて「ヘラット」の圍を解かしめ更に阿富汗斯坦と結びて露西亞に當らむと企てしが其王從はす英軍因て阿富汗斯坦を攻めて廢立をなしたり(西紀一八三八)既にして英軍は再阿富汗斯坦を征し舊王の位を復し同盟して波斯及ひ露西亞に當らむとす時に英吉利の勢は頗盛にして遂に俾路芝斯坦を保護國とし(西紀一八五四)波斯を破り又印度の叛亂を平け莫臥兒帝を廢し英吉利帝の直轄に歸するに至れり(西紀一八五八)露西亞も益侵略を逞くし基華と條約を訂結し(西紀一八四二)又敖罕、布哈爾の地を奪ひ遂に布哈爾を保護國とす(西紀一八六八)尋て伊黎を占領するに及ひ清國と紛議を生したりき

初め喀什噶爾王の後裔張格爾は敖罕の援をかりて屢回部

回部の擾亂

を侵す時に清は張格爾を虜にしたりしかと敖罕とは相善からざりき後長髪賊の難に際して西域に回教徒の亂起りしが敖罕王は其機に乘し張格爾の子「ブズルク」に兵を授け「ヤクブベク」を將として喀什噶爾に入らしめたり後「ヤクブベク」自立し回教徒を破りて天山南路を略し且獨立の承認を近隣の諸國に請へり英吉利は其承認を與へしが露西亞は聽かず「キルギス」族を制し進みて伊黎を占領し(西紀一八七一)又基華を下し敖罕を併す(西紀一八七六)清國は長髪賊の亂平くに及ひ左宗棠を陝甘總督とし新疆の回復を計り今帝の立つに及ひ諸城を回復し「ヤクブベク」を平け更に伊黎の返還を求め全權大使崇厚を露西亞に遣はし其委員と「リワヂヤ」に會して假條約を訂結す(西紀一八七九)然るに清國は其條約に異議を挿み兩國の平和將に破れむとするか如くなりしが別に全

清國回部を定む

清露の紛議

權大使曾紀澤を遣はすに及ひ兩國互に歩を讓り更に條約を結びて其局を終れり是を我か紀元二千五百四十一年とす(西紀一八八一)

英露の阿富汗經略

阿富汗斯坦は新王の立つに及ひ露西亞に通して英吉利に背きしかは印度總督「リットトン」は「カブル」を攻めて再廢立をなしたりき露西亞は「アスカバット」を略し「メルブ」を取り英吉利と協議して阿富汗斯坦の北境を確定したりき(西紀一八八七)但東境は露英清の三國に關連して久く決定せさりしが近年に至りて纔に其局を結べり是を「パミール」問題とす(西紀一八九五)

第五十六章　緬甸暹羅越南の形勢

佛清の戰爭

緬甸は「ボォドプラ」の時「アラカン」を略し又暹羅の地を取り更

緬甸と英國と和戰

に事によりて英領印度と不和を生す時に英軍は「イラワヂ」河を溯り緬甸の軍を破りて各地を下し將に其都阿瓦に向はむとす緬甸因て土地を割き償金を出して和を講したり（西紀一八二五）後「パガメン」の時に至り更に英吉利人と隙を生し兵を交へたりしがまた和を請ひて其局を結べり（西紀一八五二）時に越南は暹羅と事を構ひ又佛蘭西と難を生したりき

越南暹羅の交爭

初め安南の阮福映逃れて暹羅にありしが佛蘭西人の助を借りて國に歸り阮文惠を滅して都を紫棍に定め（後順化に移れり）國を越南と號し更に清の封册を受けたり（西紀一八八五）後暹羅は越南及び柬埔寨を侵し又柬埔寨を助けて越南の兵を破りしかは越南は援を佛蘭西に請ひたりき（西紀一八〇二）佛蘭西人は越南の屢耶蘇宣教師を殺せるを以て順化に來りて要求せる所ありしが越南の應せざるを以て都郎及ひ

佛人越南を侵す

柴棍を取り頻に各地を下す越南因て地を割き港を開きて和を講ずたりき（西紀一八六二）是より佛蘭西人は立脚の地を得て遂に柬埔寨を保護國となすに至れり是を我が紀元二千五百二十七年とす（西紀一八六七）

佛人屢越南を侵す

後越南は再事によりて佛蘭西と戰ひしがまた港を開き耶蘇教を保護することを約して和を講せり（西紀一八七四）かくて十餘年の間事なかりしが兩國また事によりて隙を生し佛蘭西人は南定河内を攻陷す時に越南は黑旗兵（長髮賊の殘類）の助を受け更に援を清國に求む（西紀一八八三）黑旗兵は河内を復し南定を攻めしが佛蘭西人は順化を攻め越南と平和條約を結びて保護國となすされど黑旗兵は猶猖獗にして佛蘭西人に抵抗したりき

是より先き清國は總理各國事務衙門を設け（西紀一八六一）公使を

清國の形勢

各國に派し上海、天津、南京に軍器製造所を設け福州に造船所を作り旅順、威海の防備を嚴にし瀛船を浮べ電信を通し頗舊觀を改めたりしが中に守舊固陋の徒多く未た全く改革の實を擧くるに至らず且中興の名臣曾國藩の如きは既に薨し李鴻章左宗棠の徒ありしかと清國の實力は其外觀の大なる程にはあらざりき

清佛の交戰

越南が援を清國に求むるに方り李鴻章は和を主とし左宗棠は戰を主としたりしが遂に越南を其藩國とし佛蘭西駐在の公使曾紀澤をして其政府に談判せしめたり然るに其首相「フキリー」固く執りて應せず兩國の平和遂に破れて宣戰をなすに至れり佛將「ネグリエー」は陸軍を率ゐて鎭南關内に進入し「クールベー」は海軍を率ゐて福州造船所を攻めて清艦を擊沈し又臺灣を攻めて其諸港を封鎖したり時に清

清佛の和議

國にては主戰の說最勢力あり左宗棠は兵を率ゐて南下し馮子材は諒山を回復す佛蘭西にては「フキリー」の内閣倒れしより政策一變し遂に清國と平和條約を結びたれと越南の主權は佛蘭西に歸するとなれり是を我か紀元二千五百四十五年とす(西紀一八八五)是の年英吉利は緬甸を屬領とす後佛蘭西は暹羅より眉公河東の地を取れり清國は佛蘭西と戰を交ひしより臺灣を一省となし益軍備を修めたり〳〵が十年を經て日本と戰ひ遂に其地を割くに至れり

英佛緬甸暹羅を經略す

第五十七章　朝鮮の形勢　日清露の關係

朝鮮は清國に對して常に藩禮を怠らず又日本の德川政府に對しても恭順なりしが西洋諸國とは遂に事端を構ふに至れり憲宗の時佛蘭西の宣教師來りて耶蘇教を傳へ其勢

朝鮮西人と難を構ふ

頗盛なりしが後憲宗殂し哲宗を經て今王に至り其父李昰應政を執り大に西人を忌み其宣教師及び信徒を虐殺す佛蘭西因て軍艦を送りて江華島を砲撃す(西紀一八六六)後阿米利加人(合衆國下同じ)も亦殘害を受けしかは軍艦を送りて其砲臺を陷れたりき(西紀一八七〇)

日本の形勢

日本の德川政府は久く鎖港保守の方針を取りしが露西亞に蝦夷を侵され樺太の北部を占領されたり(西紀一八五一)尋て阿米利加及ひ歐洲諸國と交通するに及ひ内亂起り德川政府滅ひて朝廷復興し開國進取の宏謨を定めたり(西紀一八六八)かくて使を朝鮮に使はして舊好を修めむとす時に李昰應は其求めに應せず後また通商を拒みしかは征韓の論大に起れりされと終に行はれざりき尋て日本の軍艦江華島にて砲撃されしかは黑田清隆を遣はして詰問せ〜め且通商のと

日本と朝鮮との修交

を謀れり朝鮮遂に其罪を謝し釜山の外に仁川、元山の二港を開きて修交條約を結びたり時に我か紀元二千五百三十六年なり(西紀一八七六)是より西洋各國とも條約を結び頗獨立國の觀をな〜たれと清國に對しては猶藩禮を執れり

臺灣琉球の紛議

日本は露西亞と約して千島と樺太とを交換し(西紀一八七五)又臺灣の土蕃か琉球の漂流者を殺せるを以て遂に兵を出して之を降したりき時に征臺のことに關して清國との紛議起りしかは大久保利通を遣はして清國と談判せしめ償金五十萬兩を取りて局を結べり(西紀一八七四)されと清國は是より日本の野心を疑ひ其琉球を縣とするに及びて其念益甚く征日の議を唱へたる者さへありき

朝鮮の李昰應は王妃閔氏と合はずして退きしが京兵を煽動〜て閔族の第を破り又日本公使館を襲撃す日本因て井

朝鮮初度の亂

上馨を遣はして詰問せしめ償金五十萬圓を取り且日本の兵を京城に置きて公使館の護衛をなすことを定めたり清國も軍艦を派し李昰應を執へて去り兵を送りて京城に駐めしめたり（西紀一八八二）是れ實に日清衝突の端なりき時に朝鮮に二黨あり獨立黨は日本に賴り事大黨は清國に賴りて相軋れり既にして獨立黨の金玉均等相謀りて事大黨の閔台鎬等を殺し國王を擁して日本公使の援護を請ひしが清兵は事大黨を助け國王を復して日本の兵を擊ち遂に其公使館を燒く公使逃れて日本に還り金玉均等も亦來れり（西紀一八八四）

朝鮮再度の亂

是に於て日本は井上馨を朝鮮に遣はして談判せしめ償金十三萬圓を取ることを定め又伊藤博文を清國に遣はし其全權大臣李鴻章と天津に會し兩國撤兵の議を定め且事ありて兵を出す時は互に通告すべきことを約したりき時に我が

天津條約

紀元二千五百四十五年なり（西紀一八八五）爾後兩國事なかりしが清國の勢頗盛にして其欽差袁世凱は事大黨の首領閔泳駿を使嗾して威權を振へり李昰應は清國より還されしがまた政務に與る能はざりき時に朝鮮王は清國の威壓に堪へず密に露國に賴らむと謀りて事遂に漏れたり李鴻章因て袁世凱に命して益威壓を加へしめ又日本に逃れたる金玉均等の歸來を憚り刺客を遣はして刺殺せしめむと謀れり既にして金玉均は上海に至りて刺殺されしが清國政府は軍艦を以て其屍を朝鮮に送れり既にして朝鮮には東學黨の亂起り其勢猖獗にして將に京城を襲はむとす朝鮮因て救を清國に求めしかは清國は兵を送りて牙山に上陸せしめたり日本も亦兵を出して京城に入り全權公使大鳥圭介をして袁世凱と謀り日清協同して

清國の朝鮮經略

東學黨の亂日清の出兵

朝鮮の國政を改革せしめむと謀れり然るに其議協はず因て日本は獨立扶持の策をとり李是應を起して國政を攝せしめ牙山の清兵を斥攘せむとす時に清の軍艦兵を牙山に送らむとし豐島に至りて日本の軍艦と戰を交ひしより兩國遂に宣戰をなすに至れり是を我が紀元二千五百五十四年とす（西紀一八九四）

日清の宣戰

かくて日本の兵は牙山を攻めて清兵を破りしかは清兵は皆平壤に走れり平壤には清の將衛汝貴陸路より大兵を率ゐて來り壘を築き寨を修めて防守の計をなす日本は山縣有朋を第一軍の司令官とし野津道貫をして平壤を攻め〳〵め遂に其城を拔き長驅〳〵て鴨綠江を渡らむとす且日本の艦隊は清の艦隊を黃海に破りしかは海路の梗塞全く開け大山巖は第二軍を率ゐて花園口に上陸し金州旅順口を陷

日軍の連戰連勝

れて蓋平を攻め第一軍は九連、鳳凰の諸城を下し海城を取り兩軍力を合せて牛莊、田庄臺を破り別軍は更に澎湖島を略し又威海衛を拔く是に於て彰仁親王は征清總督となりて旅順に赴き將に直隷に向はむとす

日軍の連戰連勝

是より先き清國は兩回使を日本に遣はして和を議せしめむとしたれど皆斥けられて果さず因て更に李鴻章を遣はし〳〵日本の全權委員伊藤博文と馬關に會して平和條約を訂結し清國は朝鮮の獨立を認め償金二億兩を拂ひ遼東半島及ひ臺灣、澎湖を割き沙市、重慶、蘇州、杭州を開くことなれり

日清の和議

西洋各國は日清交戰の際には局外中立を守りて勝敗を觀望したりしが清か遼東半島を割くに及び露西亞は獨逸、佛蘭西と連合して異議を唱ひ日本に其地を占領せざらむことを望みたり日本因て遼東半島を清國に還して代償金三千

露獨佛の干涉

萬兩を取れり是を我か紀元二千五百五十五年とす（西紀一八九五）

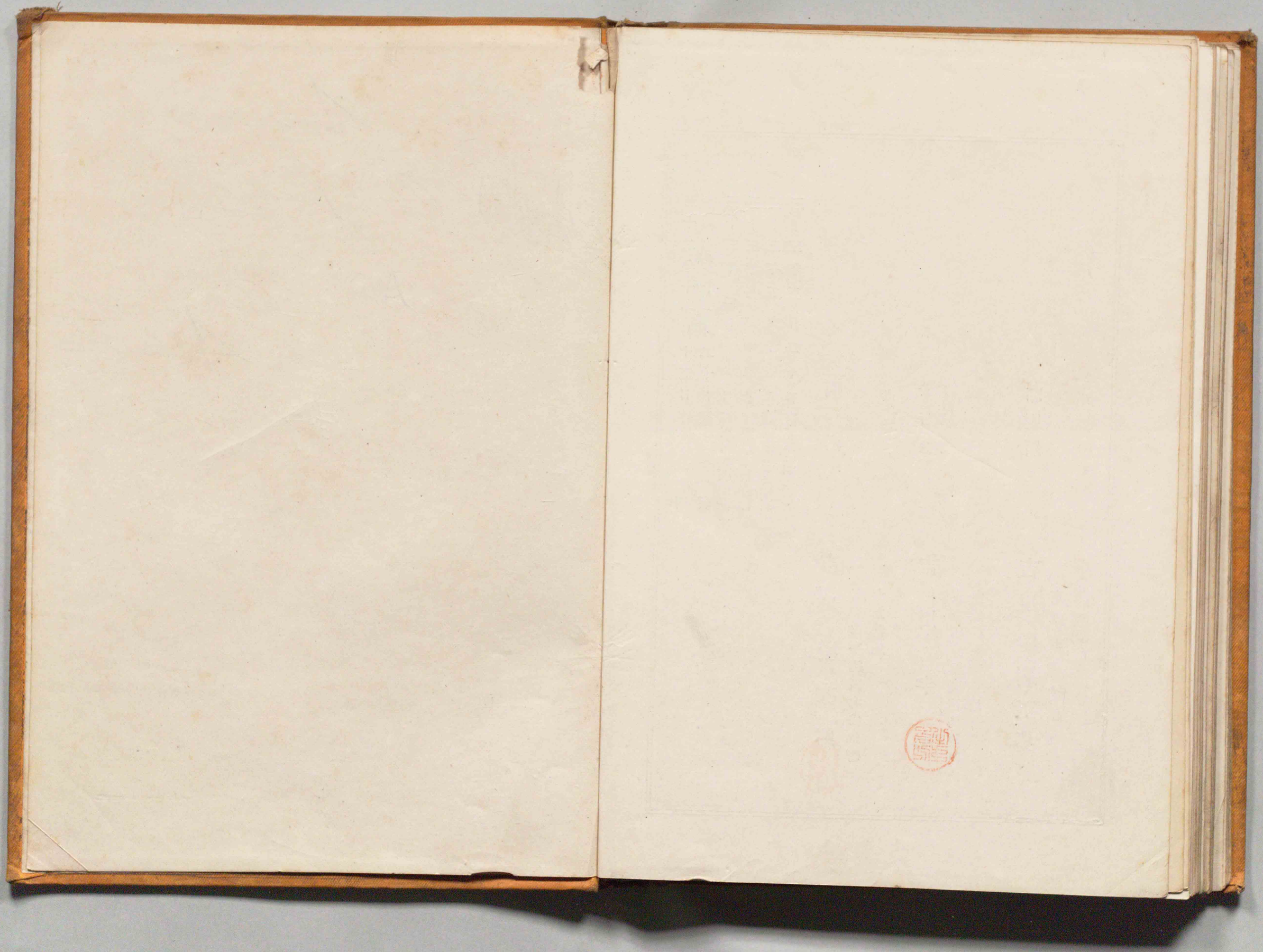
刪正 東洋史要 終

明治三十二年十一月十五日印刷
同　年十一月二十日發行
同　三十三年三月五日訂正第二版印刷
同　三十三年三月十二日訂正第二版發行
同　三十三年五月十五日訂正第三版印刷
同　三十三年五月二十日訂正第三版發行

編者　市村瓚次郎　東京市牛込區北山伏町十九番地

發行兼印刷者　吉川半七　東京市京橋區南傳馬町壹丁目拾貳番地

印刷所　吉川印刷工場　東京市京橋區柳町五番地



Lere Do Asa

TSHIKAWA Asano's Book

Le

S Shere, Do you will not con

Lere nod

T Ther can't contend

OSHIKAWA Asano will not on-on

Asano's book

OSHIKAWA. Can you not

Asano's Book.

Oshikawa Can you not Asana

Yayama Ken Second Middle-school

OSHIKAWA Third Year

Class

Asano Asano

Asano. Asano

Asano

Asano. Asano

Asano Asano

Asano Asano

Asano

Asano

Asano.

Asano O. Tsuchi.

Asano.

野口 Asano.

Asano

野口 吉

what 野口

吉野 吉

吉野 吉

広島大学図書
2000081609